

521-Ku72ウ

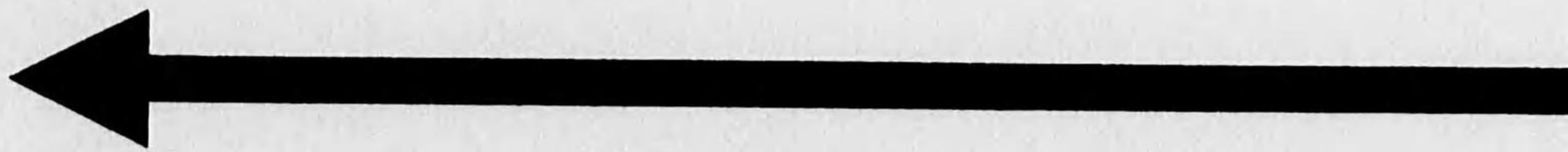


1200500745218

1
72
⑤



始

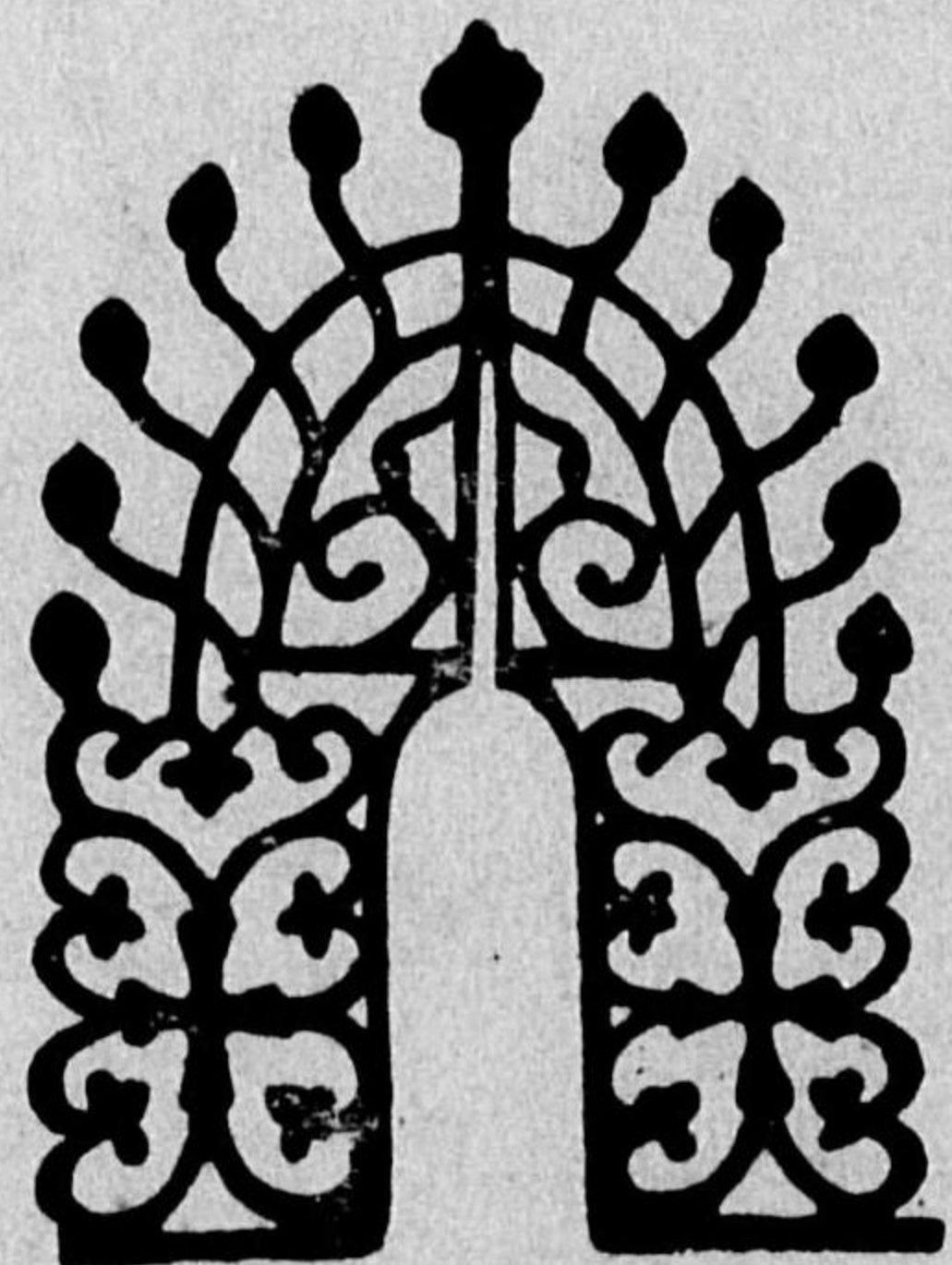
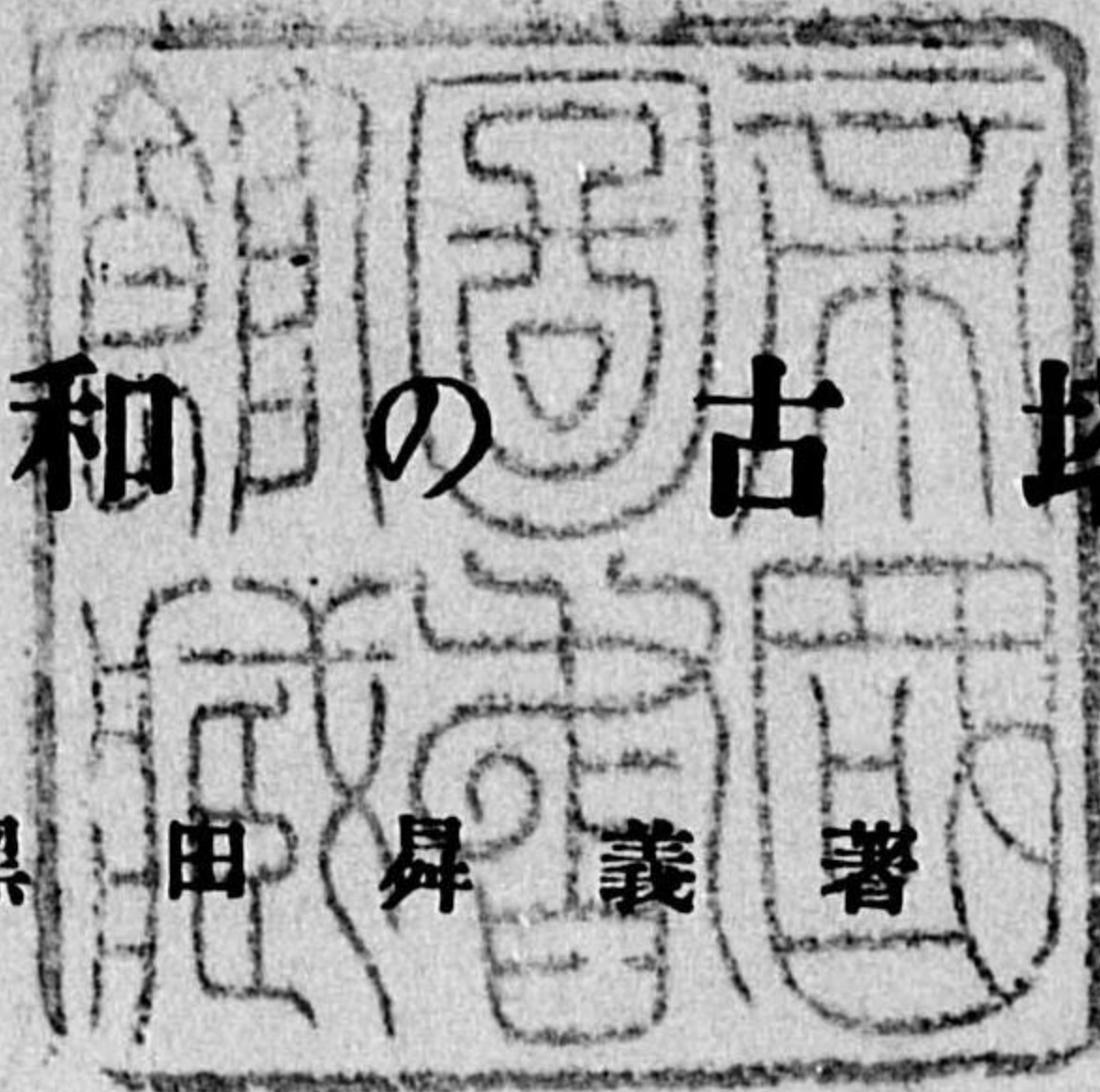


エト591

521
KU72

大和の古塔

黒田昇義著

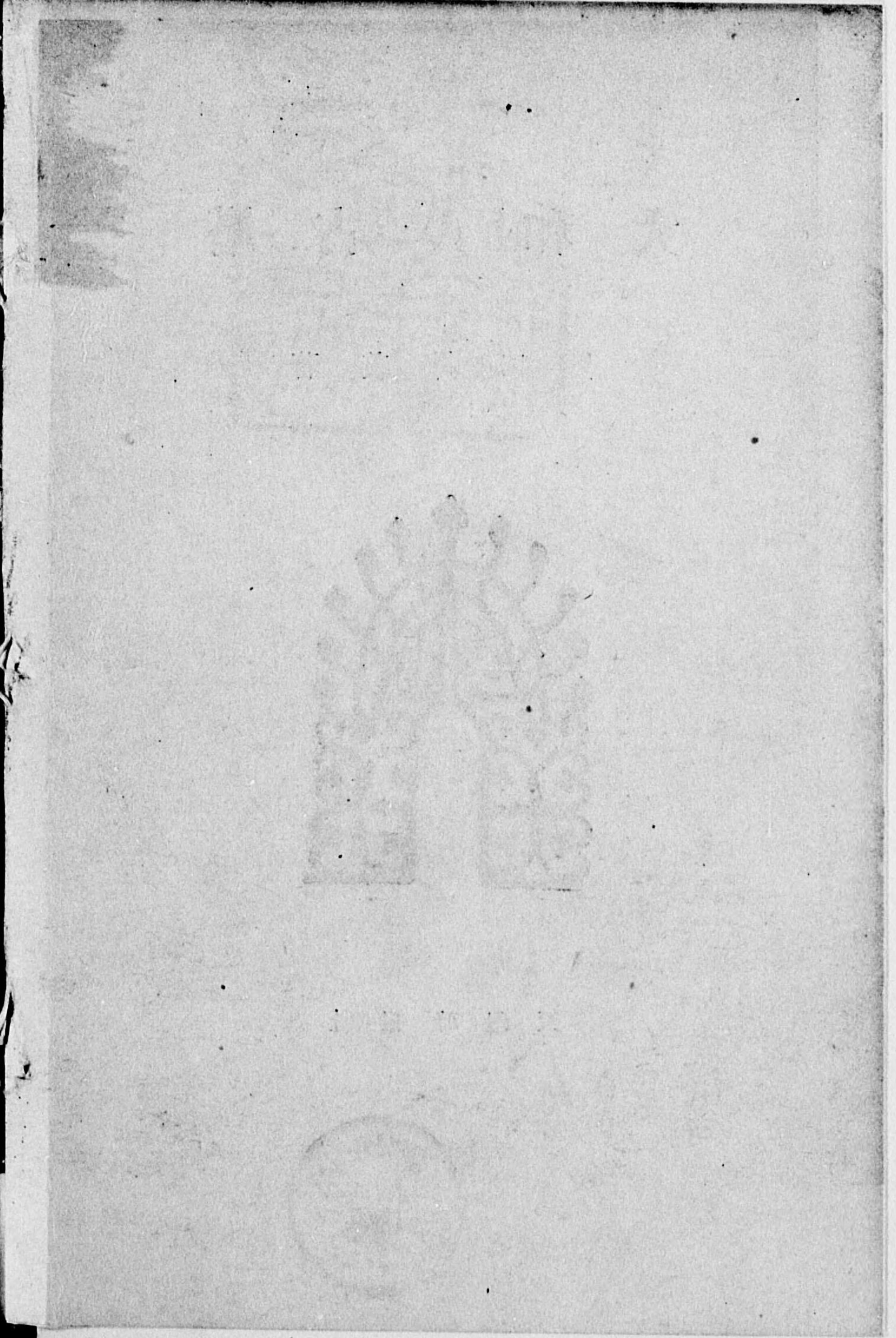


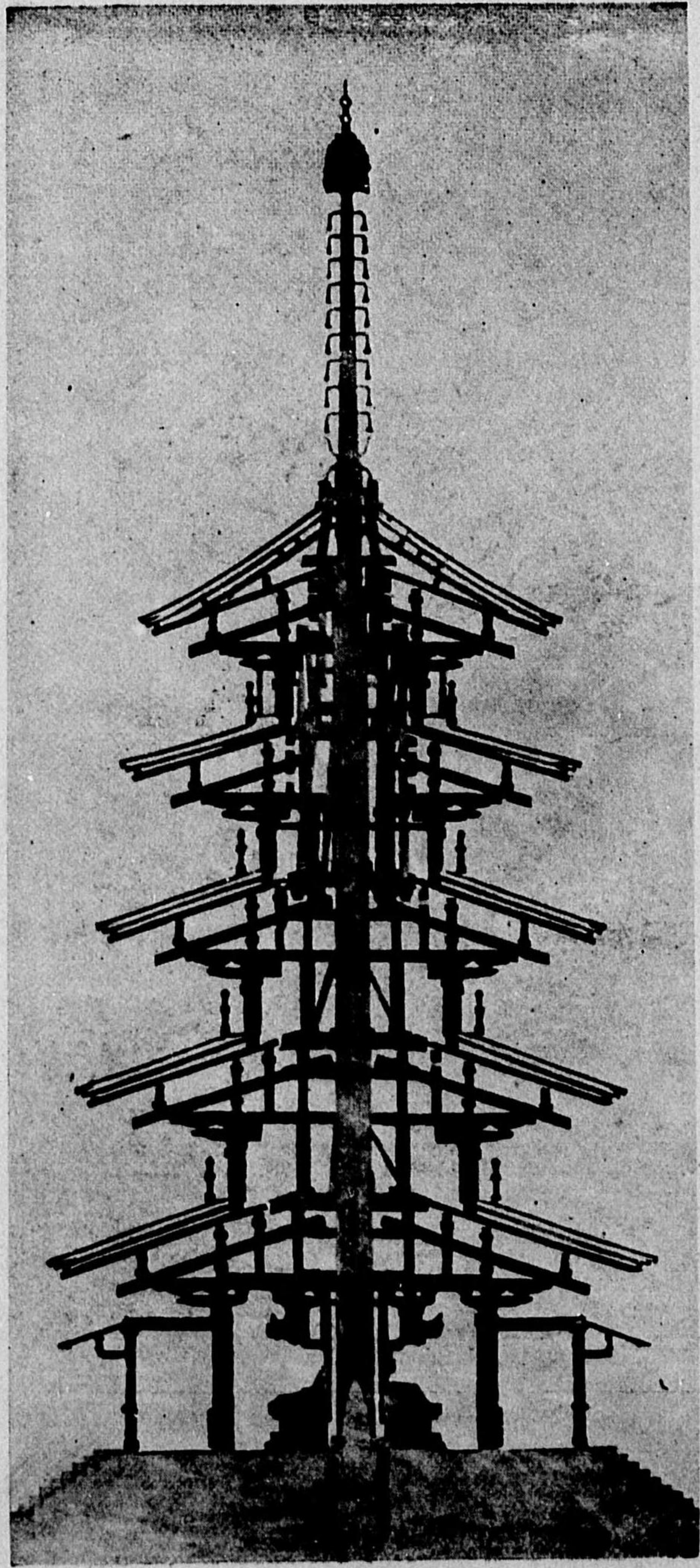
天理時報社





圖版一 法隆寺伽藍

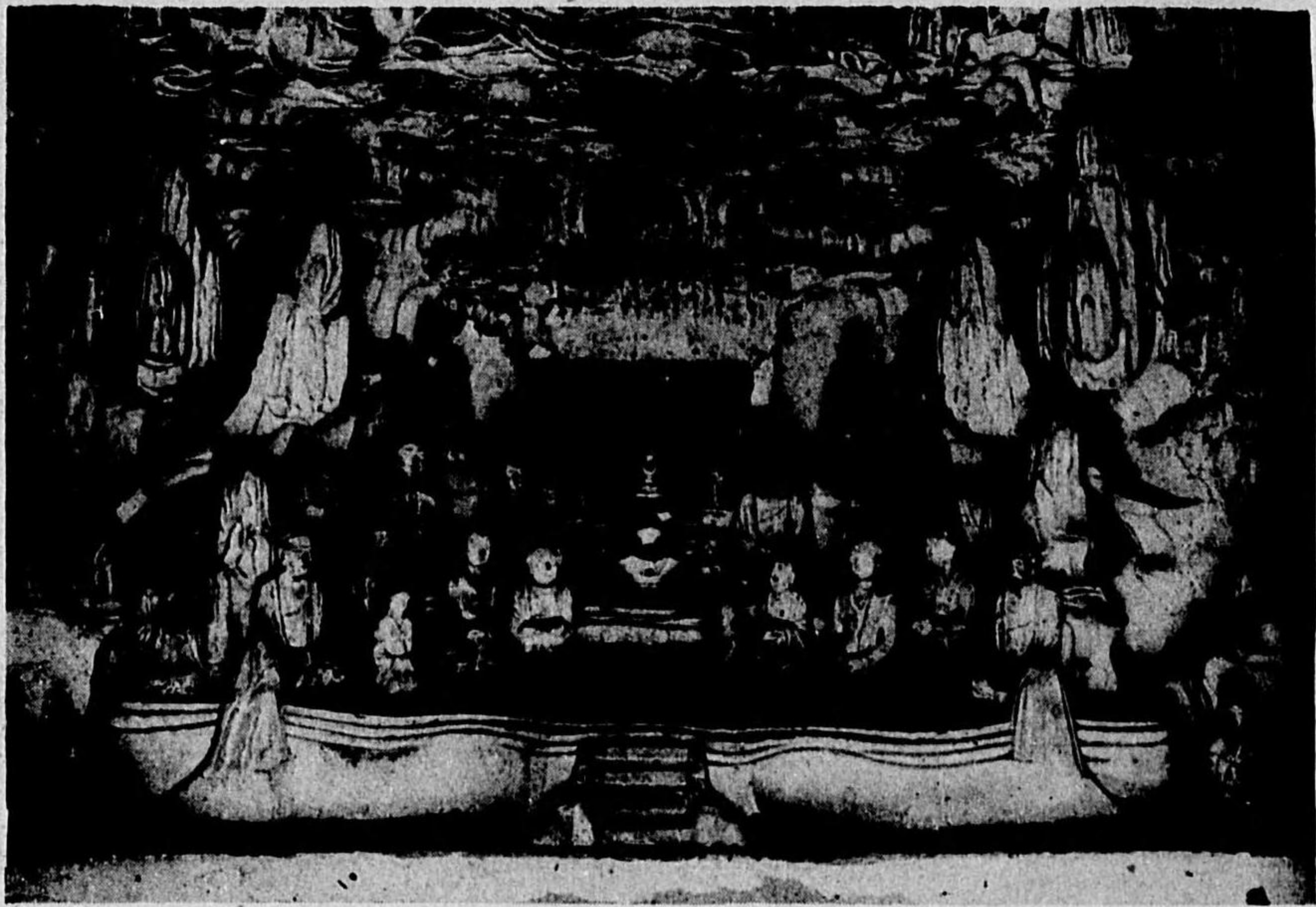




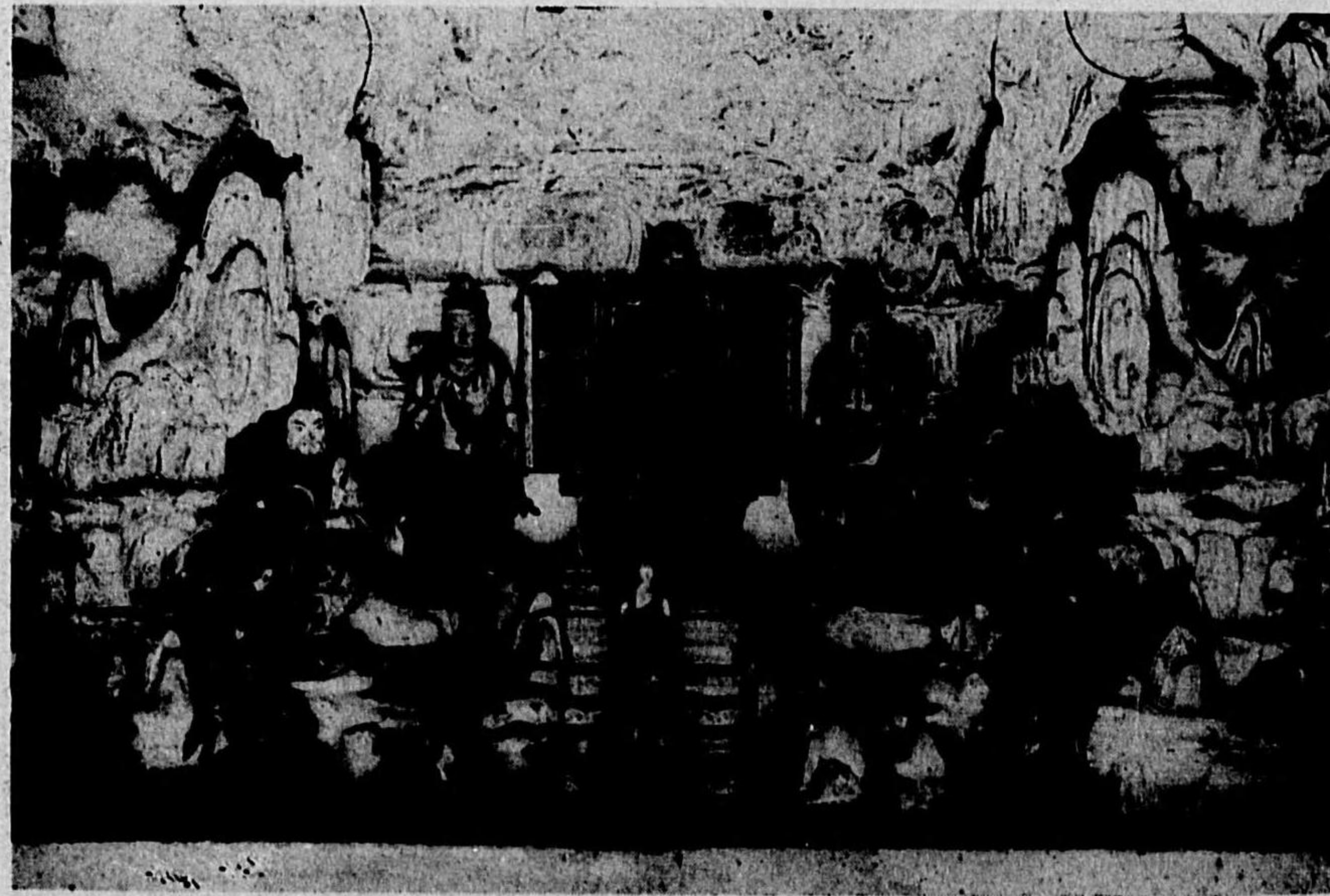
圖版三 法隆寺五重塔實測圖



圖版二 法隆寺五重塔



西面

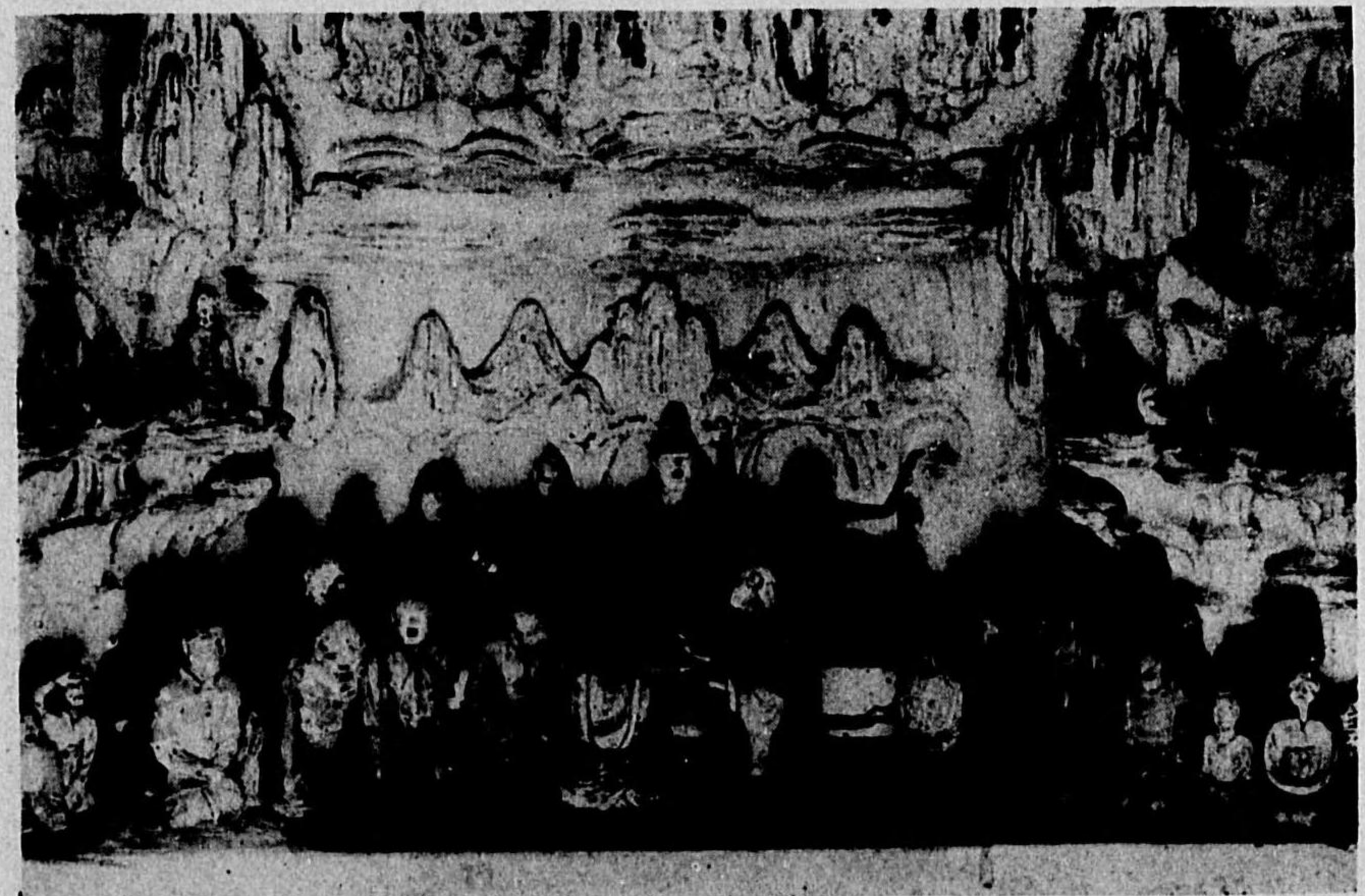


南面

圖版五 法隆寺五重塔塑像 二

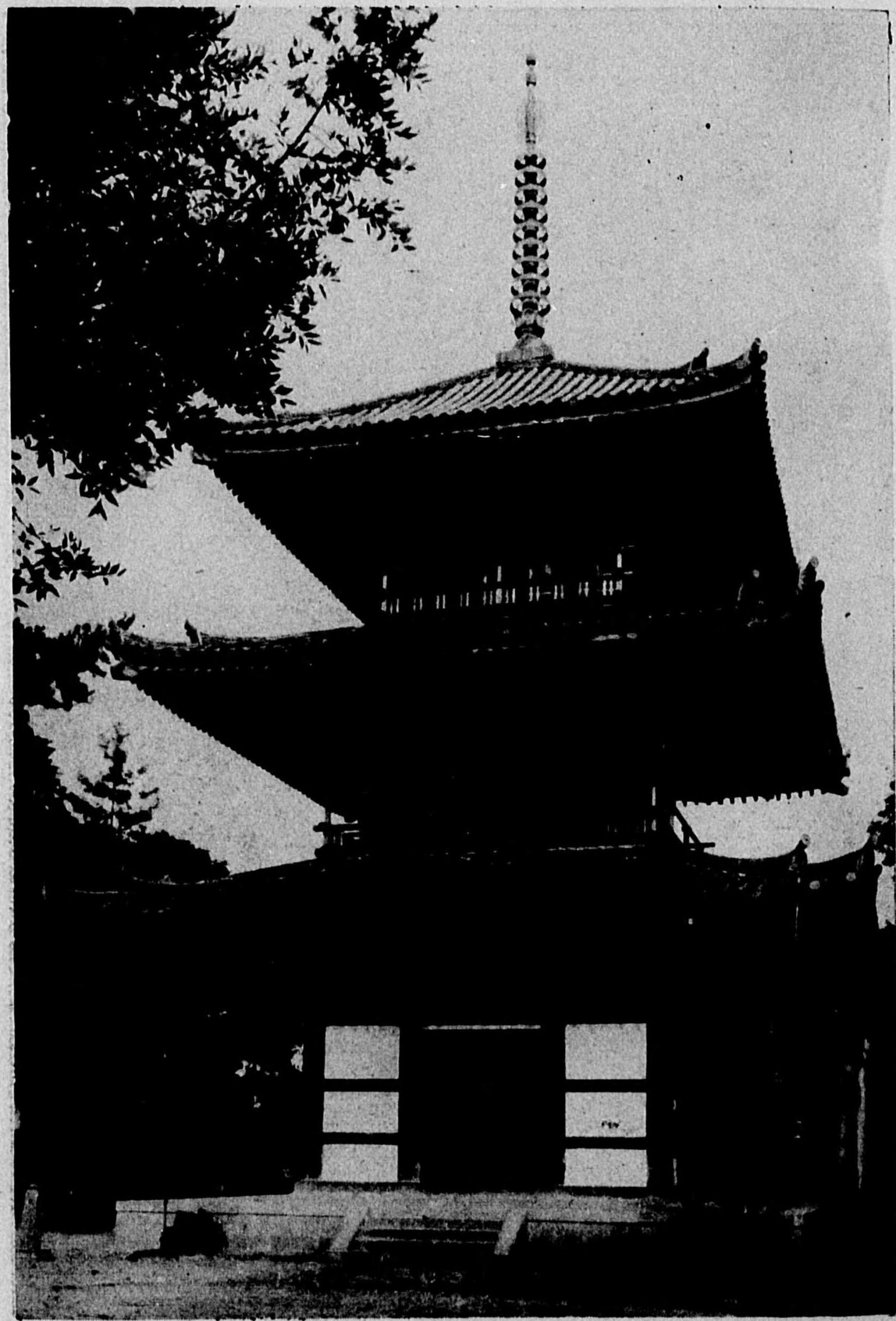


東面

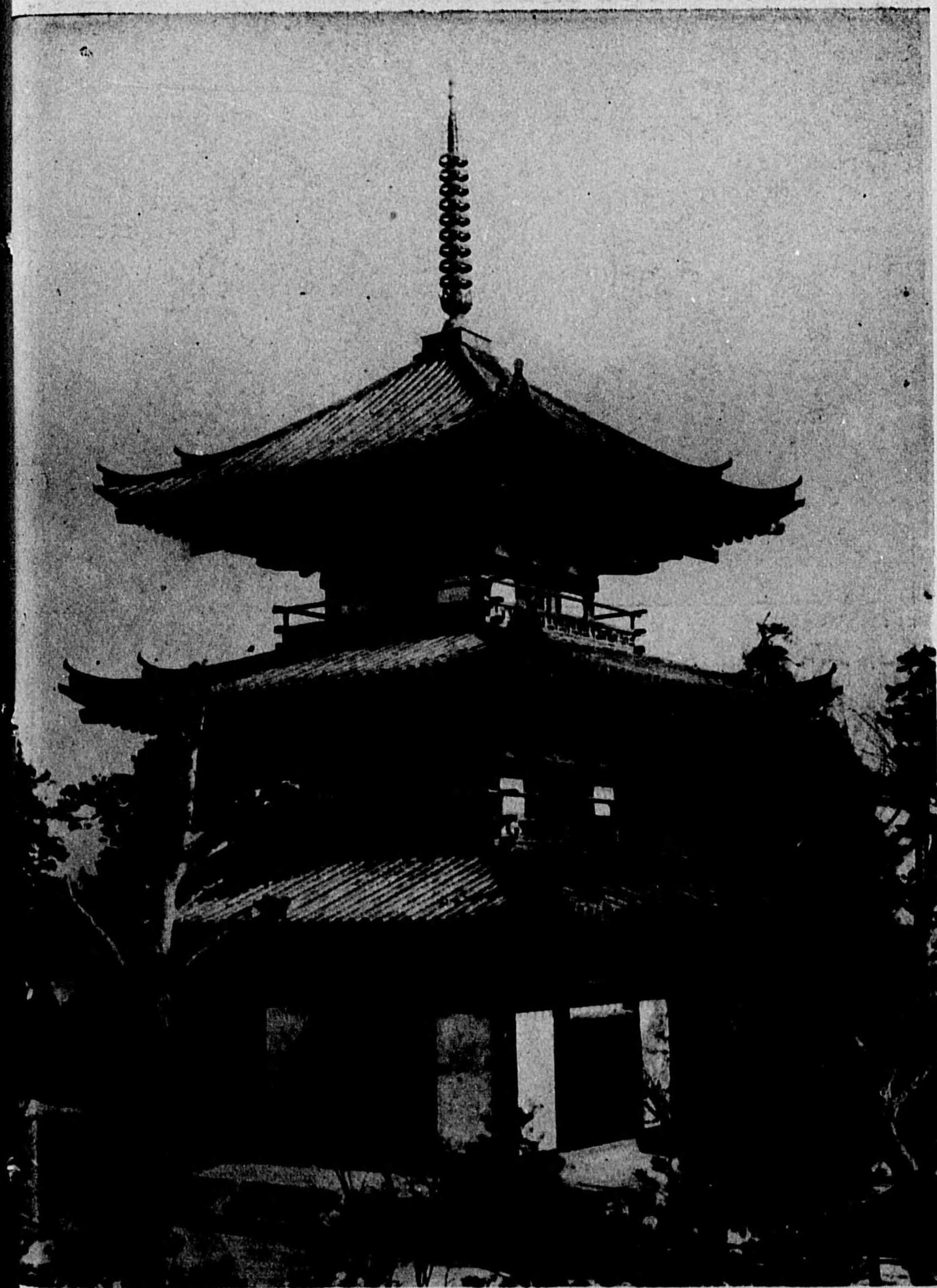


北面

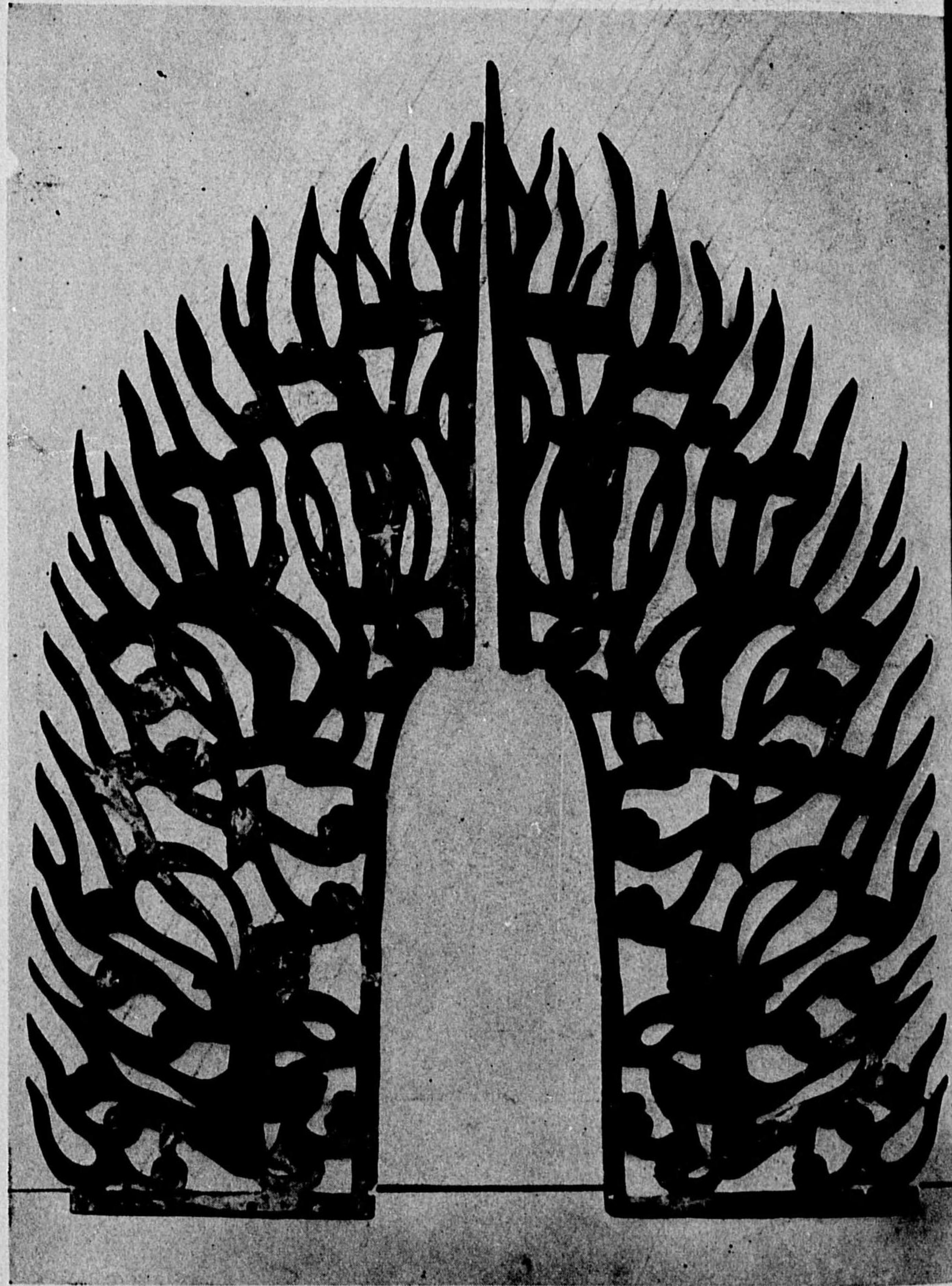
圖版四 法隆寺五重塔塑像 一



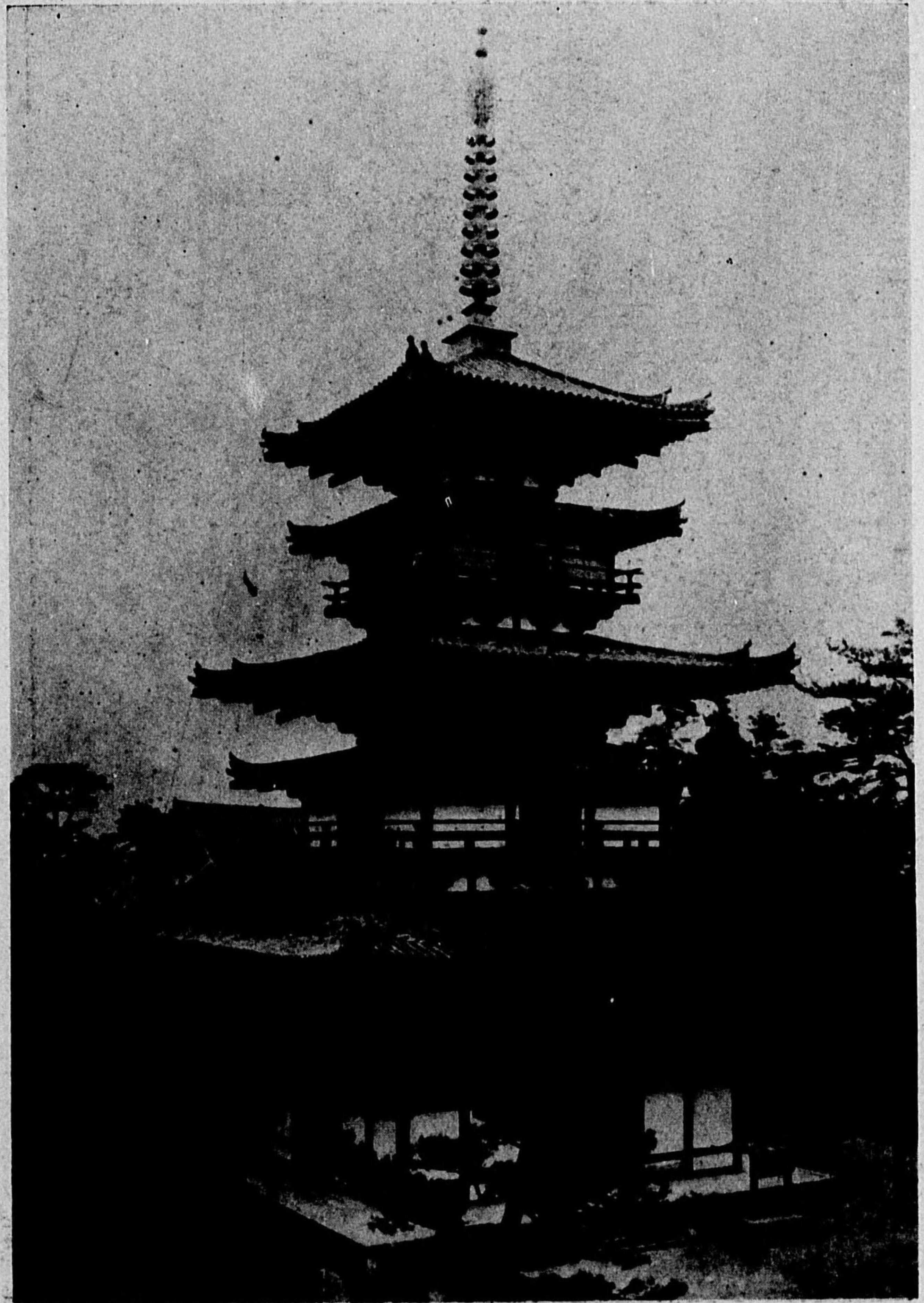
圖版七 法起寺三重塔



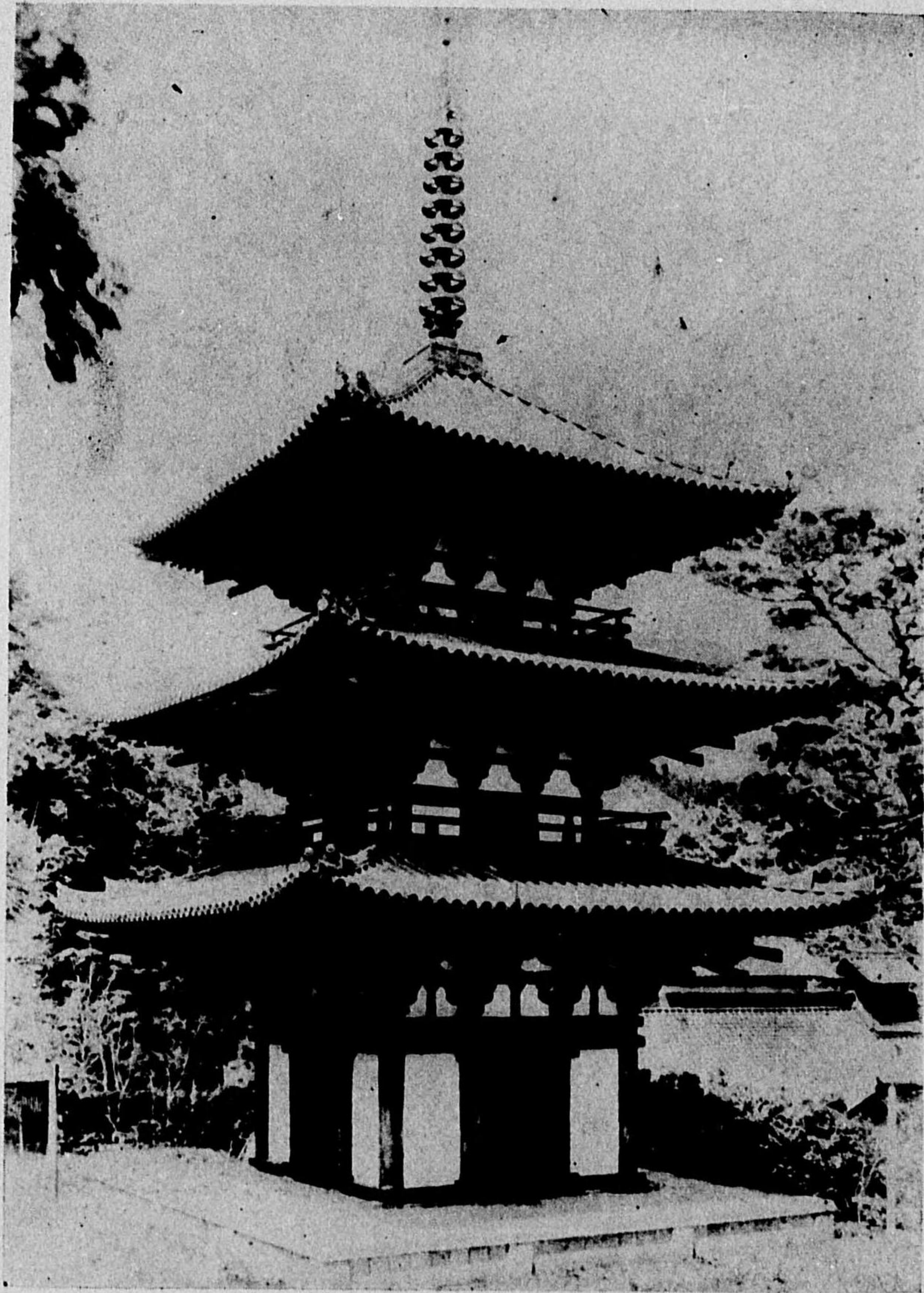
圖版六 法輪寺三重塔



圖版九 藥師寺三重塔水烟



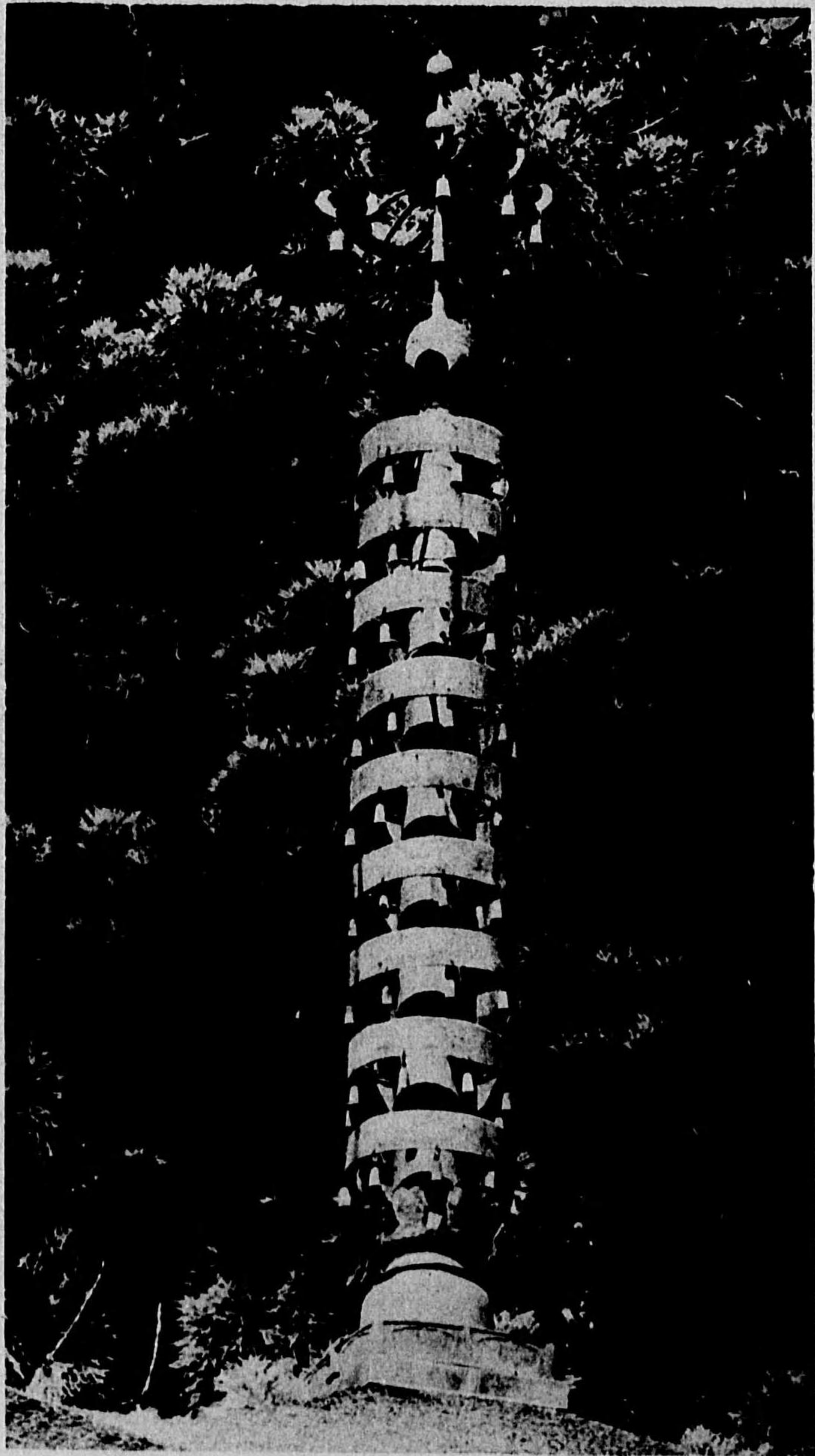
圖版八 藥師寺三重塔



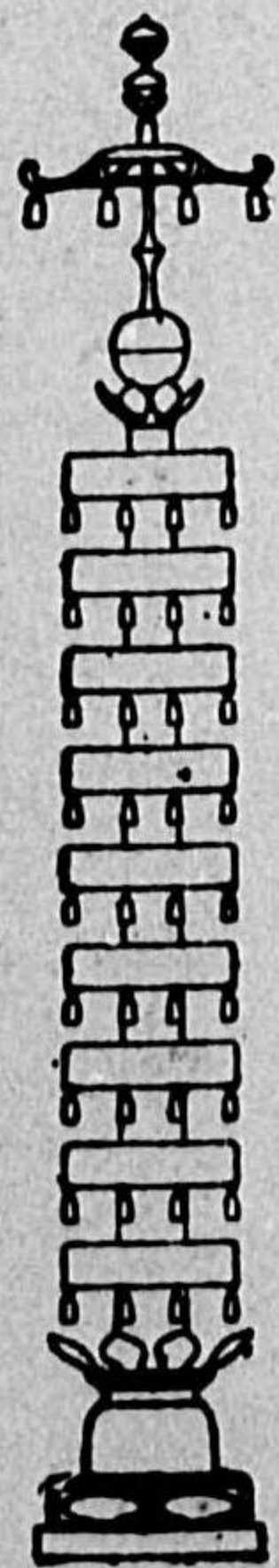
圖版一一 當麻寺西塔



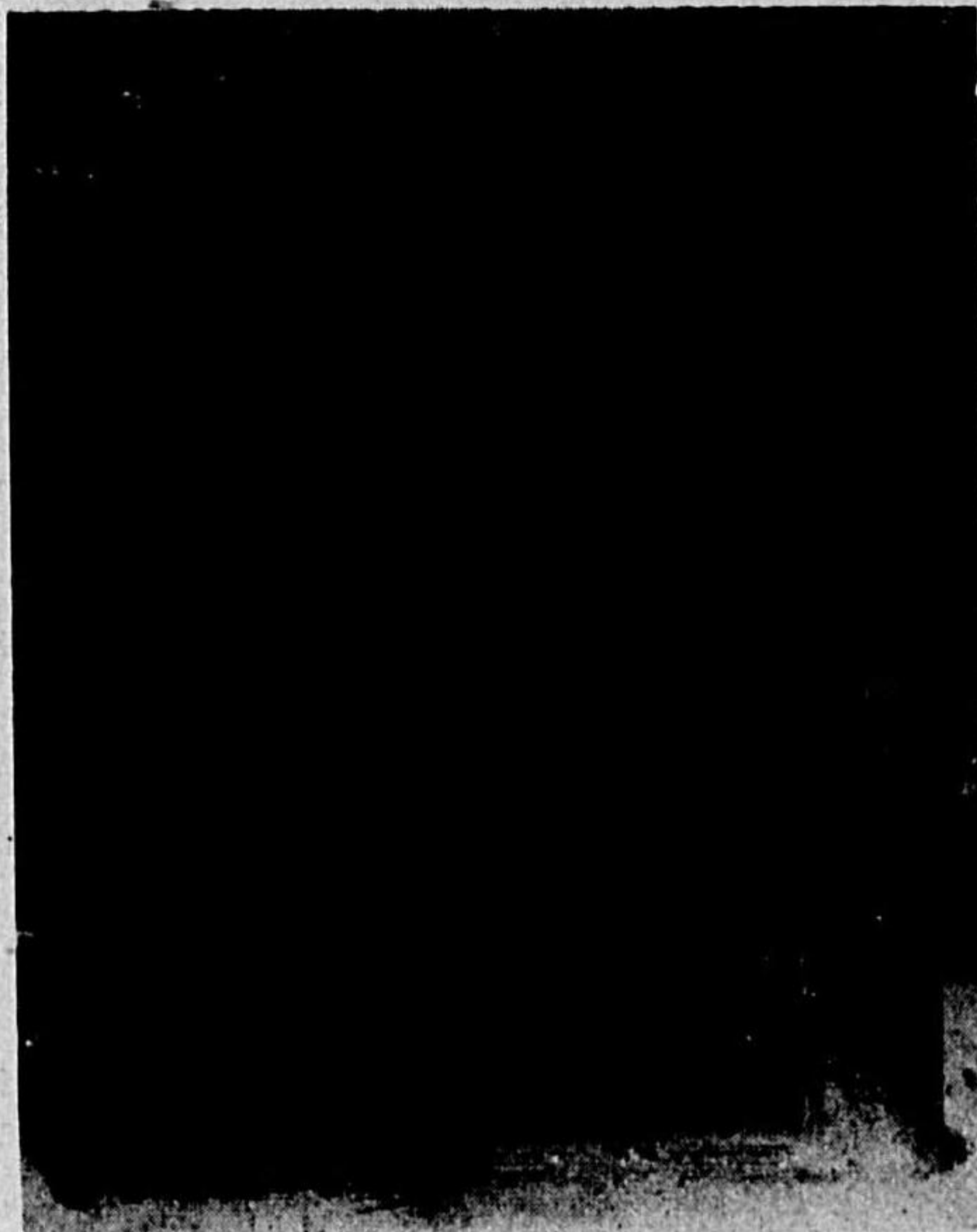
圖版一〇 當麻寺東塔



圖版一三 室生寺五重塔相輪



圖版一二 室生寺五重塔



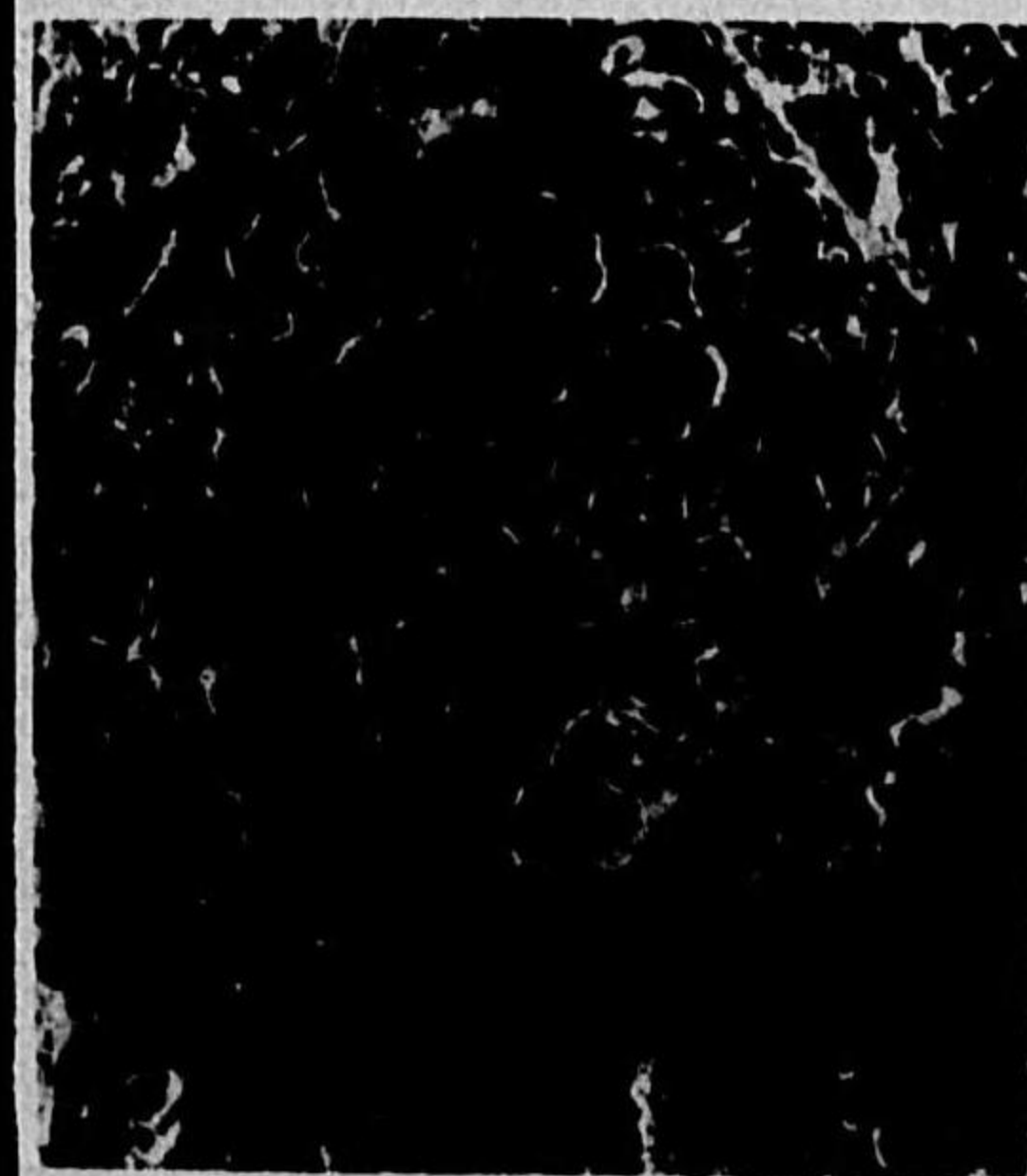
内陣



天井格間彩畫

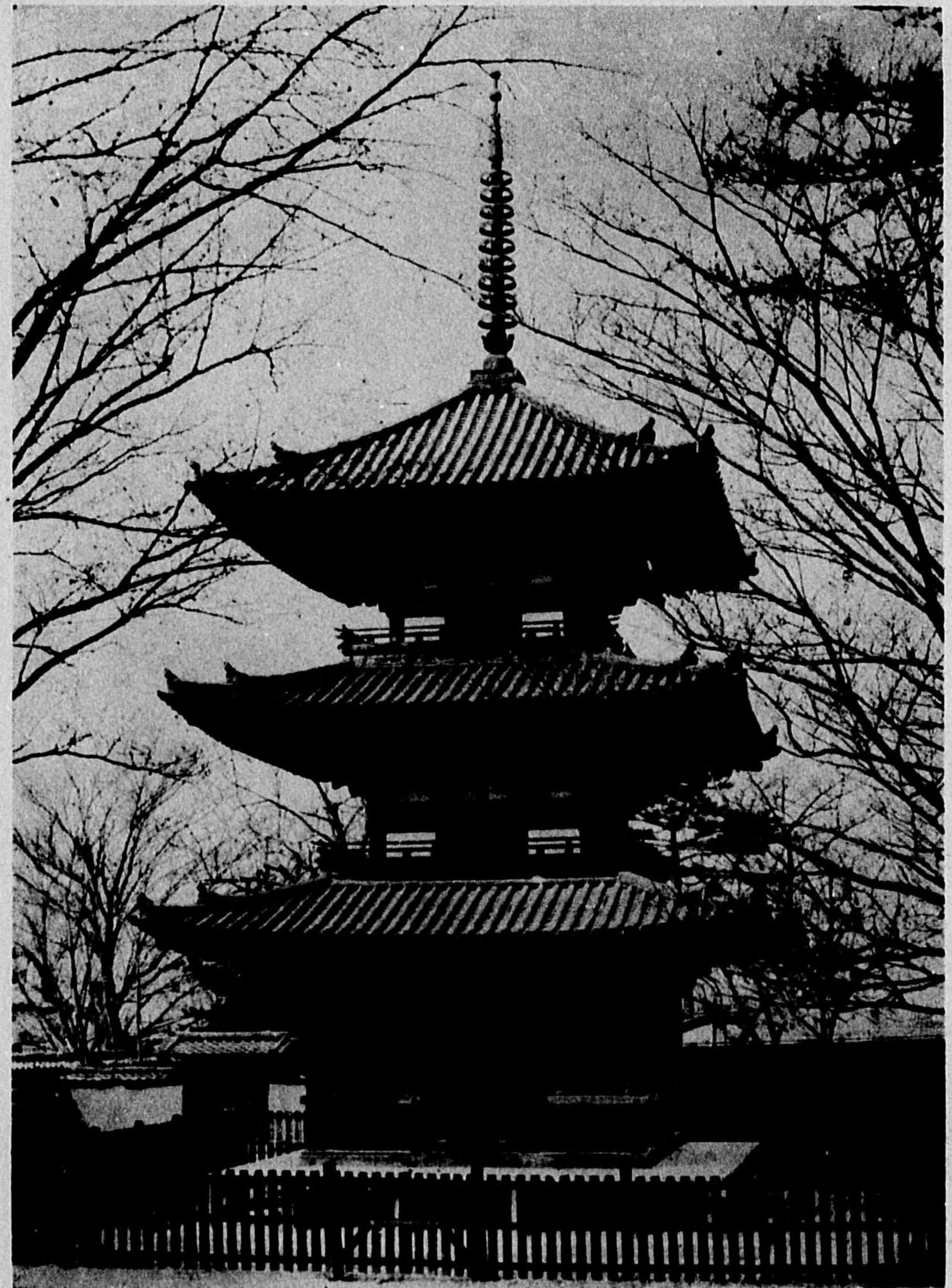


南面千佛畫



北面扉方立内面彩畫

圖版一五 興福寺三重塔內部



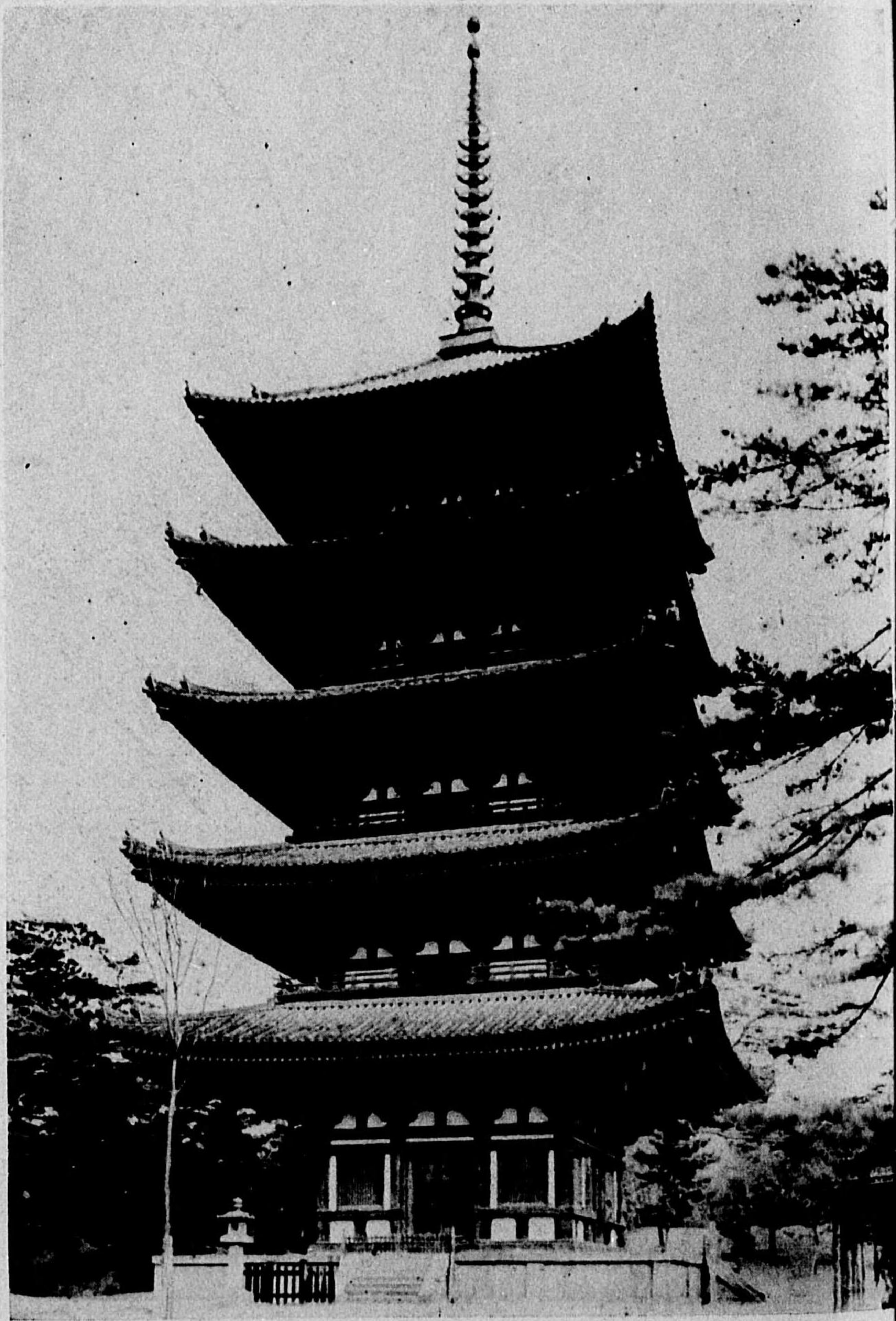
圖版一四 興福寺三重塔



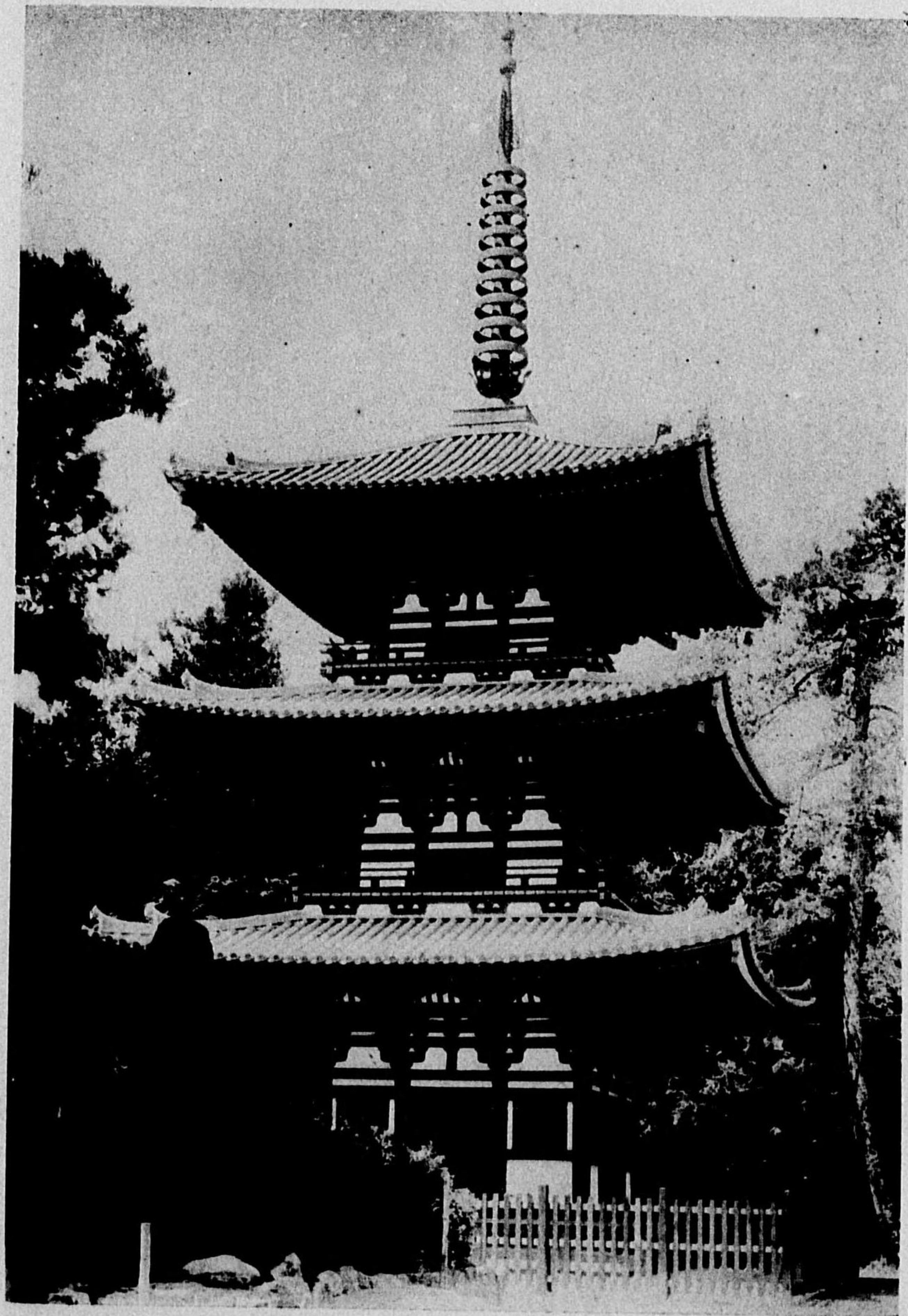
圖版一七 靈山寺三重塔內部



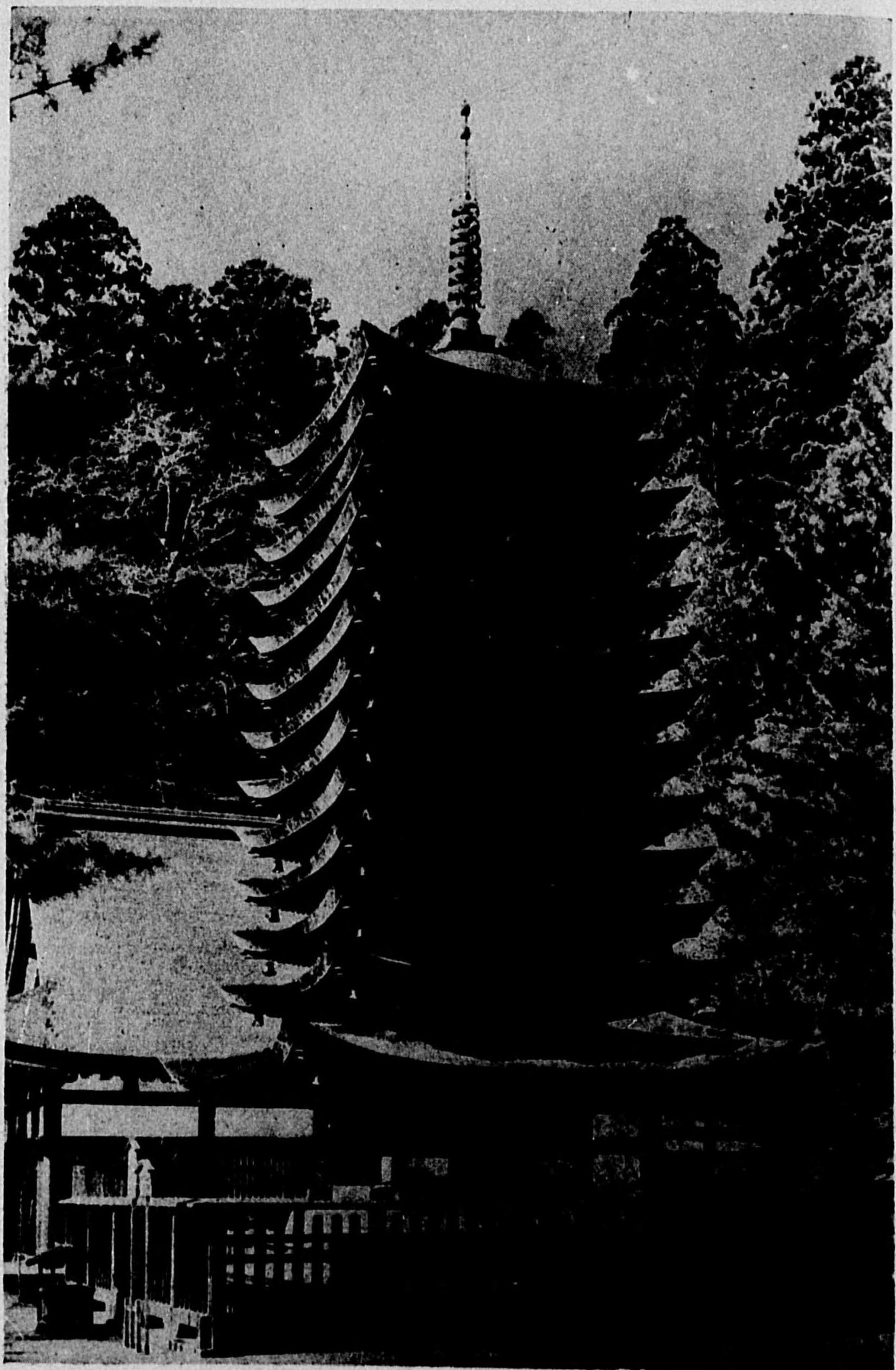
圖版一六 靈山寺三重塔



圖版一九 興福寺五重塔



圖版一八 百濟寺三重塔



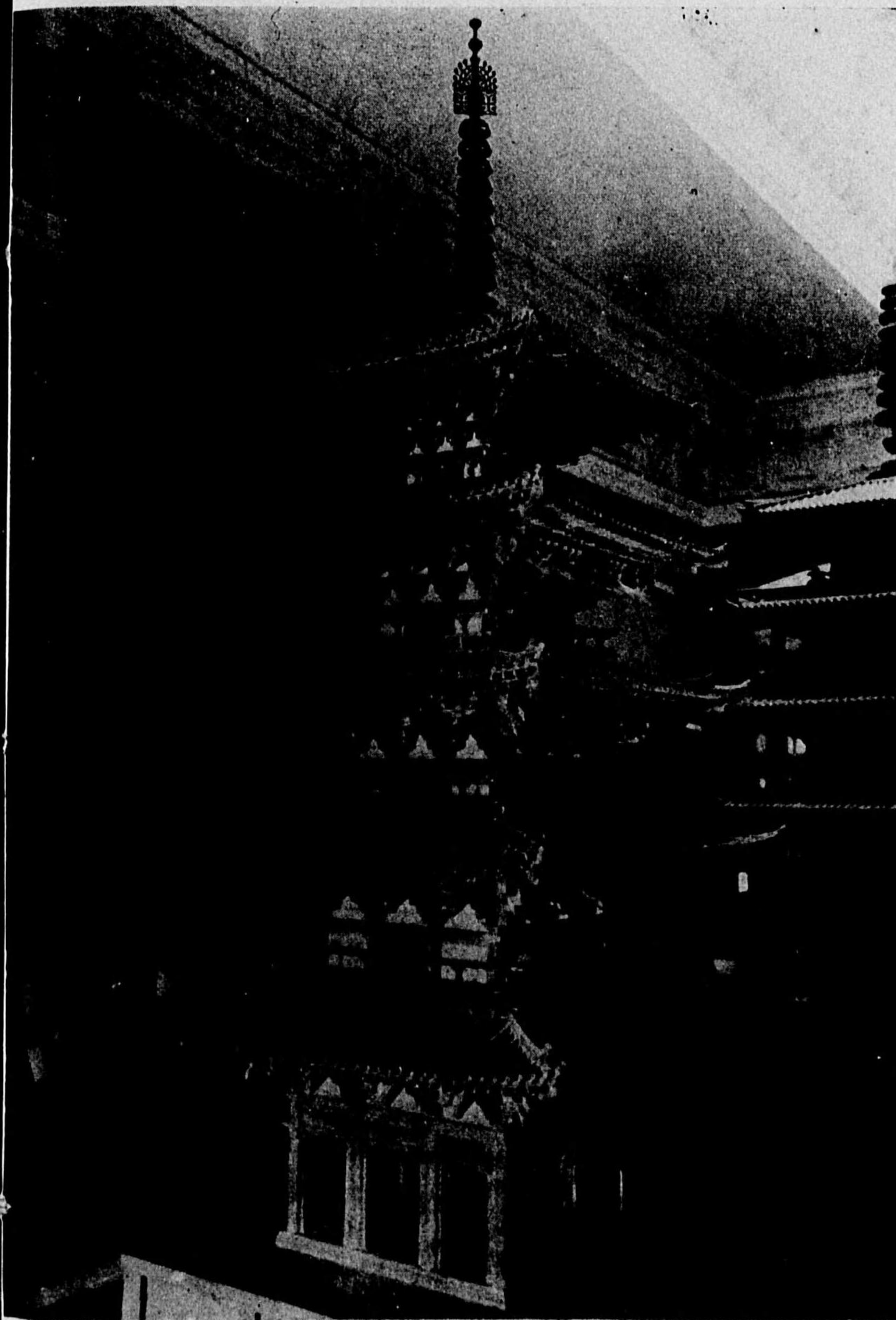
圖版二一 談山神社十三重塔



圖版二〇 南法華寺三重塔



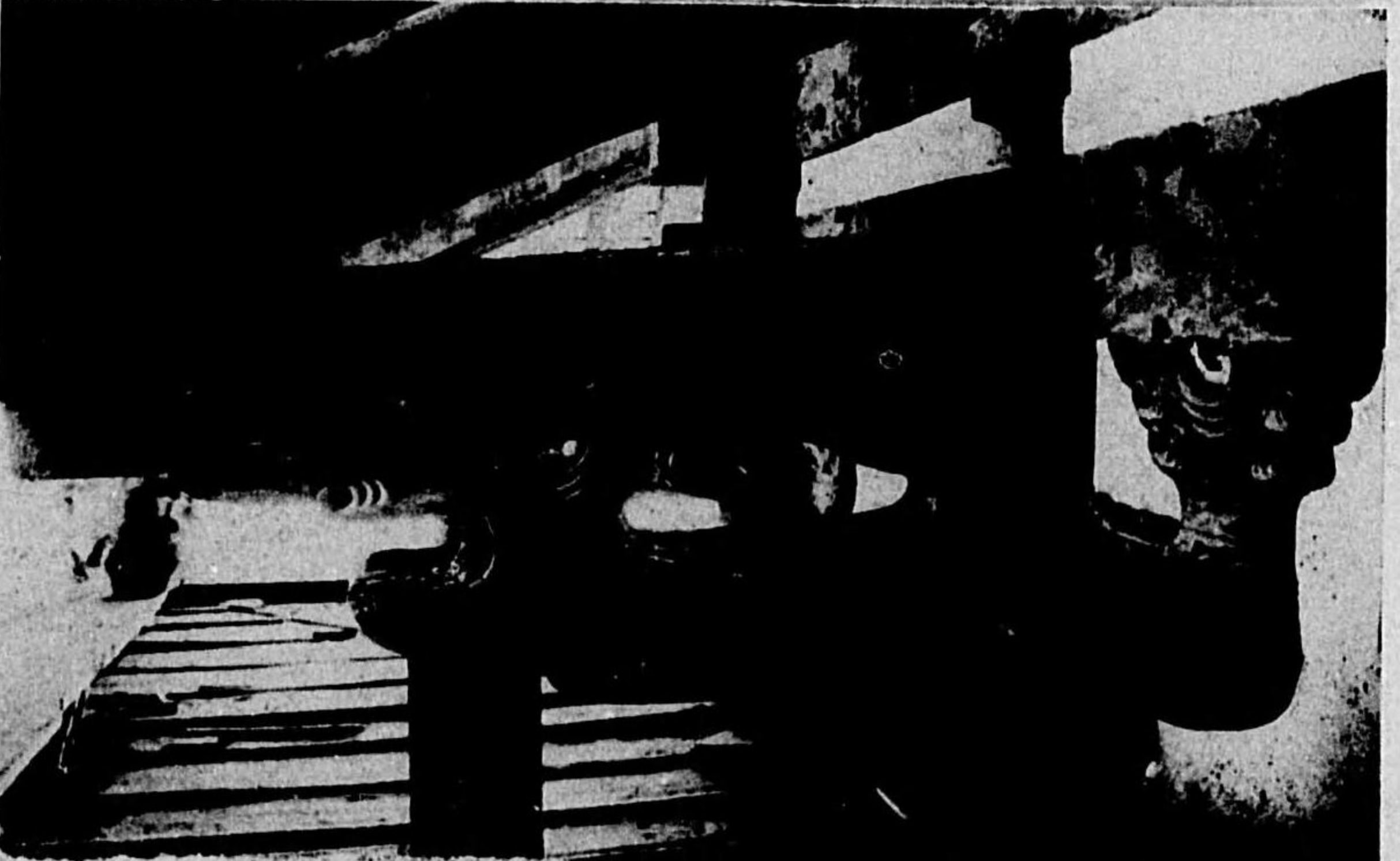
圖版二三 極樂院五重小塔



圖版二二 海龍王寺五重小塔



法隆寺五重塔

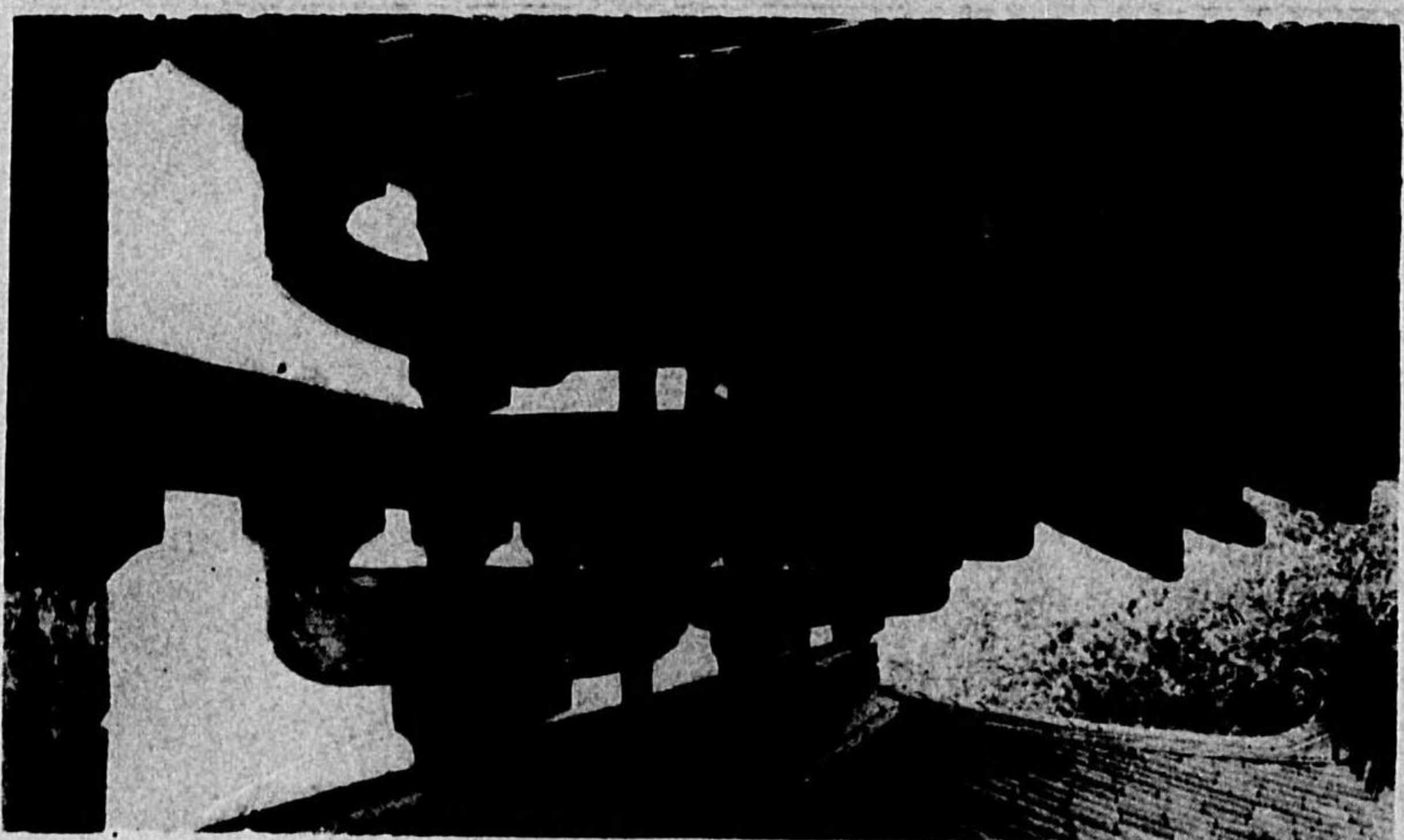


法隆寺金堂

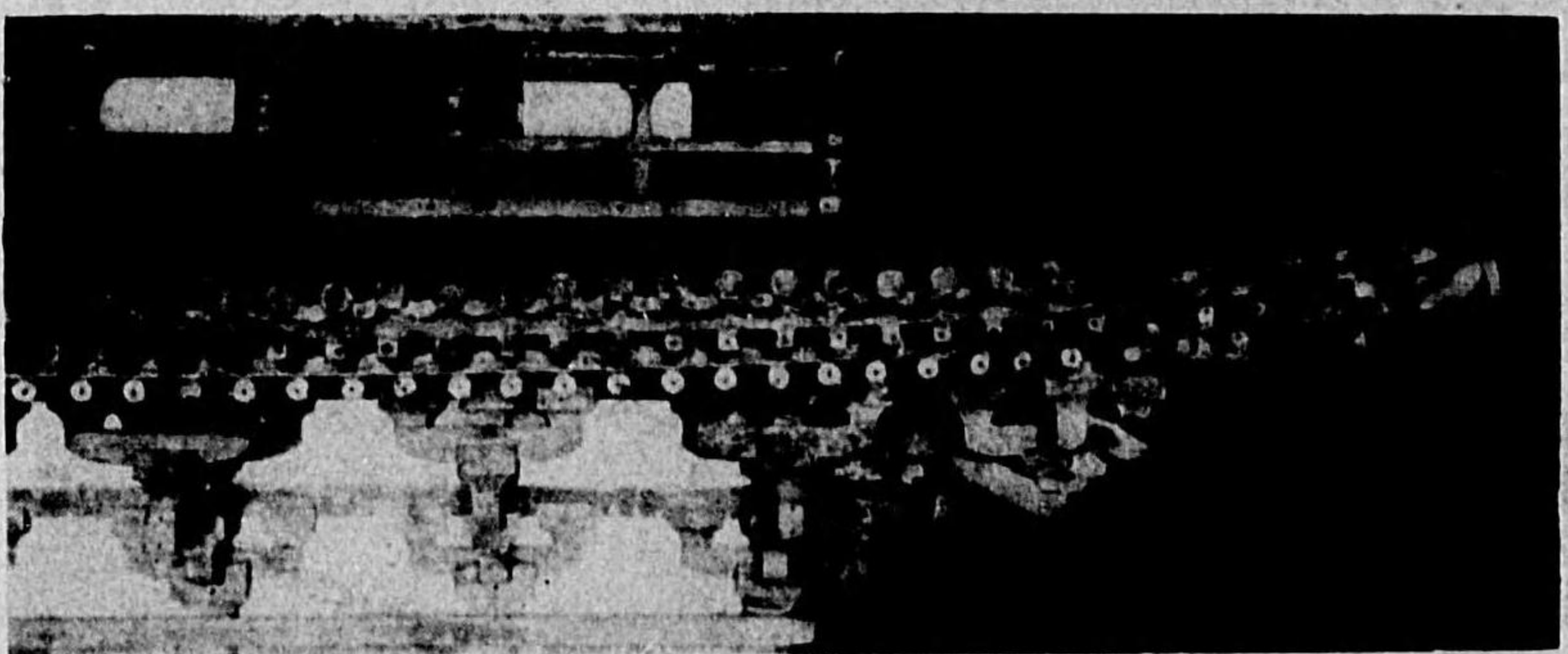


法起寺三重塔

圖版二四 斗拱集成 一



樂師寺三重塔



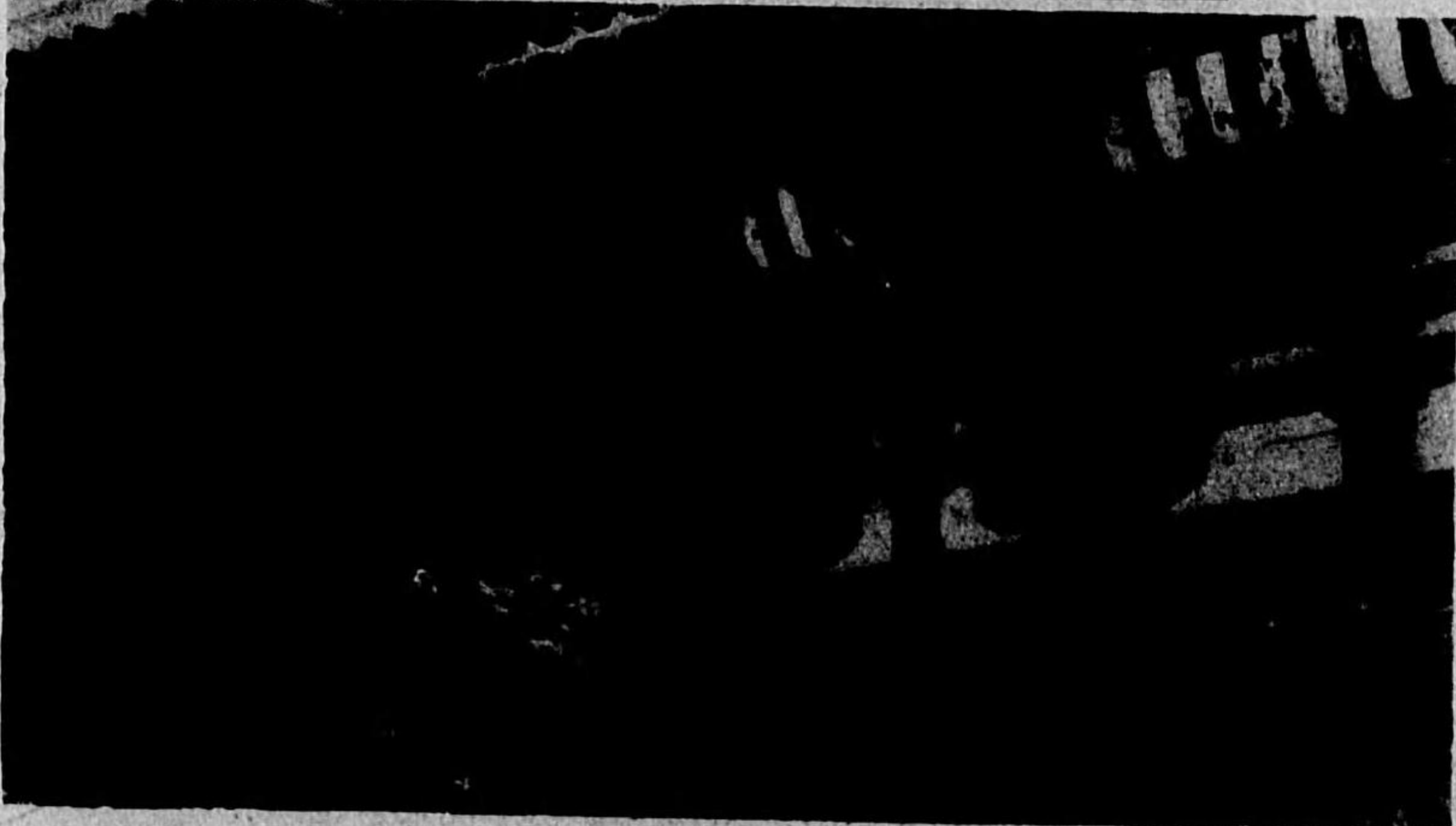
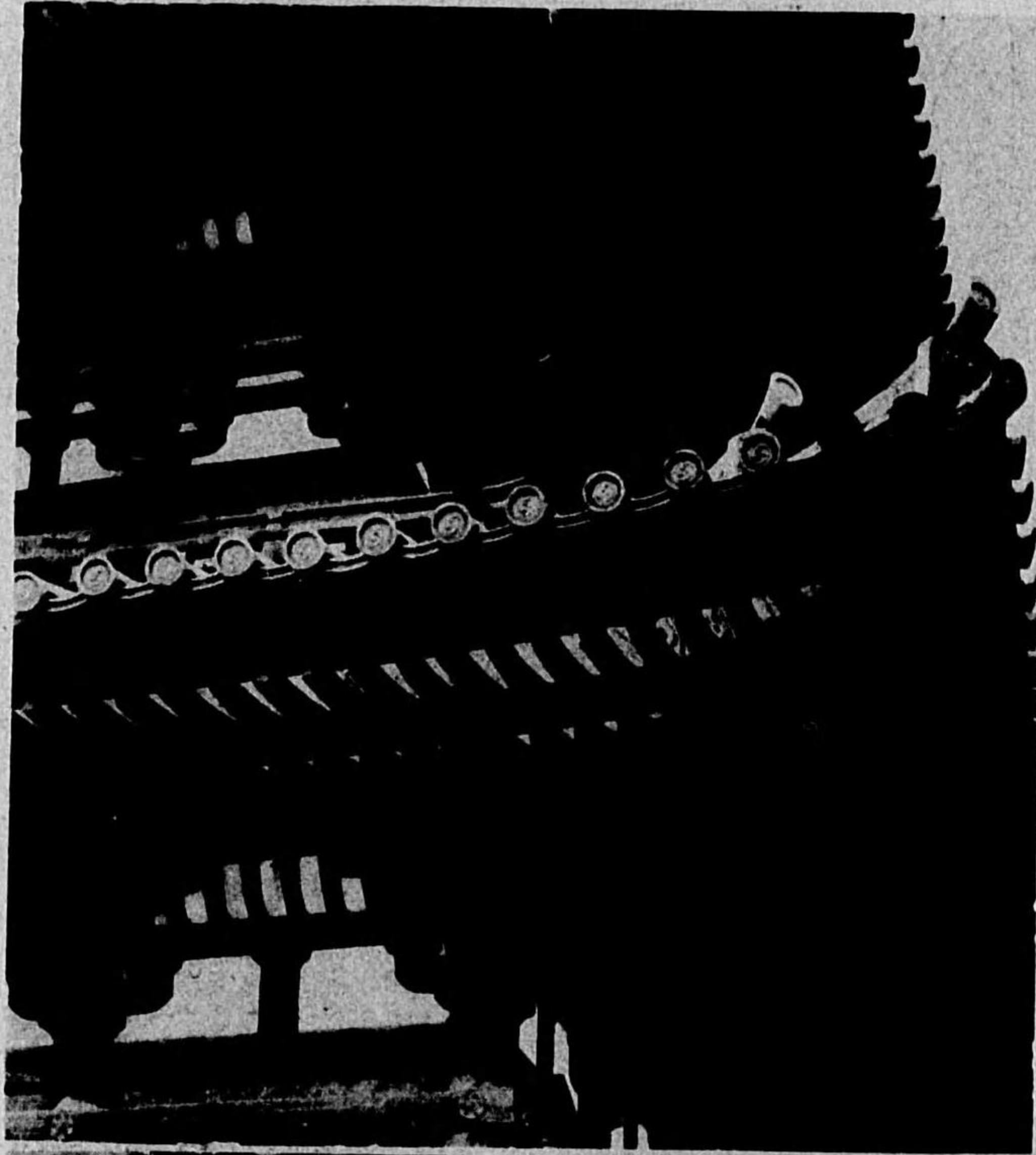
海龍王寺小塔



當麻寺西塔

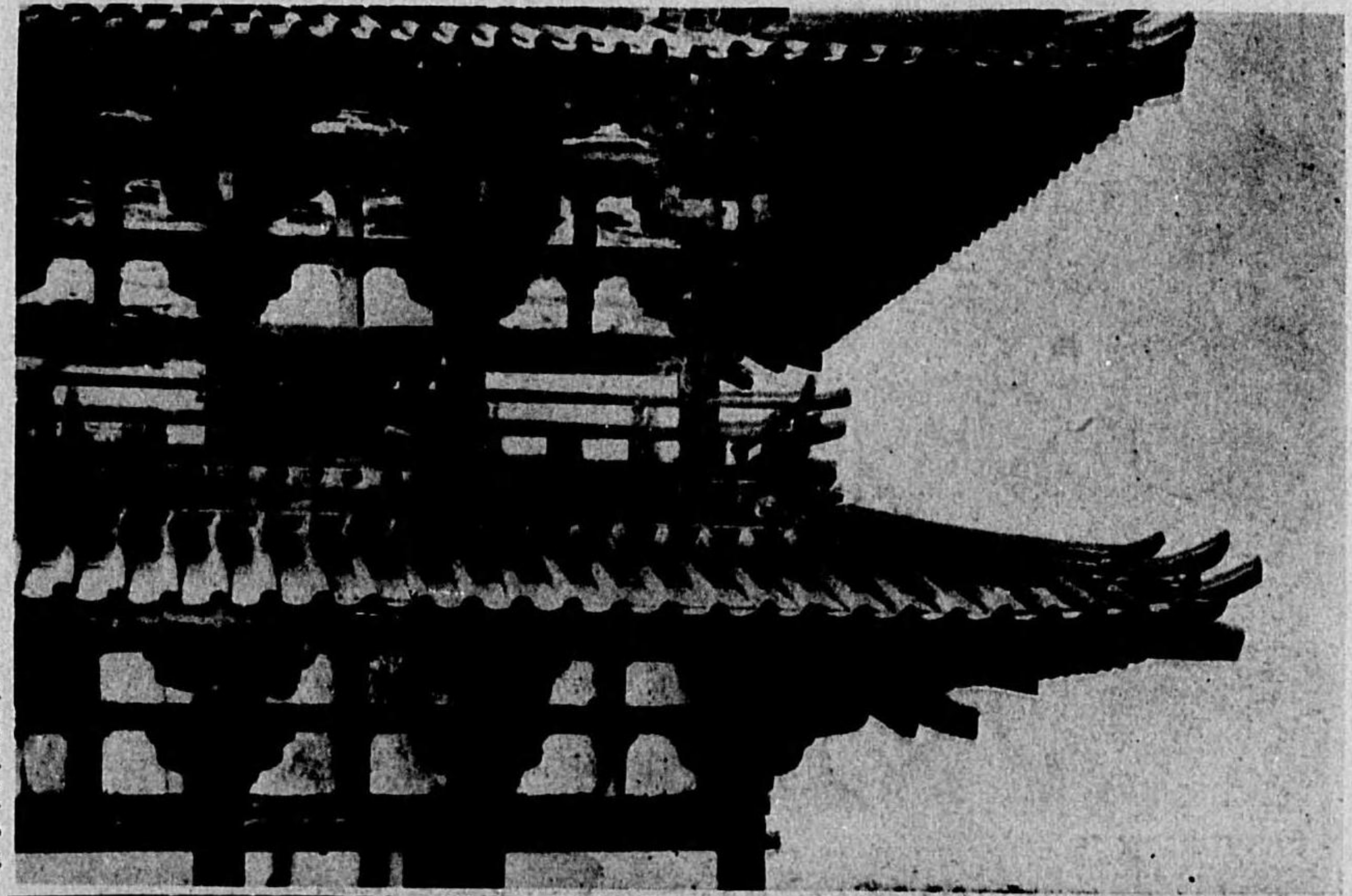
圖版二五 斗拱集成 二

興福寺三重塔

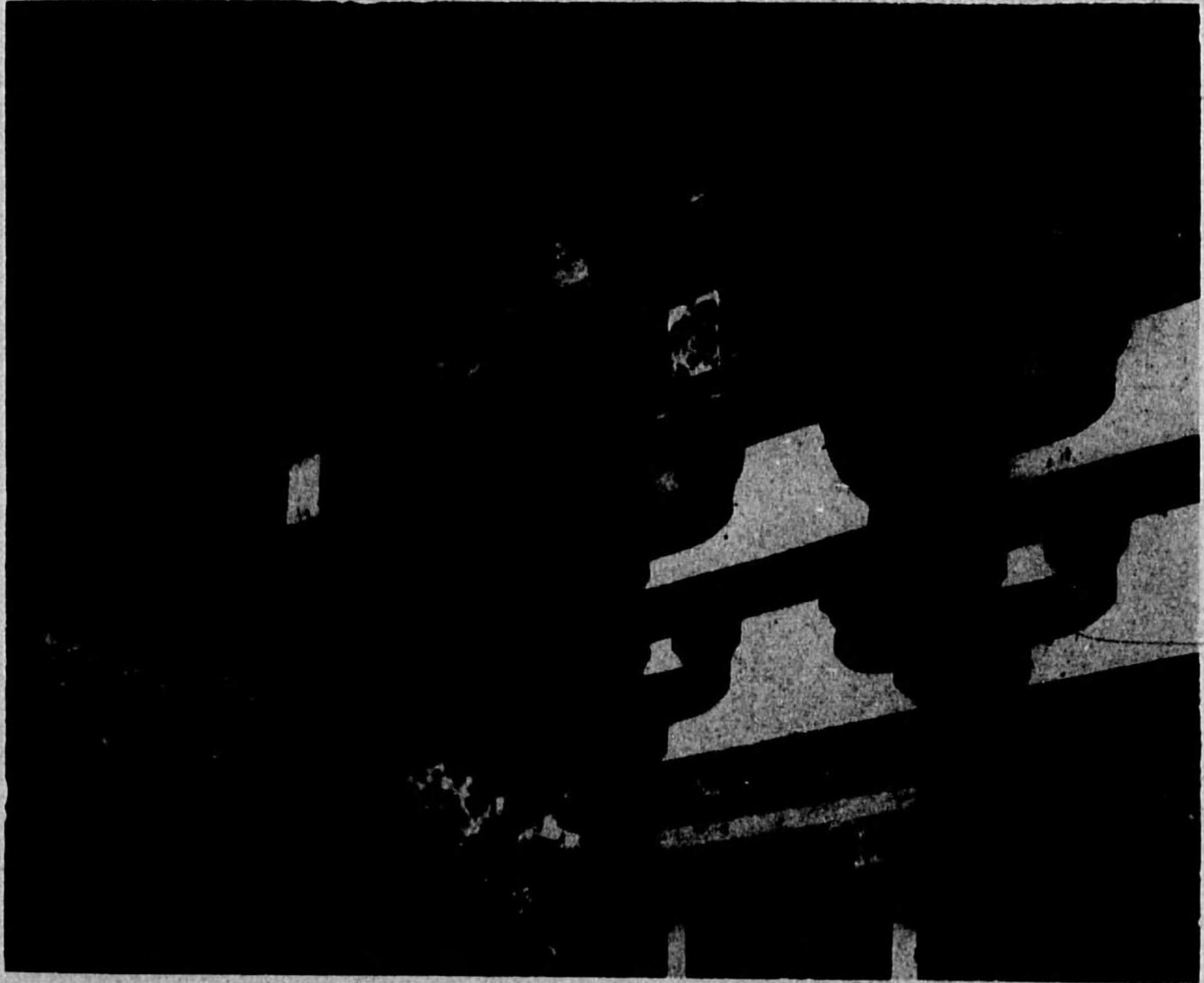


靈山寺三重塔

圖版二七 斗拱集成 四

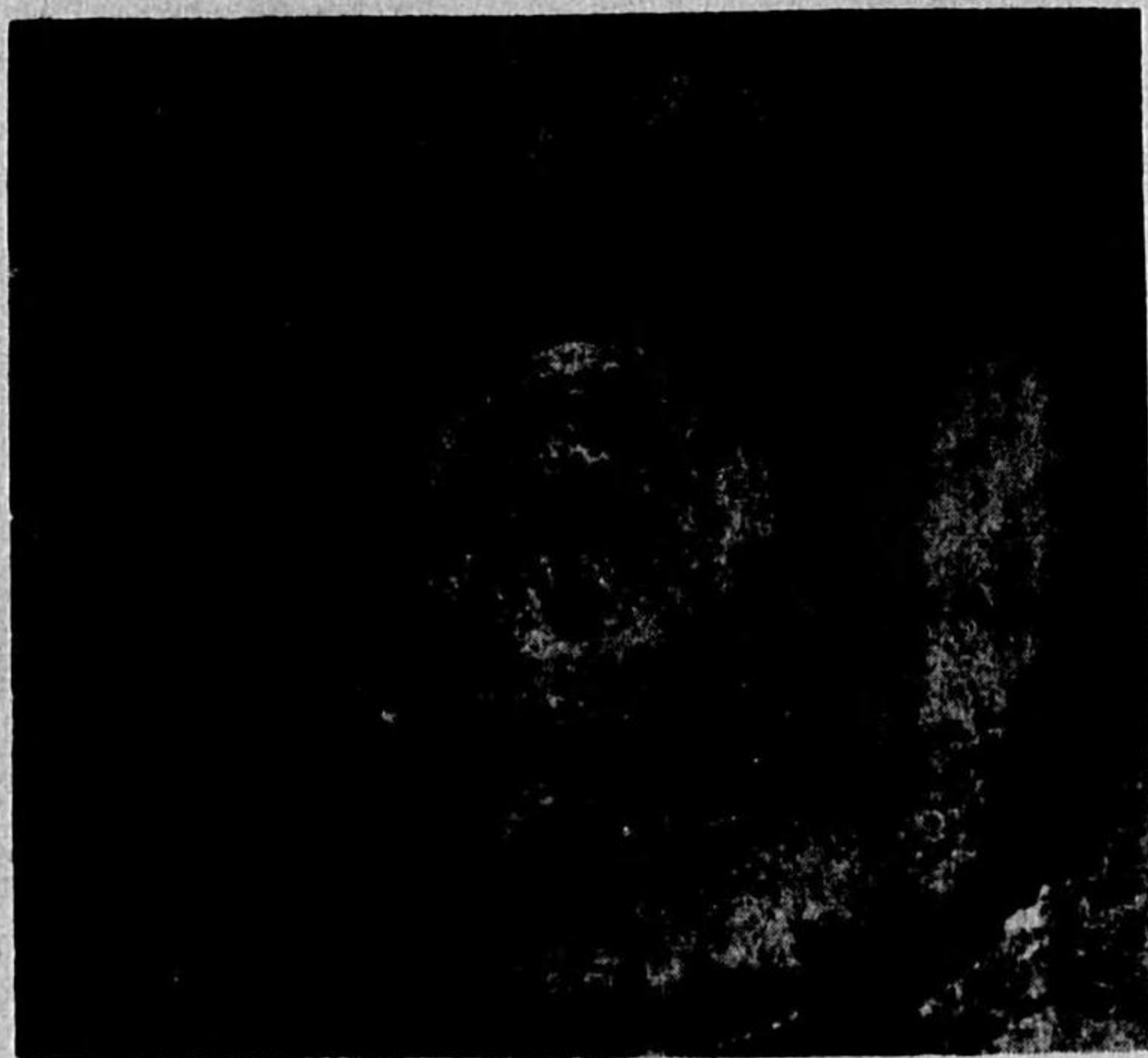


極樂院五重小塔

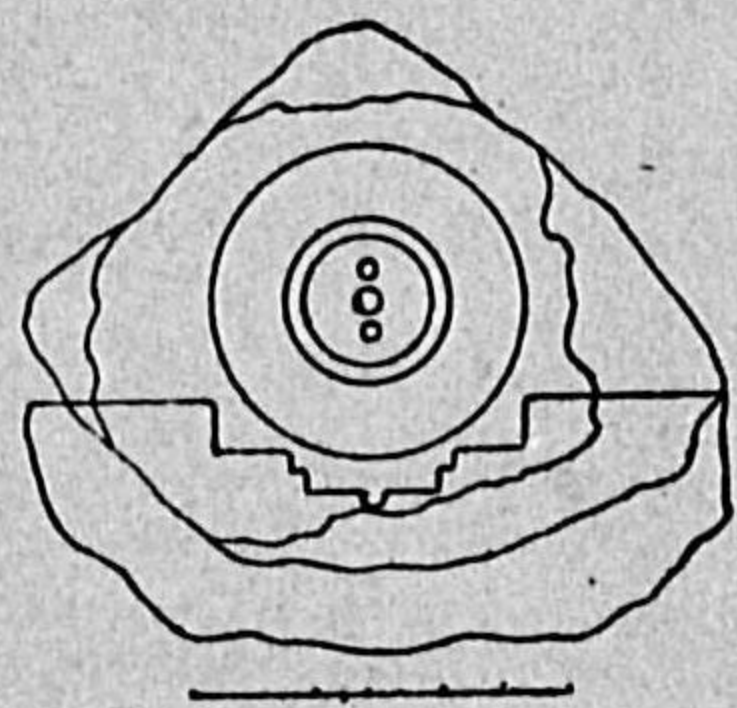


當麻寺東塔

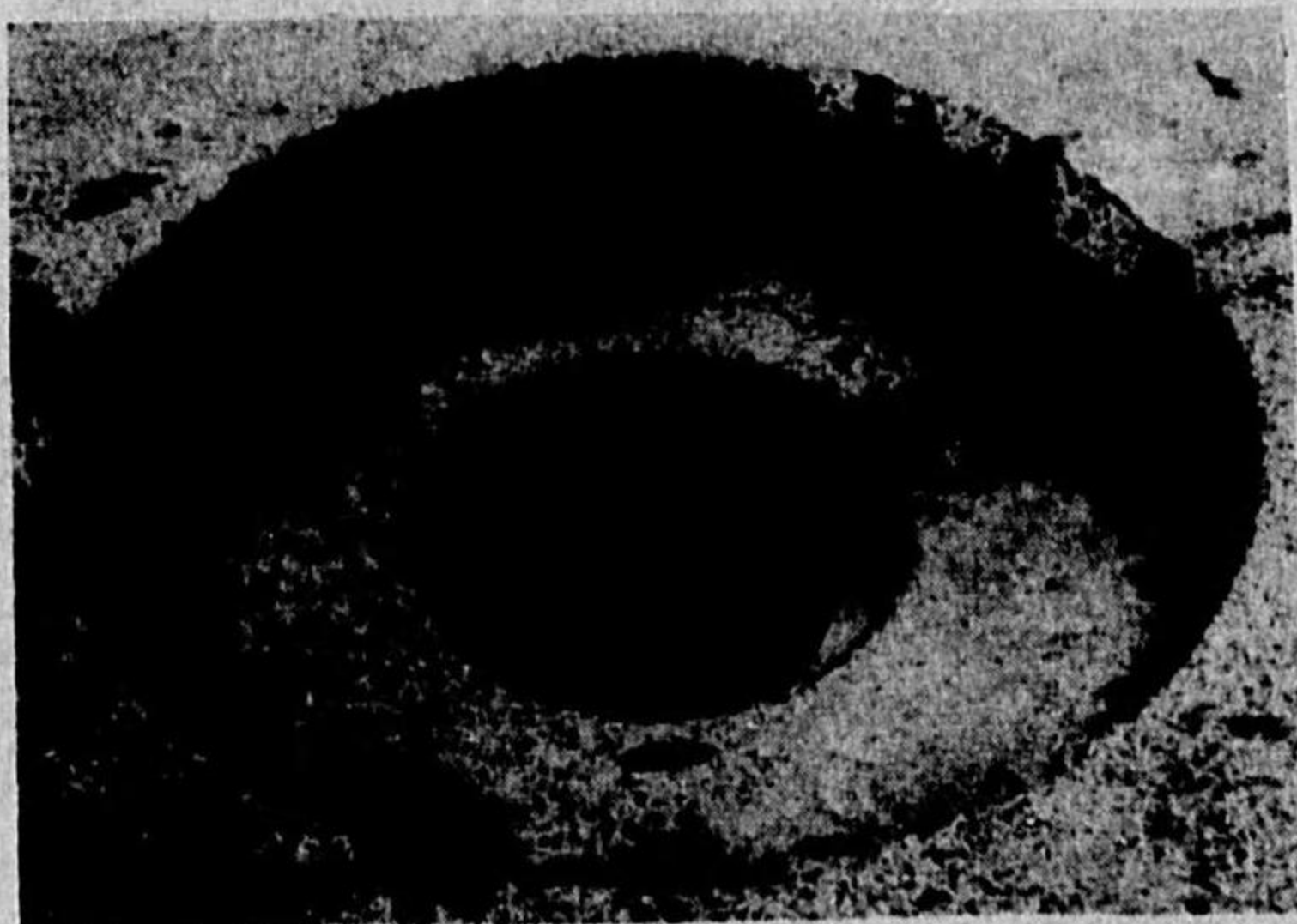
圖版二六 斗拱集成 三



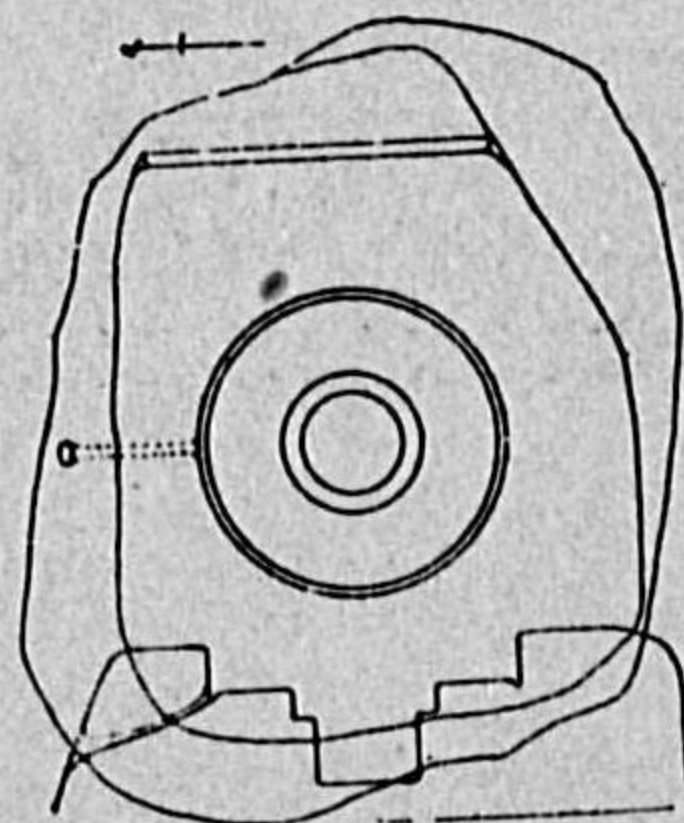
石光寺



石光寺



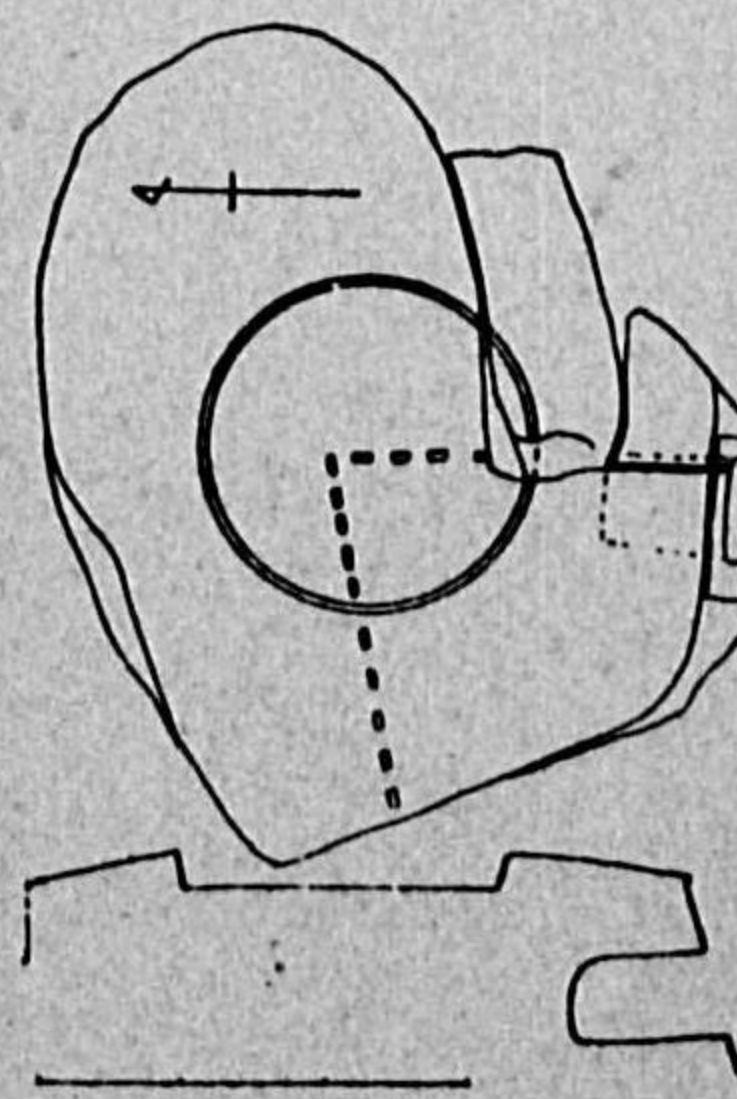
薬師寺西塔



薬師寺西塔



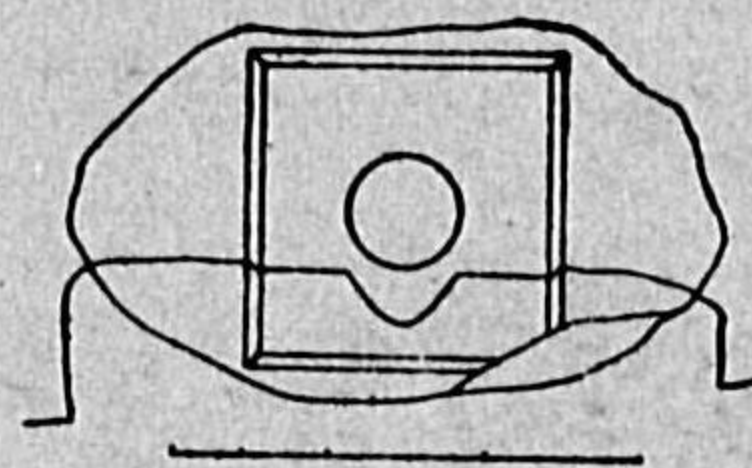
高麗寺



高麗寺

圖版二九 舍利穴を有する心礎 二

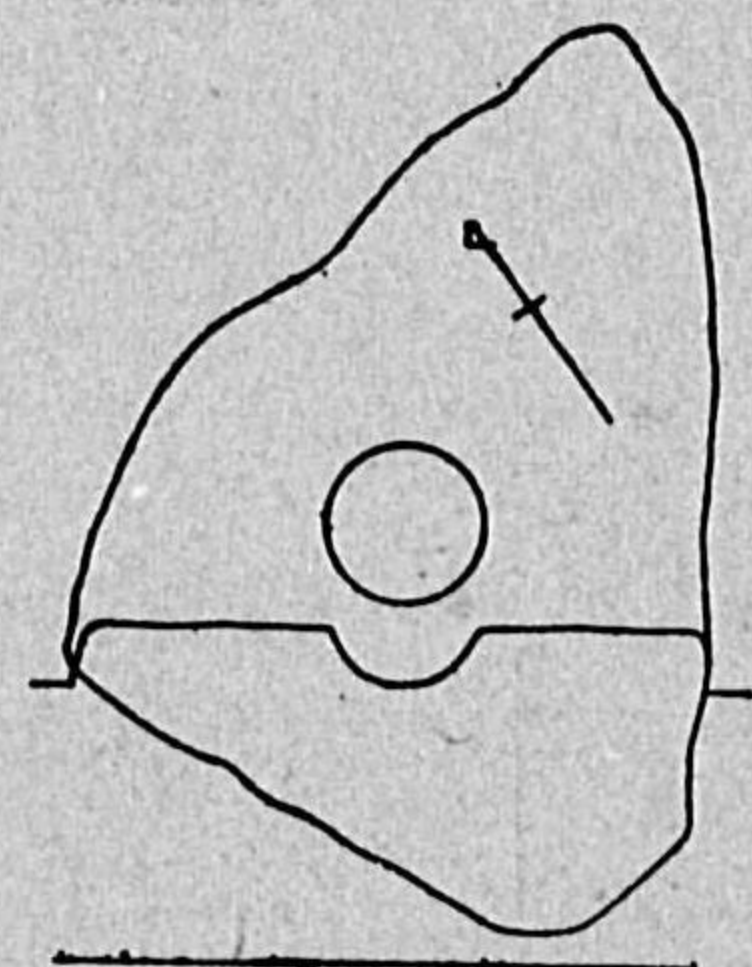
(實測圖の比例尺は全部三尺)



比叡寺東塔



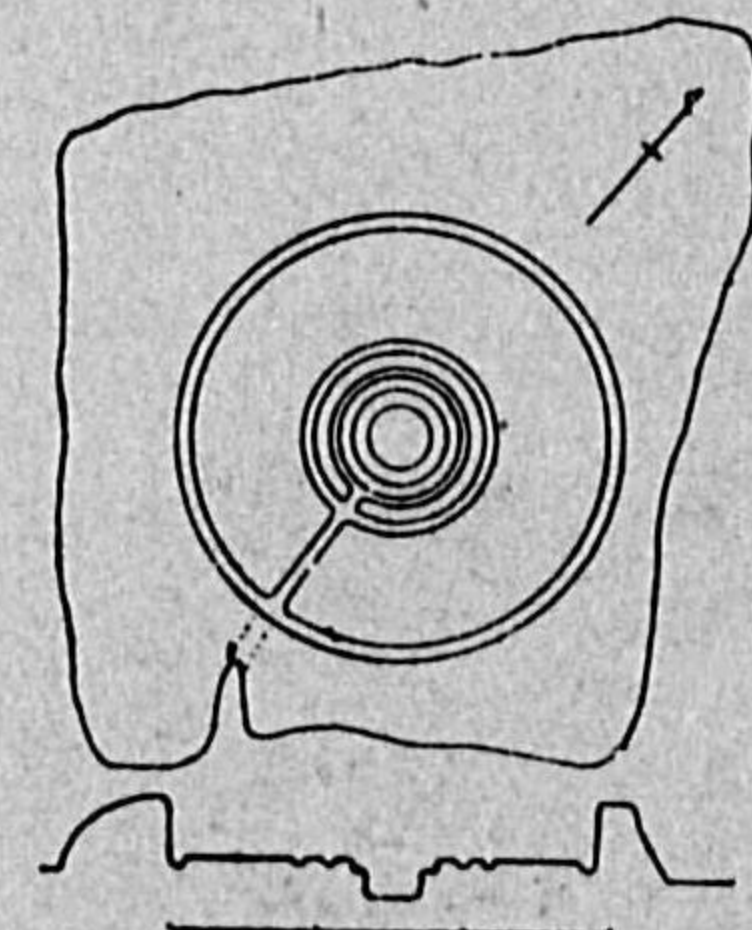
比叡寺東塔



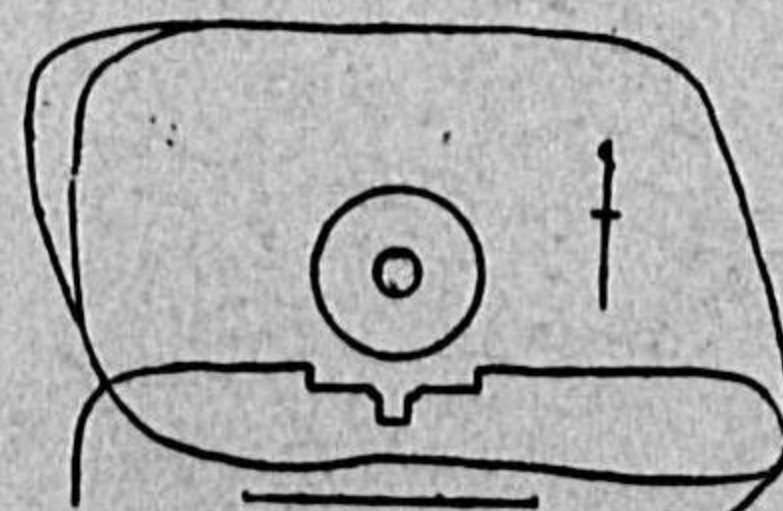
比叡寺西塔



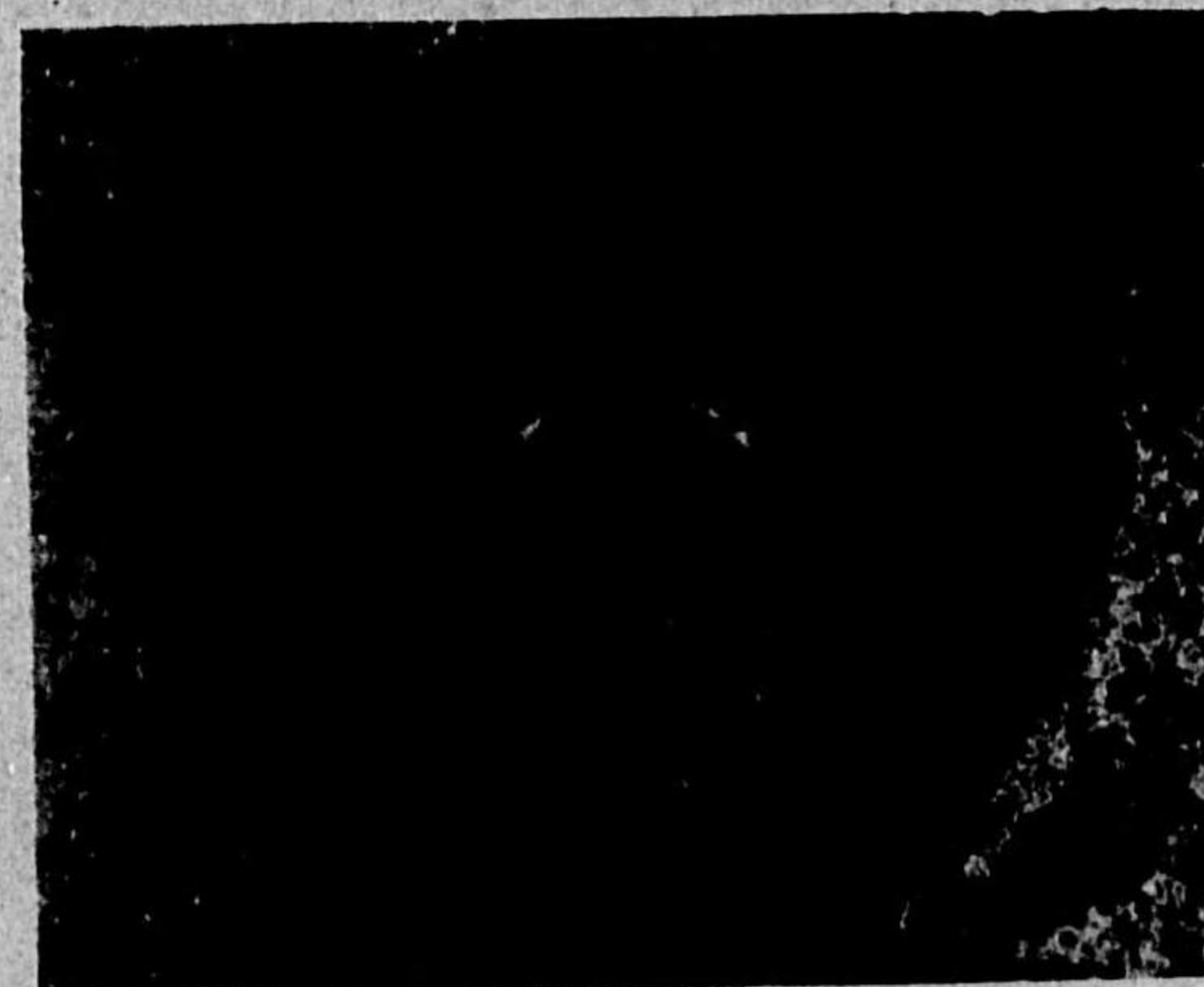
巨勢寺



巨勢寺

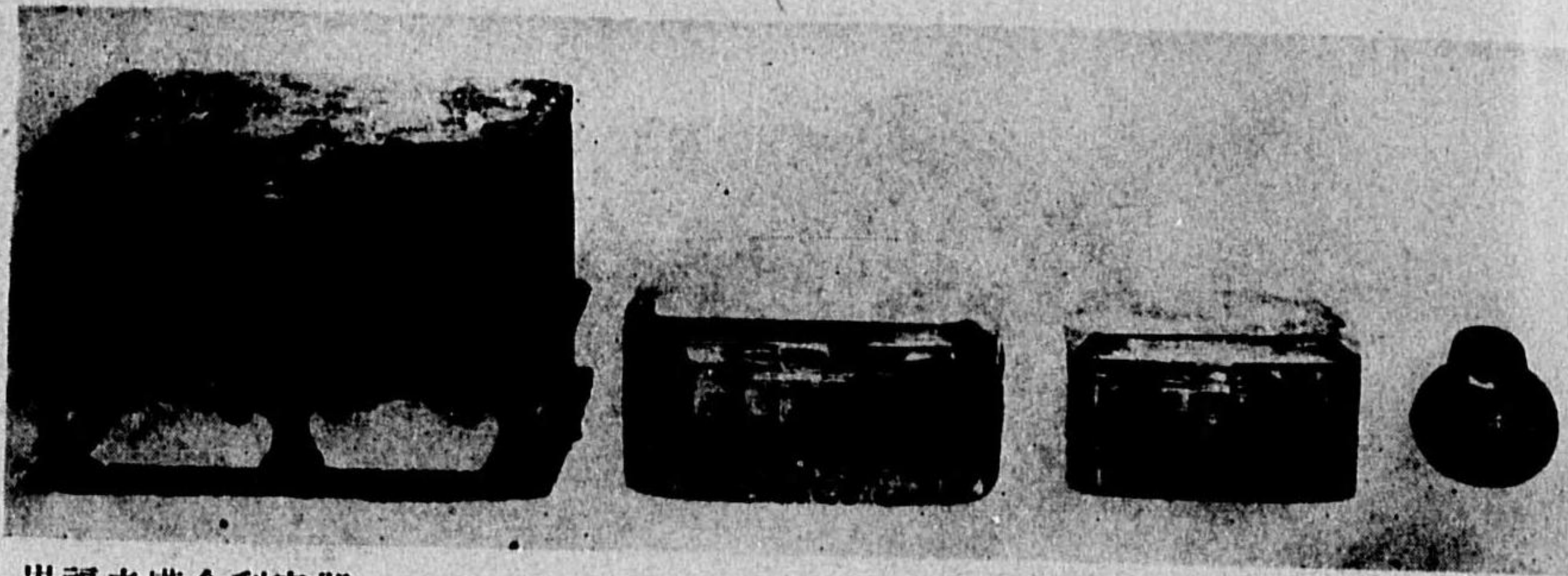


大窪寺

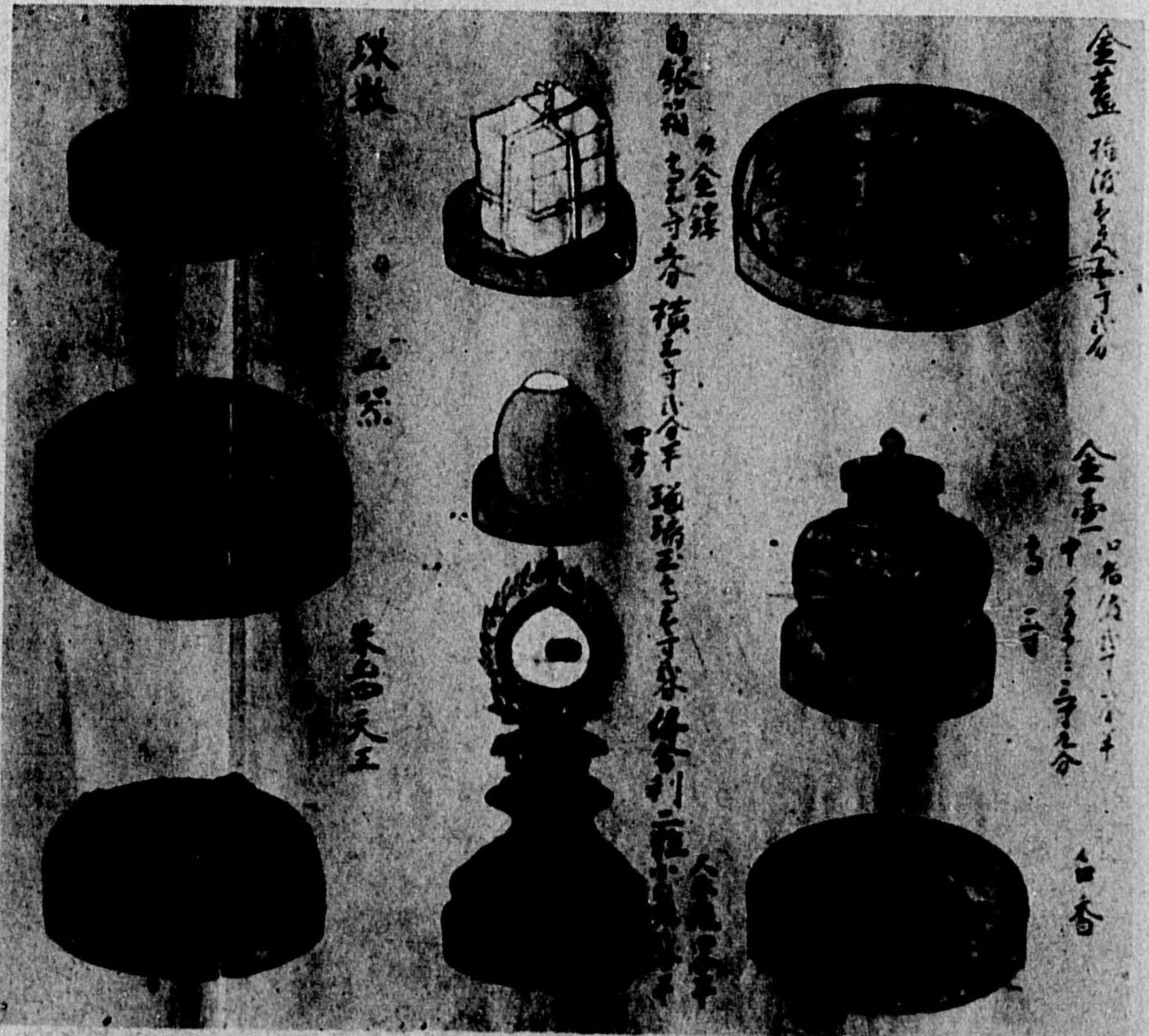


大窪寺

圖版二八 舍利穴を有する心礎 一



崇福寺塔舍利容器

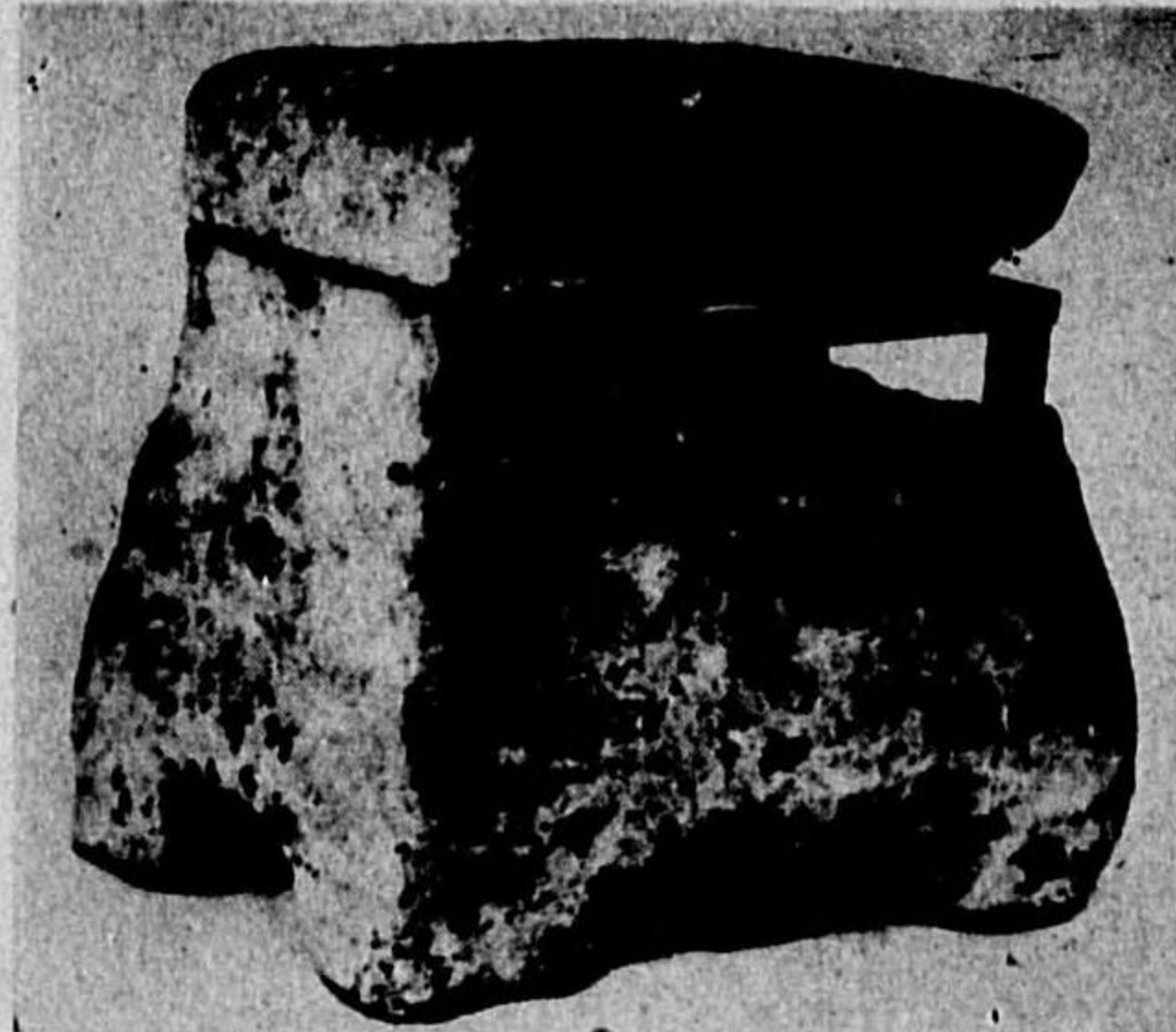


法輪寺塔佛舍利記に見ゆる舍利容器

圖版三一 舍利容器 二



攝津三島廢寺塔舍利容器(上)と心礎(下)



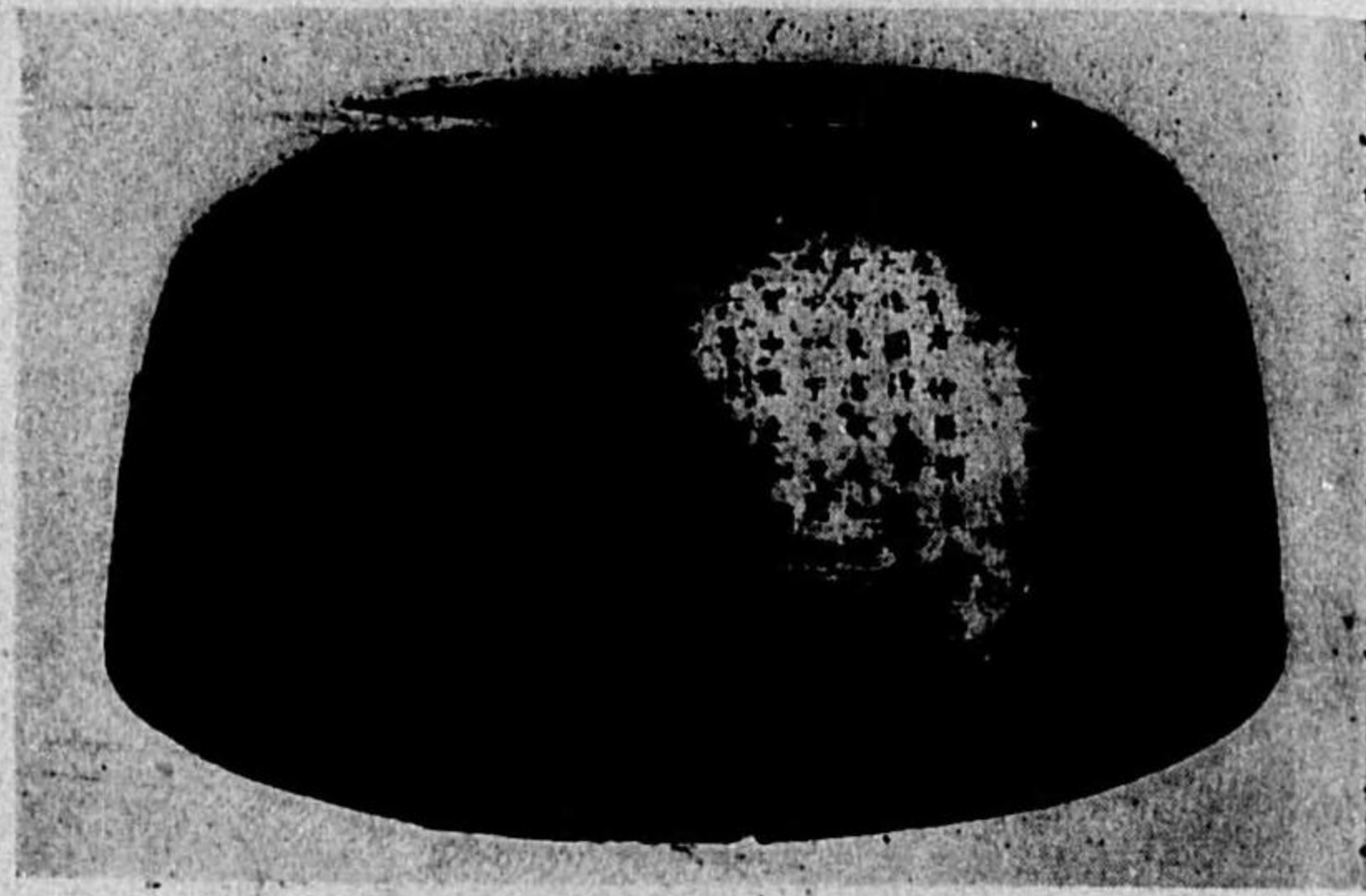
美濃山田廢寺塔舍利容器(上)と心礎(下)



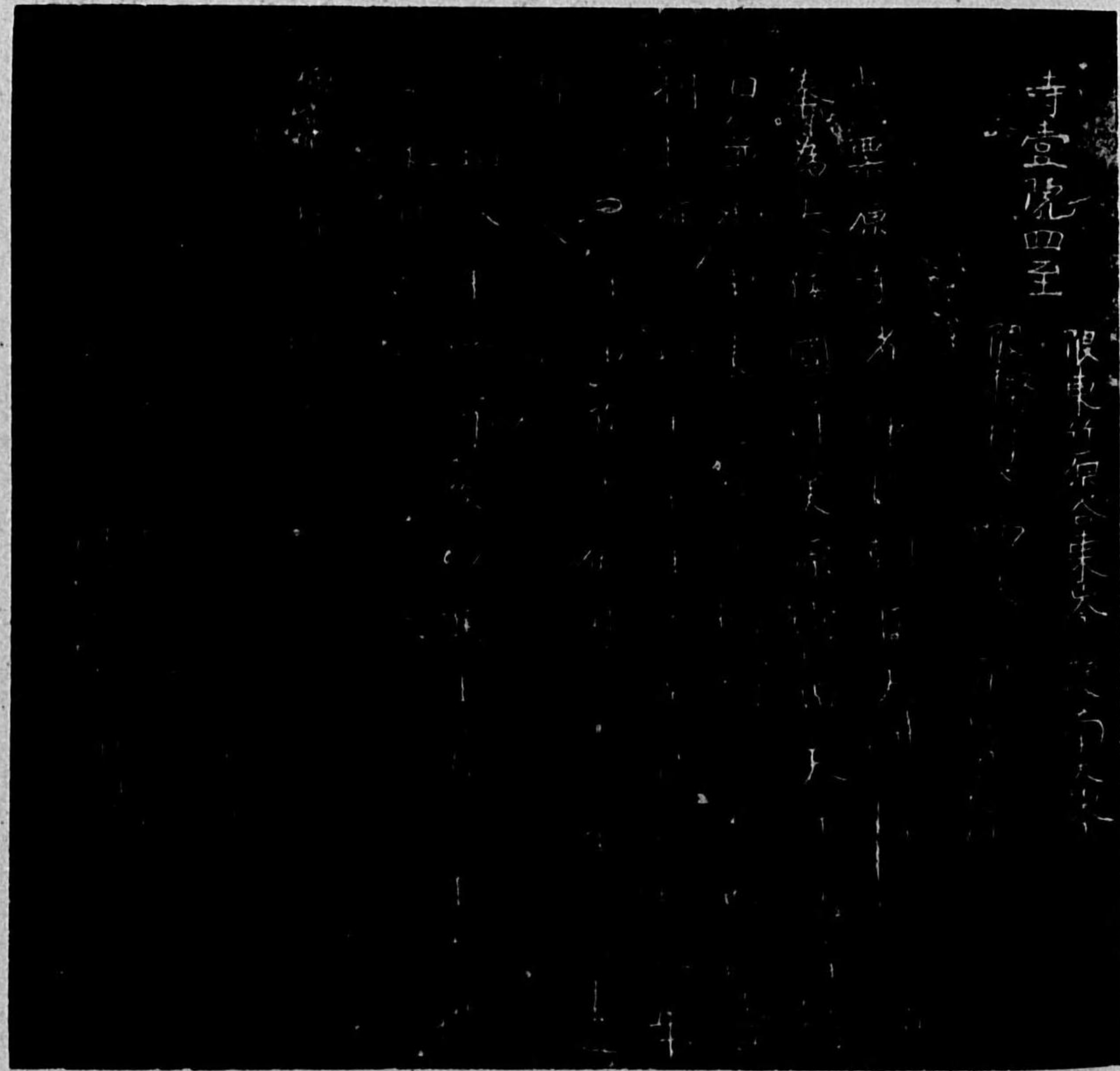
(本文三六頁參照)

圖版三〇 舍利容器 一

圖版三三 栗原寺塔伏鉢



伏鉢



伏鉢銘拓影

圖版三二 下下口廢寺塔石製相輪

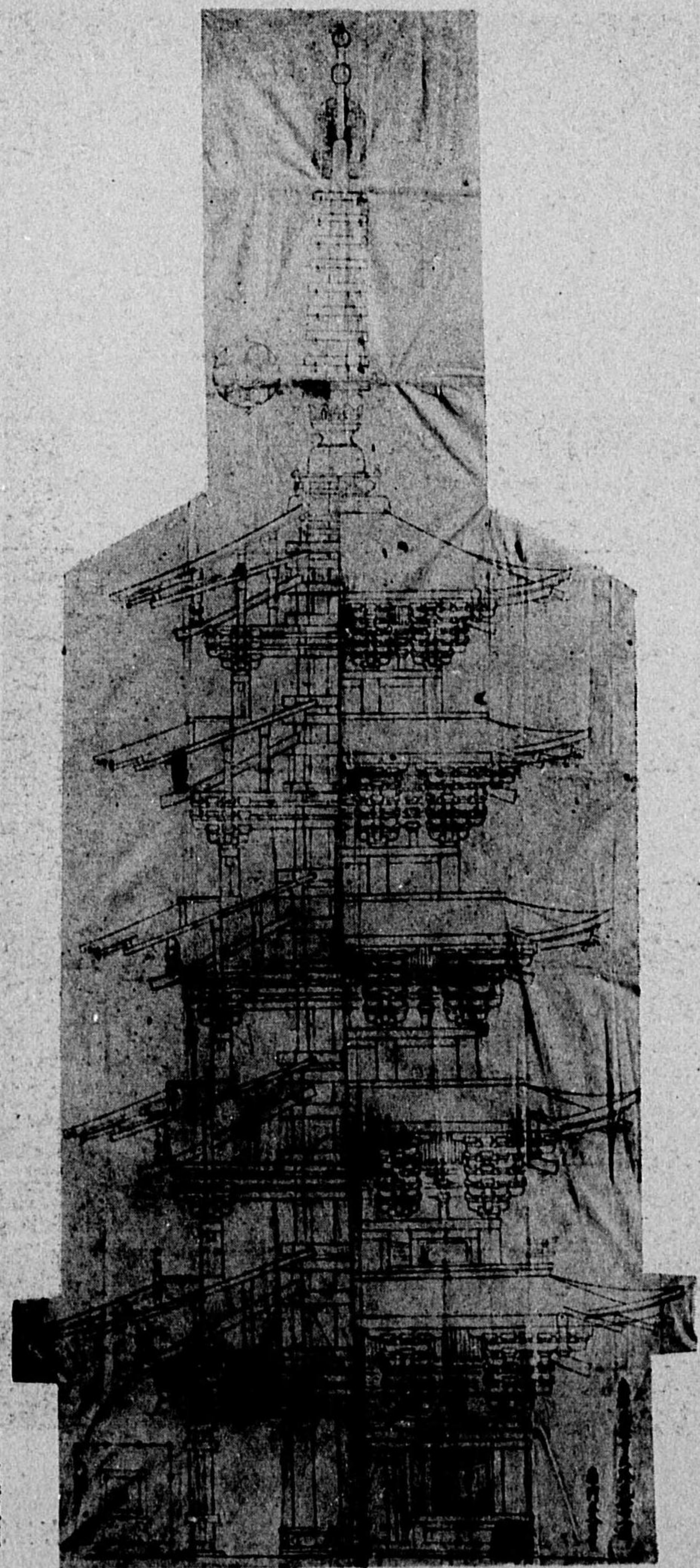


九輪・檜組立状況



九輪寶鐸(左右)並びに同舌(中央)

圖版三五 元興寺五重塔古圖



奈良縣藏

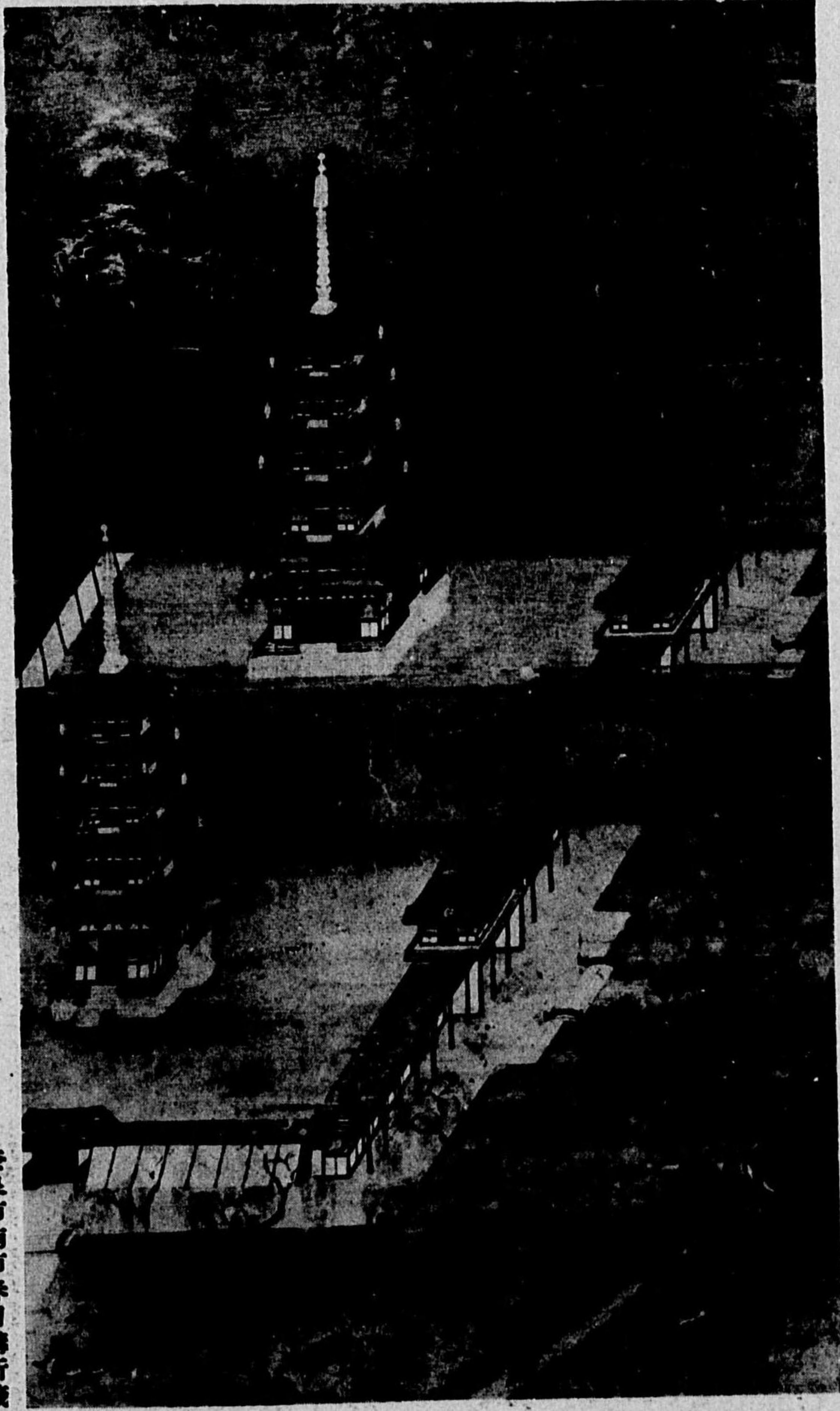


圖版三四 東大寺七重塔模型 (天沼博士復原)

932
204

序

大和を訪れた人々はこの
けさをみ、明るく澄んだ
はるられないであらうが、
た古塔の蒼古たる遠望に
て蘇つて来るのを如何と
史的理解を深めるべく書
願みるに本邦塔婆史の
ので、それは伊東忠太博
系付けられ、それに基い
式的研究が進められ、昭
敏男博士等の文献による



奈良市南市春日講所蔵

圖版三六 春日曼荼羅に見ゆる春日御塔



奈良市南市春日講所蔵

大和の古塔 正誤表

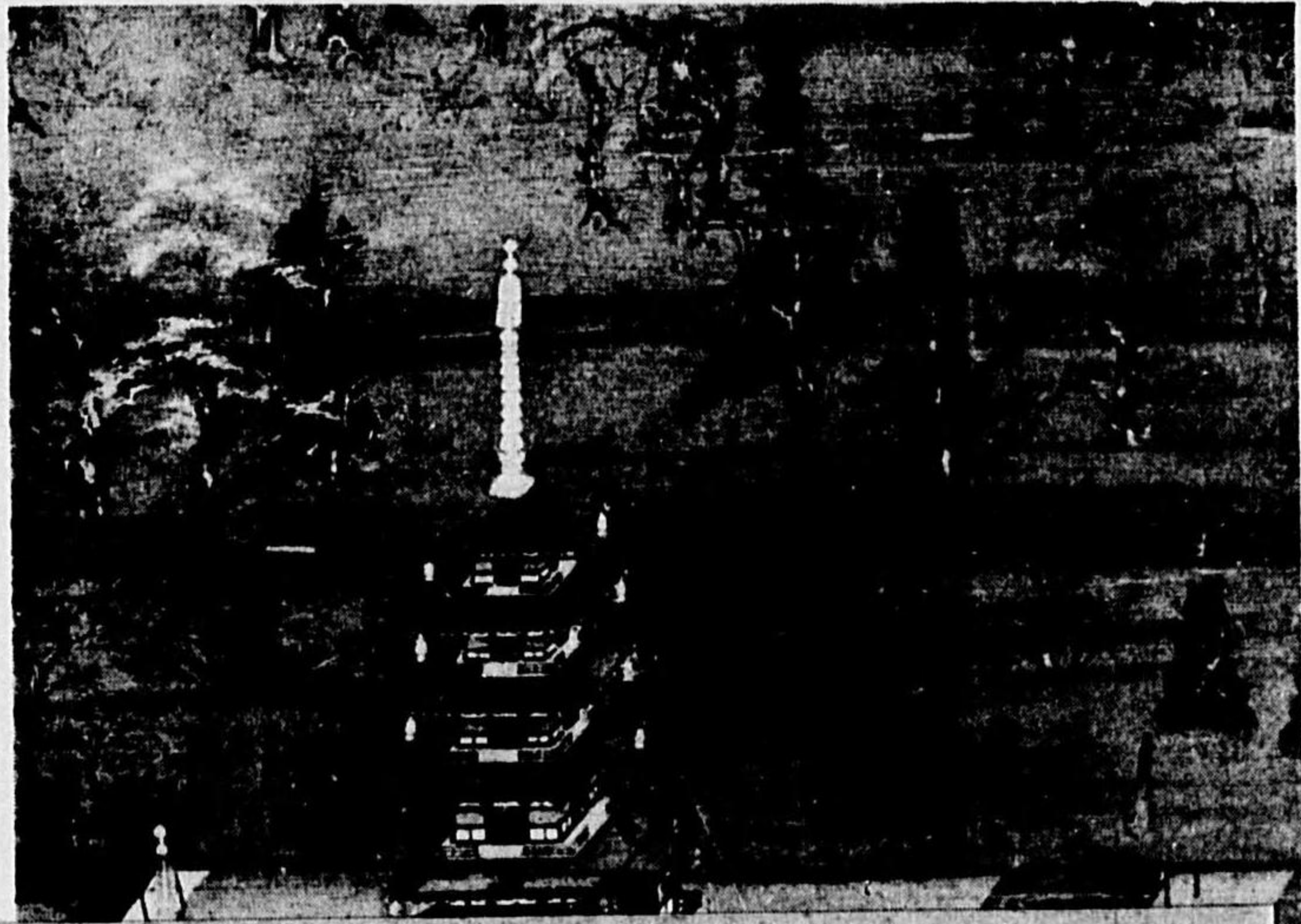
頁	行	誤	正
三三	五	地覆が間に	地覆との間に
三三	八	各層・裳階	各層に裳階
三二	五	東・東普門院裏	東南普門院裏
三二	九	賢基の刻	賢基の所刻
九五	一	一は千體佛と一は	一は千體佛、一は
一二	二	爲三宮處一	爲三宮處一
二三	二	書を繼がれた	書を繼がれた
二六	一〇	即於其他、誓寺堂	即於其地、誓立寺堂
一六	三	兵火と云へば越智氏等	兵火と云へば永享十年八月越智氏等
一七	三	石居不思議也	石居不思議也
一五	三	中門・金・講堂地	中門・金堂・講堂地
一四	一	一尺四寸五分、	一尺四寸五分、これに
一四	八	(枯死?)	全部削除スル
一四	〇	四天柱礎は方形の一隅を缺きたる型式のもの	四天柱礎は方石の内隅を缺きたる如き形のもの
一六	三	荒組格子	菱組格子
一四	三	ウーシを用ひて	ウーシ(阿闍)を用ひて
一四	六	ウーシは阿闍	ウーシ阿闍は
三三	〇	大嘗樂	大嘗樂
三六		六行目の「夫れは」以下十行目の「ことから考へら	六行目の「夫れは」以下十行目の「ことから考へら
自一	二行目	即ちこれは天平尺で中央間は十尺、兩脇間は九尺、計二十八尺となるから、恐らく當初のままであらう。礎石間の距離は何れも中の間が九尺前後で、脇の間が何れも八尺八寸内外であり、是等は	礎石間の距離は何れも中の間が九尺前後で、脇の間は八尺八寸内外であり、即ちこれは天平尺で中央間は十尺、兩端間は九尺、計二十八尺となるから、是等の
三七		健保	建保

932
204

序

大和を訪れた人々はこの清閑な平野に立つて四圍をめぐれる青垣山の静けさを見、明るく澄んだ空気を呼吸するだけで既に歴史の壓力を感じずにはゐられないであらうが、その山の端にあつて一きは高く蒼穹にぬきん出た古塔の蒼古たる遠望に接する時、歴史への郷愁が切實ななつかしさを以て蘇つて来るのを如何ともし難いであらう。本書はこれらの古塔への建築史的理理解を深めるべく書かれたものである。

顧みるに本邦塔婆史の研究は、従来建築史の一環として究明され來つたので、それは伊東忠太博士、塚本靖博士、關野貞博士の三碩學によつて體系付けられ、それに基いて天沼俊一博士等の遺構、遺址の個々に對する様式的研究が進められ、昭和年代に入つては足立康博士、大岡實博士、福山敏男博士等の文献による一層の検討が加へられ、この間歴史考古學徒によ



る遺址、遺物の調査研究が援助せられて學系を深め來つたものである。従つて塔婆史の大綱は既に組成せられてはゐるが、微細な問題に至ると未開の荒野は茫乎として存し、これが處理はなみなみならぬ史觀を要求する。殊に本書に述べようとする大和は本邦佛教文化の開花地としてそこに残された古塔は本邦塔婆史上の精華とも云ひつべきものであるから、これが解説はもとより淺學の著者が遽かによくなし得るところではない。

従つて本書は明治以降先學が諸雜誌に發表せられたる諸論考を集成、整理しつゝ、これを近年に至つて檢出せられたる資料を以て補説したものに過ぎぬ。しかし拙い行文と未熟な思索とはむしろ先學の學績を傷付けること少からぬであらうことを恐れる。ひとへに宥怒を乞ふと共に惜しみなき叱正を賜り以て將來の完璧を期し度いと思ふ。

私はこゝに本書を公にするに當つて私の學業をこゝまで導き下さつた恩師名古屋高等工業學校名譽教授、國寶保存會委員土屋純一先生を初め、故

足立康博士、文部技師大岡實博士、同福山敏男博士の御鞭撻と直接數々の御教導を賜り來つた法隆寺國寶保存工事事務所長岸熊吉先生並びに同學知友の御厚誼を深く感謝しなければならぬ。殊に奈良飛鳥園主小川晴陽氏からは多くの優秀な寫眞を與へられて圖版を飾り得たことは、本書の執筆を慫慂し出版の斡旋に當つて下さつた井川定慶氏並びに出版の機會を與へられた天理時報社各位の御厚意と共に厚く敬意を表するところである。

昭和十八年一月

黒田 昇 義

一、寺名には同名のものが多し。従つて文中所在地を記載しない寺院は大和所在の寺院である。大和以外の寺院名には府縣名若しくは國名を附したが、京都の教王護國寺（東寺）、醍醐寺、大阪の四天王寺の如き著名寺院にはこれを略した場合もある。

二、一般に多寶塔と云へば、建築形態の名稱ではなく、多寶如來の全身舍利塔のことであるが、本書に於てはこれを建築史に於ける用例に従ひ、圓形平面の塔身をもつ寶塔に裳階を附した塔形を指す語として置く。

三、建築の細部に關する術語はなるべく略解を附するべく力めたがもとより理解を十分ならしむるに至らなかつた。これらについては工學博士中村達太郎氏の「日本建築辭彙」、建築學會編「建築術語集」等を參看され度い。

目次

序章	1
塔婆概説	3
塔とは何か	4
本邦の造塔	10
塔婆構造	10
大和の古塔	11
總説	13
古塔巡歴	17
法隆寺五重塔	17
法輪寺三重塔	18

法起寺三重塔……………充
 藥師寺三重塔……………其
 當麻寺三重塔(東塔・西塔)……………八
 室生寺五重塔……………一〇一
 興福寺三重塔……………一〇五
 百濟寺三重塔……………一二三
 靈山寺三重塔……………一二〇
 興福寺五重塔……………一三五
 南法華寺三重塔……………一三三
 安樂寺三重塔……………一三九
 談山神社十三重塔……………一四四
 海龍王寺五重小塔……………一五三
 極樂院五重小塔……………一五五
 追憶の古塔……………一五九

飛鳥寺塔……………一五九
 橘寺塔……………一六六
 川原寺塔……………一七〇
 山田寺塔……………一七五
 比曾寺塔……………一七九
 巨勢寺塔……………一八八
 檜隈寺塔……………一九二
 大窪寺塔……………一九五
 石光寺塔……………一九七
 大官大寺塔……………一九九
 ドドコロ廢寺塔……………二〇三
 栗原寺塔……………二〇八
 久米寺塔……………二一四
 大安寺塔……………二一九

東大寺塔	二四
西大寺塔	三一
元興寺塔	三六
唐招提寺塔	四七
春日御塔	五〇
附載	五五
大和古塔寸尺表	五八
國寶塔婆目錄	七五
塔婆索引	七九

挿圖目次

挿圖一	印度サンチー大塔	七
挿圖二	印度塔婆名稱圖	八
挿圖三	大同石窟第二洞東壁の浮彫塔婆	九
挿圖四	飛鳥・奈良時代伽藍配置圖	一五
挿圖五	和歌山縣根來大傳法院多寶塔	一七
挿圖六	塔婆各部名稱圖	三
挿圖七	長野縣安樂寺八角三重塔	三
挿圖八	美濃山田慶寺・攝津三島慶寺塔舍利容器安置狀態圖	三
挿圖九	崇福寺塔舍利容器實測圖	六
挿圖一〇	大同石窟第九洞の浮彫に見ゆる卍字崩し勾欄と人字形の蛙股	九
挿圖一一	法隆寺若草伽藍塔心礎	五
挿圖一二	法隆寺五重塔保元伏鉢	五

挿圖一三	法隆寺五重塔下空洞縦断面想定圖	二〇
挿圖一四	法起寺三重塔修理前實測圖	二一
挿圖一五	法起寺三重塔心礎	二二
挿圖一六	本藥師寺址實測圖	二三
挿圖一七	本藥師寺塔心礎	二四
挿圖一八	藥師寺東塔實測圖	二五
挿圖一九	藥師寺塔露盤銘拓影	二六
挿圖二〇	當麻寺東塔水烟	二七
挿圖二一	當麻寺西塔心柱圍板見取圖	二八
挿圖二二	當麻寺西塔舍利容器實測圖	二九
挿圖二三	室生寺五重塔實測圖	三〇
挿圖二四	興福寺三重塔修理前實測圖	三一
挿圖二五	醍醐寺五重塔初層心柱圍板に描かれた寶塔	三二
挿圖二六	百濟寺三重塔修理前	三三

挿圖二七	靈山寺三重塔實測圖	三三
挿圖二八	南法華寺三重塔舊心礎	三四
挿圖二九	南法華寺三重塔二層目斗拱墨書	三五
挿圖三〇	安樂寺三重塔	三六
挿圖三一	海住山寺五重塔	三七
挿圖三二	般若寺十三重石塔	三八
挿圖三三	扶餘城址出土巴瓦と飛鳥寺出土巴瓦	三九
挿圖三四	飛鳥寺馬子の塔	四〇
挿圖三五	橘寺塔址實測圖	四一
挿圖三六	川原寺址實測圖	四二
挿圖三七	川原寺塔址實測圖	四三
挿圖三八	比曾寺址實測圖	四四
挿圖三九	比曾寺塔址	四五
挿圖四〇	園城寺三重塔實測圖	四六

挿圖四一	巨勢寺塔址實測圖	一九〇
挿圖四二	檜隈寺塔址實測圖	一九五
挿圖四三	大官大寺址實測圖	二〇〇
挿圖四四	大官大寺塔址岡本桃里寫圖	二〇〇
挿圖四五	大官大寺址本澤氏實測圖	二〇一
挿圖四六	ドドコ廢寺塔露盤	二〇四
挿圖四七	ドドコ廢寺塔石製相輪實測圖	二〇五
挿圖四八	ドドコ廢寺塔心礎	二〇六
挿圖四九	粟原寺址實測圖	二〇六
挿圖五〇	粟原寺塔址	二〇六
挿圖五一	粟原寺塔心礎	二一〇
挿圖五二	粟原寺塔露盤實測圖	二一一
挿圖五三	久米寺塔址	二一六
挿圖五四	大安寺西塔心礎	二二三

挿圖五五	東大寺伽藍復原圖	二三四
挿圖五六	東大寺塔址	二三五
挿圖五七	西大寺東塔址	二三三
挿圖五八	西大寺東塔礎石	二三三
挿圖五九	西大寺東塔址實測圖	二三三
挿圖六〇	元興寺塔址	二三九
挿圖六一	元興寺塔露盤斷片	二四〇
挿圖六二	唐招提寺古圖	二四八
挿圖六三	春日御塔址	二五一
挿圖六四	春日東御塔址實測圖	二五一

扉挿圖 當麻寺西塔水烟
表紙カバー 春日曼荼羅に見ゆる春日御塔

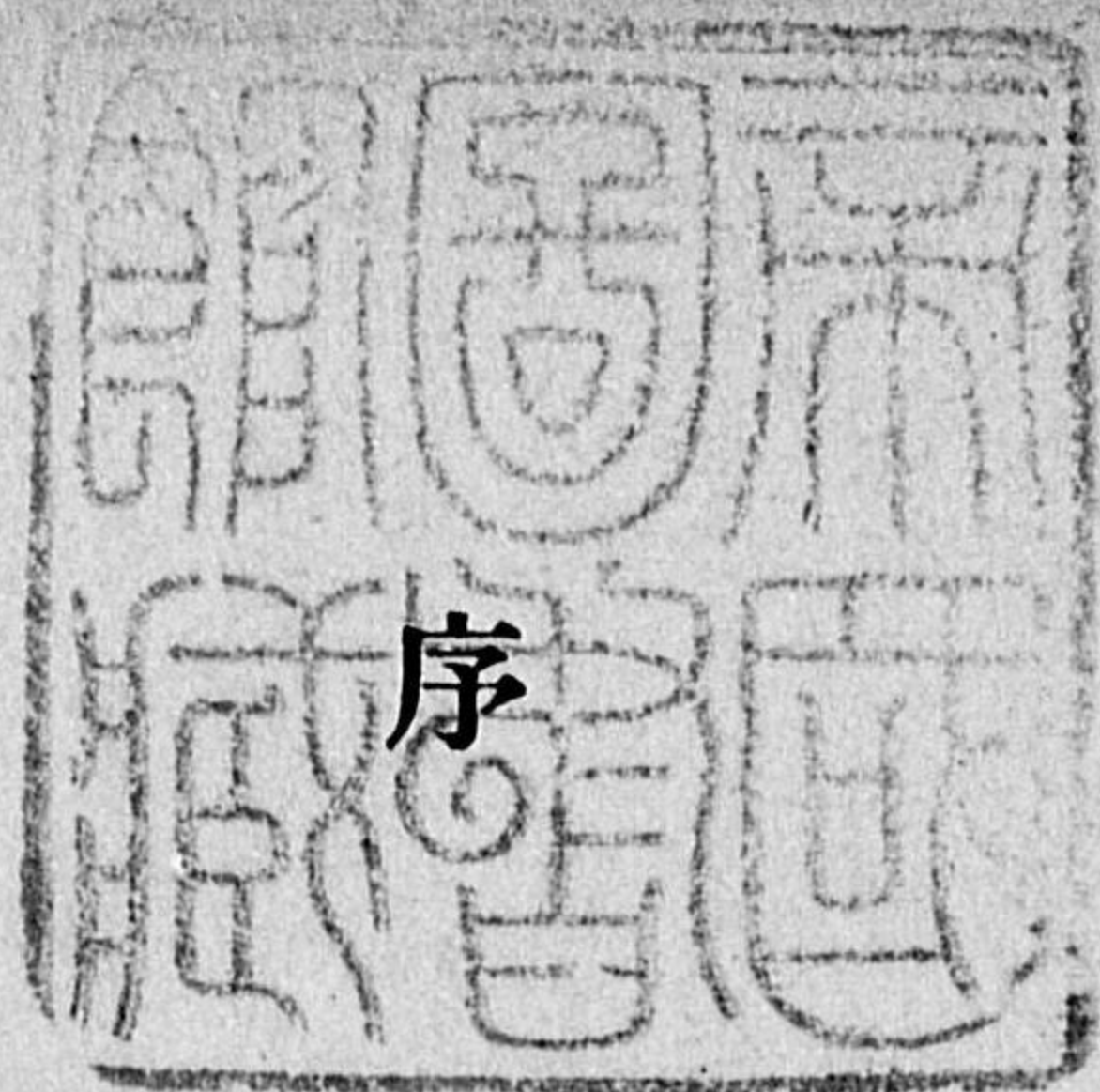
圖 版 目 次

- 圖版一 法隆寺伽藍
- 圖版二 法隆寺五重塔
- 圖版三 法隆寺五重塔實測圖
- 圖版四 法隆寺五重塔塑像 一
- 圖版五 法隆寺五重塔塑像 二
- 圖版六 法輪寺三重塔
- 圖版七 法起寺三重塔
- 圖版八 藥師寺三重塔
- 圖版九 藥師寺三重塔水烟
- 圖版一〇 當麻寺東塔
- 圖版一一 當麻寺西塔
- 圖版一二 室生寺五重塔

- 圖版一三 室生寺五重塔相輪
- 圖版一四 興福寺三重塔
- 圖版一五 興福寺三重塔內部
- 圖版一六 靈山寺三重塔
- 圖版一七 靈山寺三重塔內部
- 圖版一八 百濟寺三重塔
- 圖版一九 興福寺五重塔
- 圖版二〇 南法華寺三重塔
- 圖版二一 談山神社十三重塔
- 圖版二二 海龍王寺五重小塔
- 圖版二三 極樂院五重小塔
- 圖版二四 斗拱集成 一

- 圖版二五 斗拱集成 二
- 圖版二六 斗拱集成 三
- 圖版二七 斗拱集成 四
- 圖版二八 舍利穴を有する心礎 一
- 圖版二九 舍利穴を有する心礎 二
- 圖版三〇 舍利容器 一

- 圖版三一 舍利容器 二
- 圖版三二 ドドコロ廢寺塔石製相輪
- 圖版三三 栗原寺塔伏鉢
- 圖版三四 東大寺七重塔模型
- 圖版三五 元興寺五重塔古圖
- 圖版三六 春日曼荼羅に見ゆる春日御塔



章



概 説

本邦の木造塔婆は大別して二つの形式に分れる。即ち所謂多層塔と多寶塔とがこれであるが、前者は顯教によつて、後者は密教によつて將來された塔形であり、その形の上にもその意味の上にも多くの相違がある。顯教とはわが國に初傳し飛鳥・奈良の文化を生んだ佛教、密教とは平安朝に入つて傳來し、平安時代以降のわが國文化の一要素となつたものであるが、大和は佛教初傳後の飛鳥文化を育み、密教傳來以前の奈良時代文化の開花地であつた。そしてその後時流に従つて密教の流入もあつたが、在地の古寺は顯教文化の傳統牢固として近世にまで及んでゐる。従つてこの地にはいま多數の顯教塔としての多層塔を存し、その歴史的必然によつて、多層塔の上代遺構史は大和の古塔を巡歴する事によつて盡くされる。密教塔としての多寶塔の遺構もあるにはあるが、それは他所のお花畑の種子がたまたま風によつて運ばれ來つて發芽した態の存在でしかない。依つてこゝでは大和に於ける顯教系遺構としての多層塔について、主として建築史的視角に於ける解説と鑑賞とを試みようとするものである。

塔とは何か

塔は日本の古建築造形中の白眉であり、塔ほど歴史への郷愁をそゝるものはあるまい。中世ヨーロッパの人達の神に捧げた熱情は天に冲する高さとなつてゴシックの建築を生んだが、古き寺々に残された本邦の塔婆の蒼穹にそびゆる蒼古たる風事は何を表示するものであらうか。先づ塔の歴史を辿つてみよう。

塔とは印度において佛教と共に發生した建築で、元來佛陀の遺骨を奉安し供養するために營まれたものであつた。これを塔と云ふのは當時パアリー語で「トフバ」(thūpa, thū-po) サンスクリット(梵語)で「スツツバ」(stūpa)と云つたからである。パアリー語とは釋迦族の語として初期佛教徒の間で最も普通に行はれた言

葉、サンスクリットとは古代印度の文語であるが、佛教大陸に傳來するや、大陸の人達は前者に「塔婆」の文字を、後者に「窣堵波」「素觀波」「數斗波」「率都婆」等の文字を當ててこれが音譯とした。塔とはパアリー語を寫した塔婆を更に略したものである。従つて塔婆と云ひ塔と云ふも、それ自體の文字には何等の意味を有するものでなく、單なる音標文字に過ぎない。漢字學者の説によればその塔なる文字も大陸古來の文字ではなく佛教の傳來に伴ふ異國の工作物を紹介する必要上恐らく六朝時代に考察せられた形聲文字であらうと云ふ。従つてこれに對して大陸の翻譯家の中にはその意譯として「墳」「圓塚」「方墳」「大聚」「功德聚」「高顯處」等の文字を用ひたものもあるが、これは廣く用ひられなかつた。

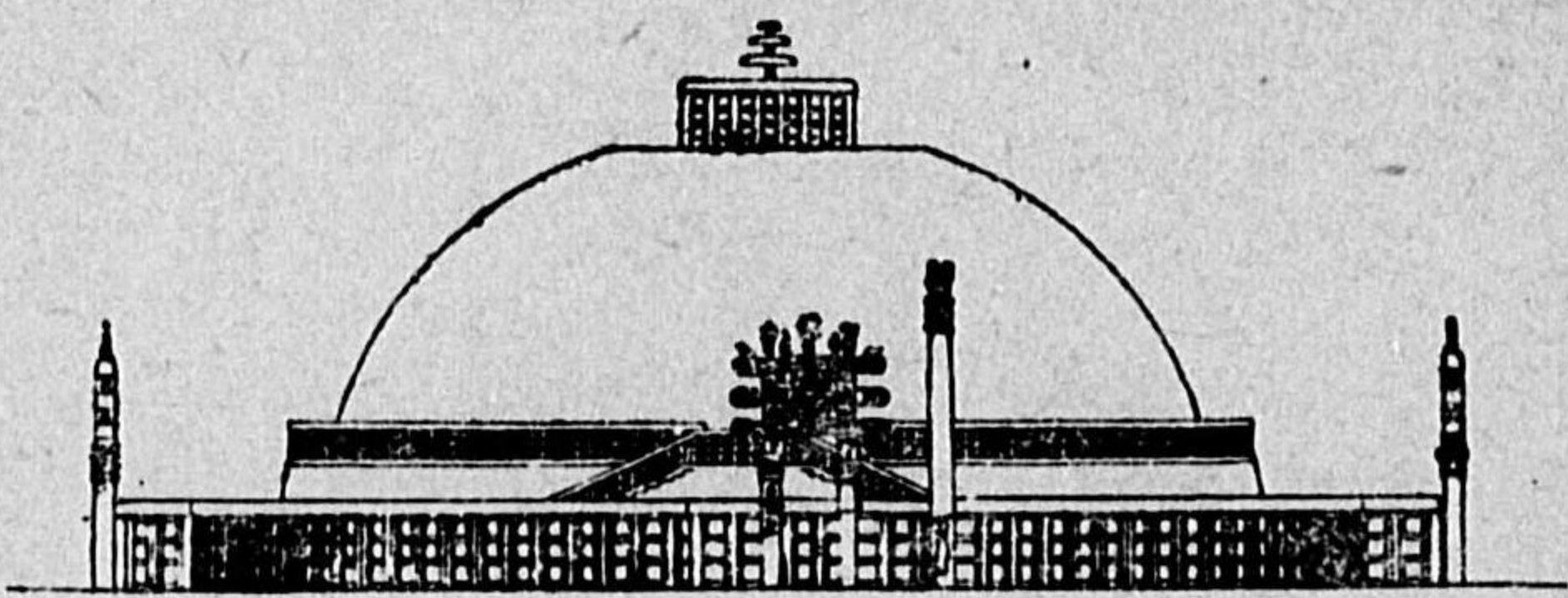
本邦でこれを塔婆又は塔と云ふのは大陸の譯者の當てた文字をそのまま襲用したものである。

さて「トフバ」又は「スツツバ」のその原語に於ける本來の意味は土石で積み上げて作つた墳墓を示すものであるから、それは佛陀以前からの印度の墓形の一つで

あつたが、これがいま云ふ佛舍利を奉安し供養する建造物に對する固有名詞となつたのは云ふまでもなく佛教發生後のことである。

經典の普く記すところによれば、佛陀が拘尸那竭羅城外の沙羅双樹の下で入滅し遺骸を火葬するや、諸地方から集まつた代表者達が亡き偉人を仰讃するためにその遺骨を得たいと熱望したので、八分して八ヶ所にこれを納むるために塔を作り、更に分配の時まで遺骨を盛つてゐた瓶と火葬の際の灰炭とを以て瓶塔と灰炭塔とを作つたと云ふから、この合計十基の塔が所謂塔の初顯であつた。佛陀の入滅は通説によれば西曆紀元前四八六年頃と云はれるから、これによれば塔の歴史は遠く二千四百餘年以前にまで溯るわけである。

しかしその造立の著しさをみたのはこれから二百餘年の後、孔雀王朝第三世の阿育王によつてであつたと云はれてゐる。即ち王は佛教弘通のため前記八塔の遺骨を集め、更に分けてその版圖内に八萬四千基の塔婆を造立したと云ふのである。勿論この塔數の夥しさには疑問もあらうが、相當數の塔婆が王によつて造立せられたのは事實であるらしい。



立面

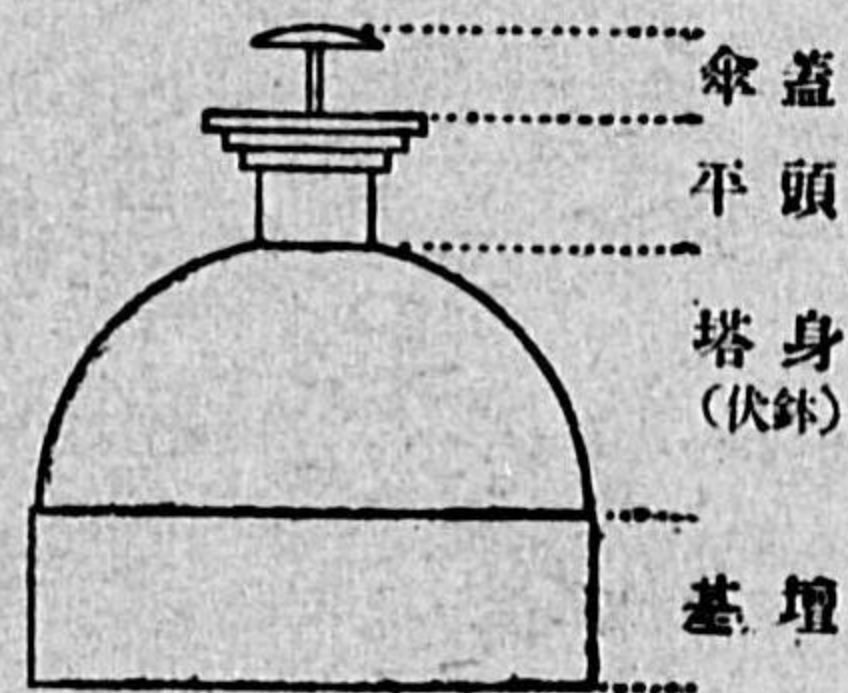
印度サンチー大塔

挿圖一

しかし最初の十基の塔も阿育王塔も遺憾乍らその形式は明らかでないが、幸ひにそれを推測し得べきものはある。それは印度最古の塔と云はれる中印度の一寒驛サンチー丘上の大塔である。塔は西紀前三世紀の中頃の造立と云はれるから、それは宛も阿育王の時代に當つてゐるが、その塔形は低い基壇の上に半球狀の塔身をのせ、頂上に相輪を立てたものである。蓋し墳墓として土饅頭を築くことは最も自然な遺體の處理方式であつて、あらゆる上代民族に共通の現象であるが、塔身上に立てられた相輪は他に見られないものである。即ち相輪とは平頭と呼ばれる四角な臺の上に柱を立て傘形をのせたものである。古來印度・波斯・埃及等の太陽直下の熱帶圏の國々に於ては傘を捧げることは尊者に對する世俗的な儀禮であつた。従つてこの形態は葬所の上に尊崇の儀禮的表象を置いて尊敬の熱情を致したものであるが、恐らくこの形態は塔婆初顯の形式と

みて大過ないであらう。

ところで阿育王の分骨が假りに正しく八萬四千分であつたとすれば、一塔のそれが如何に微量であつたかは問ふまでもないが、その様な微量に分けてまでもそれを拜跪しようとするのは、釋迦滅後の信仰が釋迦の遺物崇拜を誘致したからである。



挿圖二 印度塔婆名稱圖

しかし如何に細分しようとも釋迦の遺骨には限りがあり、熱烈な佛教徒が拜跪の対象として塔婆の建立を希求する念ひには限りがないので、やがてその要求に應じた「舍利」を造つて數多の塔婆の造立を満たしていつた。そして舍利には後に佛陀の遺法を以て舍利と見る考へ即ち經典を以て舍利としたものを生じ、これを法舍利と云ひ、これに對し、即ち身舍利と呼んでゐる。又舍利な

き塔も造られた。

しかしかくの如く塔が遺體の葬所としての意味を離れて、それ自體が禮拜の對照としての在り方を確立するに至ると、葬所たる塔身の部分は次第に退化し、却つて崇高性を標示する相輪と、神聖建築としての性格を効果あらしめる基壇とが次第に

發達するに至つた。この傾向は北印度に於ては特に顯著となり、これが中亞諸國を経て支那大陸に傳へられた頃には、一層基壇が發達して恰もこの部分が塔身と見誤られる程のものも現れて來た。勿論大陸に於ては、初めはこの西方の塔婆様式に倣

挿圖三 大同石窟第二洞東壁の浮彫塔婆



つた事もあらうが、やがてその發達せる基部を大陸固有の樓閣建築の手法で構作するに及んで、茲に印度方面のものとは似もつかぬ新様式の塔を生ずる事となつたのである。大陸に於ける佛教の傳來は前漢の末即ち西紀紀元前後の事であつたと云はれるが、この樓閣式の支那佛塔の組成があつたのは西紀一世紀頃の事と考へられてゐる。

本邦の塔婆はこの大陸に於て生れた新塔婆形式が傳へられたものであるが、わが國に於ては構材の關係上、木造塔婆として造立されねばならなかつたので、大陸に

於ける磚や石等で造形された各種の塔の中、木造塔婆の形式を攝取して大成したものである。

本邦の造塔

本邦に於ける佛教の公傳は欽明天皇の十三年と云はれてゐる。従つて東海の花綵列島が、この靈妙な法を知つたのは正に釋迦滅後一千年を閑した後であつたが、それは忽ちにして當時の帝都の地たる大和の飛鳥地方に於て開花し、この國人の強烈な攝受性はやがてこの外來文化を咀嚼してあの華やかな飛鳥文化の名に呼ばれる獨自の新文化を現じた。

『日本書紀』によれば本邦に於ける造塔の初顯は、敏達天皇の十四年春二月蘇我馬子が大野丘〔元興寺緣起〕によれば奈良縣高市郡飛鳥村廣嚴寺(豐浦寺)附近の北に起立したものであるが、間もなく諸國に

疫疾の流行を見たので、排佛派の物部守屋等これを蘇我氏崇佛の結果となし、三月六日塔は斫倒されて燔かれたとあるから、その盛觀ははかなくも月餘に過ぎぬものであつた。しかしこの塔の造立の事情には史實的な疑問があるので、これを以て正しい本邦造塔の初顯と見ることは困難である。いま正確にその造立が知られる最古の塔は推古天皇の初年に營まれた飛鳥寺〔奈良縣高市郡飛鳥村〕の塔であらう。〔日本書紀〕この塔は

後の記録によれば五重塔であつたらしい。〔諸寺緣起集〕つゞいて記録の上では舒明天皇六年に豐浦寺〔奈良縣高市郡飛鳥村〕の塔が〔聖德太子傳玉林抄〕十一年には百濟大寺〔奈良縣北葛城郡百濟村〕に九重塔が建てられた事が見えてゐるが〔日本書紀〕、當時の寺院は後條に於て述べる如く一定の伽藍の配置を持ち、そこには教祖を崇めるための塔婆の存在を必要としたから、これらの記録には見えすとも壯麗な塔婆を以て嚴修されてゐた様である。

従つて『日本書紀』推古天皇卅二年の條に「有寺四十六所、僧八百十六人、尼五百十九人」とあり、降つて『扶桑略記』持統天皇六年條には「令計天下諸寺凡五百四十五寺」と見えるこの熾烈な造寺の状は、また造塔の飛躍的な増加を示すものである。

佛教文化の最盛期を現じた奈良時代に於ては、聖武天皇は天平十三年國毎に七重塔一基を敬造すべきことを命ぜられてゐるから〔續日本書紀〕、やがて日本の國々はこの美しい工作物を必ず一基は持ち得たであらう。いま本邦の奈良朝以前の寺院址と見るべきもの一千を下らないが、これらの寺々に假りに一基の塔を添加しても、この秀麗な山野は日に輝ふ塔影見ざるなき美しさを現じたことと思はれる。

ところで曩に飛鳥時代の寺院は一定の伽藍の配置を持ち、そこには必ず塔婆の存在を必要としたと云つたが、これは奈良朝時代寺院に於てもさうであつた。

印度に於ける初期佛教は佛陀在世中には云ふまでもなく佛陀自體が信仰の中心であつた。従つて僧團の生活は佛陀に聽聞・悟道することであつたから、當時の建築としては僧團の住する精舎（僧房）のみを以て足りた。しかるに、その涅槃後は佛陀の遺跡、遺物等の崇拜を以て信仰の對象とするに至り、寺院はその佛陀の遺骨を藏する塔を中核として營まれた。やがて佛教の弘通に従つて佛陀の遺法即ち經典を以て信仰の中心とするに至り、寺院は遺法（佛典）を講ずる講堂を伴ふに至つた。

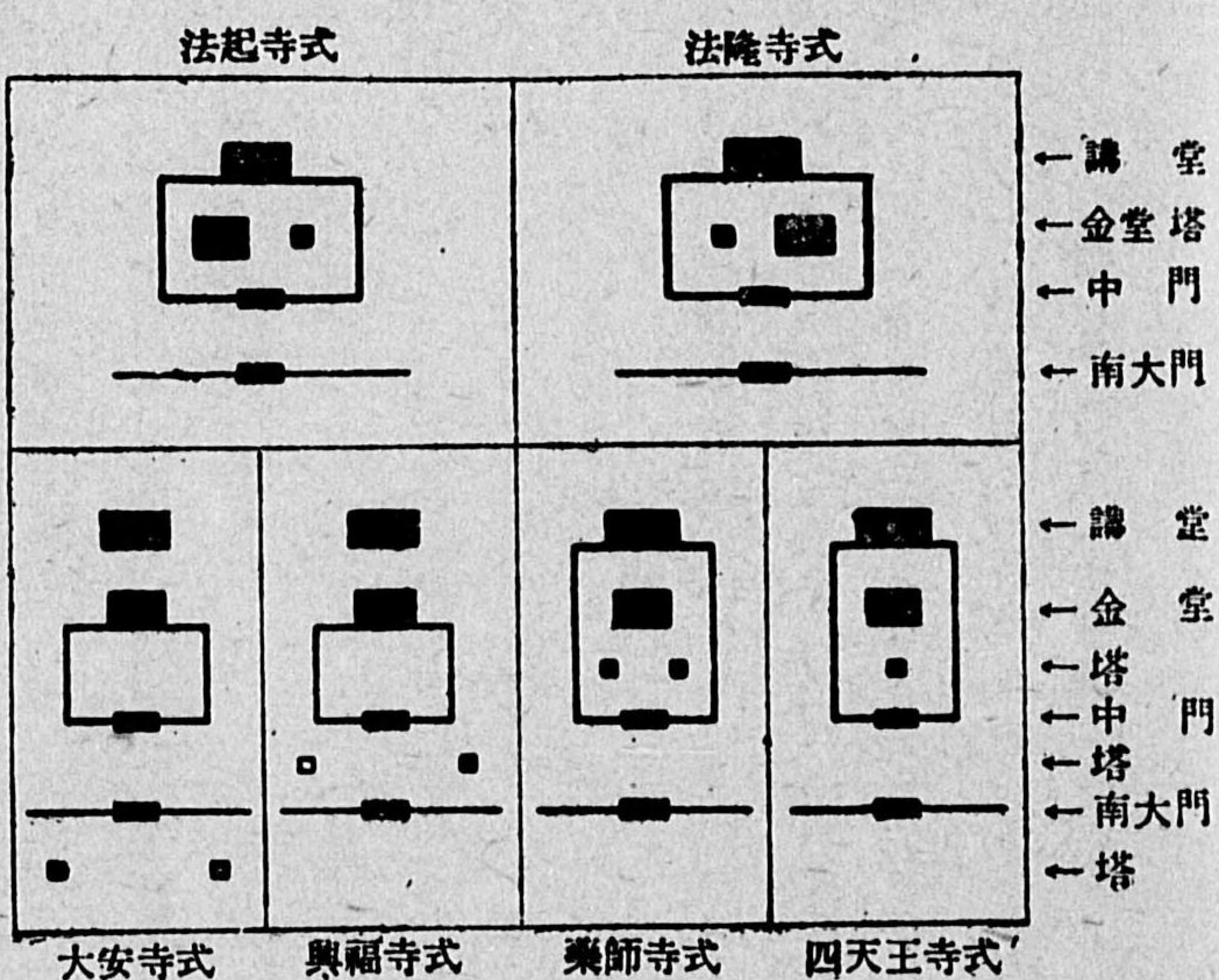
そしてそれが支那大陸に傳はつた頃には、法身の佛陀としての佛像と、それを奉安する佛殿とを加へるに至つてゐた。しかし遺法の講究によつて開覺に達しようとする當時の佛教の在り方は寺院をして後世のものとは餘程性質を異にし、云はゞ一種の佛教研究所乃至は學林の如きものとした。

本邦の飛鳥・奈良時代に傳來した佛教はさうした傾向のもので、當時の宗派は所謂南都六宗、即ち法相・三論・華嚴・俱舍・成實・律の六派であるが、これらは後の宗派の如く對立したものでなく、一種の學派とも見るべきものであつた。従つてその伽藍も宗派による相違はなく、みな一樣に一種學林の如き機構に従つて營まれた。先づ寺地は平地に撰ばれ、多く南を正面として佛舍利を安置して教祖を仰讃すべき塔とぞの寺根本の眼目となる尊像を安置すべき金堂とを中心としてその後方に經典等を考究する講堂があり、更にその附近には經典等を保存すべき經藏・時刻を報ずるための鐘樓・僧侶の宿泊すべき數棟の僧坊・齋食を行ふ食堂以下の諸建築が配されてゐたのである。

しかし本邦の初期寺院の形態にも、その諸堂の配置に二つの形式があつた。即ち法隆寺が代表する様に廻廊内に金堂と塔を横置するものと、これを四天王寺が代表する様に縦置するものである。いまわれわれは前者を法隆寺式、後者を四天王寺式と呼んでゐる。このうち四天王寺式は大陸傳來の形式であるが、法隆寺式はわが國の創意になつたものであるらしい。しかしこの兩者に於て當時塔と金堂とが一寺の中樞をなしてゐた状態を読み取る事が出来よう。『續日本紀』大寶元年七月廿七日の條に

造塔丈六二官准_レ司

とあつて、造塔と造佛とが同等に扱はれてゐるのもこの間の事情をよく示してゐる。續いて二基の塔を金堂前に並置した藥師寺式や、奈良時代に入るとその双塔を廻廊外に置いた興福寺式が大陸から將來された。この興福寺の形式はその後の伽藍制度の基準となつた。この中には東大寺の様に塔を廻廊で圍んだものも生じたが、これらの伽藍制度の變轉に於て注意すべきは、古くは塔と金堂とが廻廊内にあつて等價値を持つてゐたのに、やがて佛殿尊重の風を生じ塔婆は廻廊外に出て、金堂と塔



挿圖四 飛鳥・奈良時代伽藍配置圖

とに輕重を生じたことである。かくして塔は次第に教團の中樞から離脱し、後世の寺院では必ずしもこれを要しないこととなつたのである。

しかし塔婆の造立には、以上の如き伽藍構成上の必要以外に、既に印度に於て塔を建てること、こよなき功德だとする考へがあつたので、又さうした意圖の單獨の造立もあり得た様である。『續日本紀』天平十九年十二月十四日條には

勅。天下諸國。或有百姓情願造塔者。悉聽之。其造地者必立伽藍院內。不

得_三濫作_三山野路邊。若備儲畢。先申_三其狀。

とあり、山野路邊の適地にあらざる地點への濫作を禁止したことが見えてゐる。しかしこの在々所々に造立された各種の塔は、この山紫水明の國土に必ずやこの上もない風致の美を添へたものと思はれる。

ところが、都が平城から平安に移り、平安初葉、空海・最澄等によつて密教が將來されるや、密教の塔として多寶塔が傳來し、こゝに本邦の塔婆に一形式を加へるに至つた。

多寶塔とは圓形平面の塔身を持つ寶塔の下部に裳階を附したもので、印度の原始塔婆の系統を引いたものとも見得る奇構である。(挿圖五)密教といふのは顯教に對する語で眞言祕密教の略である。顯教は佛陀が機に應じ、物に接して衆生に説いた教法に基づく教で飛鳥・奈良時代の佛教はこれであつたが、密教はこれが印度教の影響によつて哲學的な思辯を加へ法身の佛陀たる大日如來が自己内證の法門を説く祕奧眞實の教となすもので多寶塔はその教主たる大日如來の三昧耶形とされるものであつた。

従つて顯教伽藍の塔を佛舍利を奉藏するための塔即ち舍利塔と云ふのに對してこれを大日塔と云ふ場合もある。そして顯教寺院は密教寺院の盛行の前に古都の諸寺に



挿圖五 和歌山縣根來大傳法院多寶塔

法燈を保つばかりとなり、又多くの寺院も時代の趨勢に従つて密教化して行つたので、密教寺院の盛行と共に數多のこの塔形がこの國の佛寺を彩ることとなつたが、從來の多層塔を以て大日塔としたものもあつた。密教寺院は元來形而下的な大伽藍主義を否定して立つたので、多く山嶽の靜寂な

淨域に適宜堂舎を配してなつた。よつて飛鳥・奈良の佛教を平地佛教又伽藍佛教と

云ふに對してこれを山嶽佛教と云ふ場合もあるが、塔の位置にも一定の占地は見られなかつた。しかし後に營まれた伽藍では興福寺式の配置を持ち塔は廻廊の外、東南並びに西南方に置かれたものもあつた。

しかし、密教による平安朝の佛教はやがて教學的な智性を失ひ、佛の威力を信じ加持・祈禱によつて自らの菩提を希求しようとする熱狂を呼んだが、平安中頃から加持・祈禱も求福攘禍に役立たぬ事に失望した人々は、佛陀の慈悲によつて極樂淨土に往生を願ふべく、この世に善根を積まうとして寺院の經營に奉仕した。この時代の塔には既に塔婆の寺としての必要はなくなつてゐたけれども、かゝる目的による施入によつて著しい造立をみてゐる。『中右記』大治四年七月十五日條には白河法皇「年來、御善根」として、

繪像五千四百七十餘躰、生丈佛五躰、丈六(佛)百二十七躰、半丈六六躰、等身三千百五十躰、三尺以下三千九百三十餘躰、七宇、塔二十一基、小塔四十四萬六千六百三十餘基、
金泥一切經書寫、

と云ふ驚くべき作善が記され、また「禪定法王御在位間希代勝事」として「毎靈社立塔婆、其數多」とも見えてゐるのはこの間の事柄を示す好例であるが、これらの塔は寺院の組織上の必要ではなかつたので、それは風致の效果に従つて自由な立地を選んで建てられた。

神佛習合の風の盛行後は同じ目的から神域にも立てられる様になつたが、その立地の撰定はやはりその莊嚴效果に従つた。

鎌倉時代は社會一般の革新に伴つて佛教も活潑な行動に終始した時代であるが、それは淨土教の民衆化による念佛宗の確立と古宗の復興、禪宗の將來等であつた。しかしこれらの宗派に於ては、教理上必ずしも塔を必要としなかつたので、造塔の著しきは前代程ではなかつたが、やはり伽藍の莊嚴の爲や、善根を求め人達の寄進による造塔はあつた。室町・江戸期の教界はこの鎌倉佛教の擴充と減退の時代に過ぎないので、造塔に關しては同様な状態でしかなかつた。

従つて塔が釋迦を仰讃するための建築としての本來の在り方をもつてゐたのは顯
教寺院に於てであつて、密教以後の寺院に於ては教團的な目的を伴はぬ寺域の莊嚴
建築に過ぎなかつたのである。

塔婆構造

さて以上の本邦の造塔一千年の歴史を回想したわれわれは、次に本邦塔婆の構造
についてみよう。本邦塔婆の形式は、それが材料の上で木造塔として造立されねば
ならなかつたと云ふ理由もあらうが、大陸の塔の如き多様性はなく、構造的には總
て同一であつたとさへ云ひ得る。しかしこの構造上の同似性にも拘らず、その時々
の文化と好尚とによつて各時代各様の塔婆を造つてゐる。こゝでは構造の概括的な
形式を述べ以て古塔鑑賞の前提としよう。

外部の形式

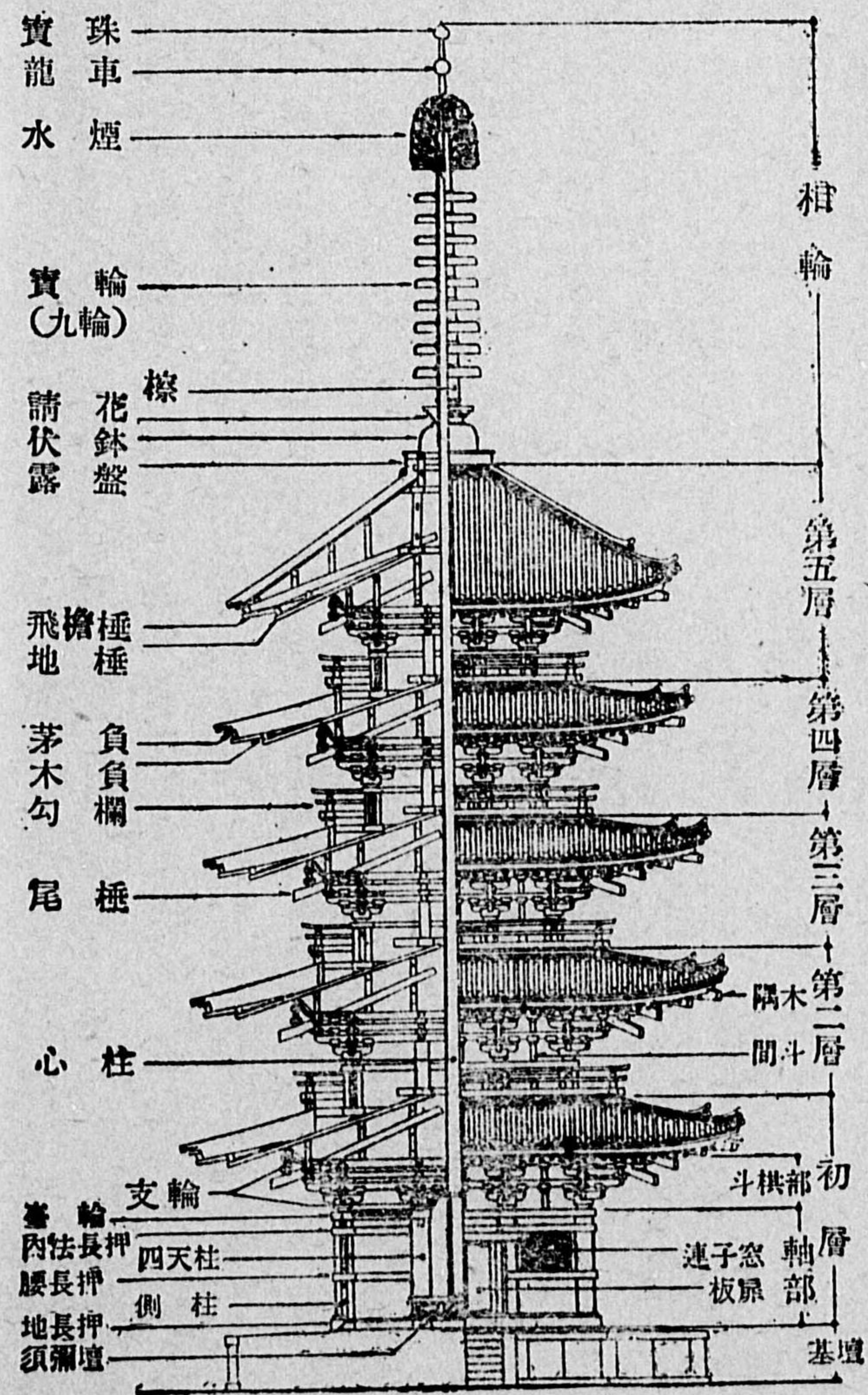
先づ塔は外部的に見れば塔身と相輪とに分れる。(挿圖六)

塔身は基壇上に立ち土間床の場合と、床を持ち四方に木口縁を備へる場合とある
が、後者は平安以降に現れた佛寺建築の日本化の一事象であつた。

塔身は塔によつて三重、五重、七重、九重、十三重等の層階に分れるが、層數に
は偶數の場合はないので三重以下の事はなく、又十三重以上の場合はいまのところ
記録的にも見當らない。しかしこの三重と云ひ、五重と云ふ層階には教理上の意味
はなく、單に塔の大きさによる構造上の要求に基くものであつたらしい。即ち大き
い塔では七重・九重に、小さい塔では三重とするといふわけである。

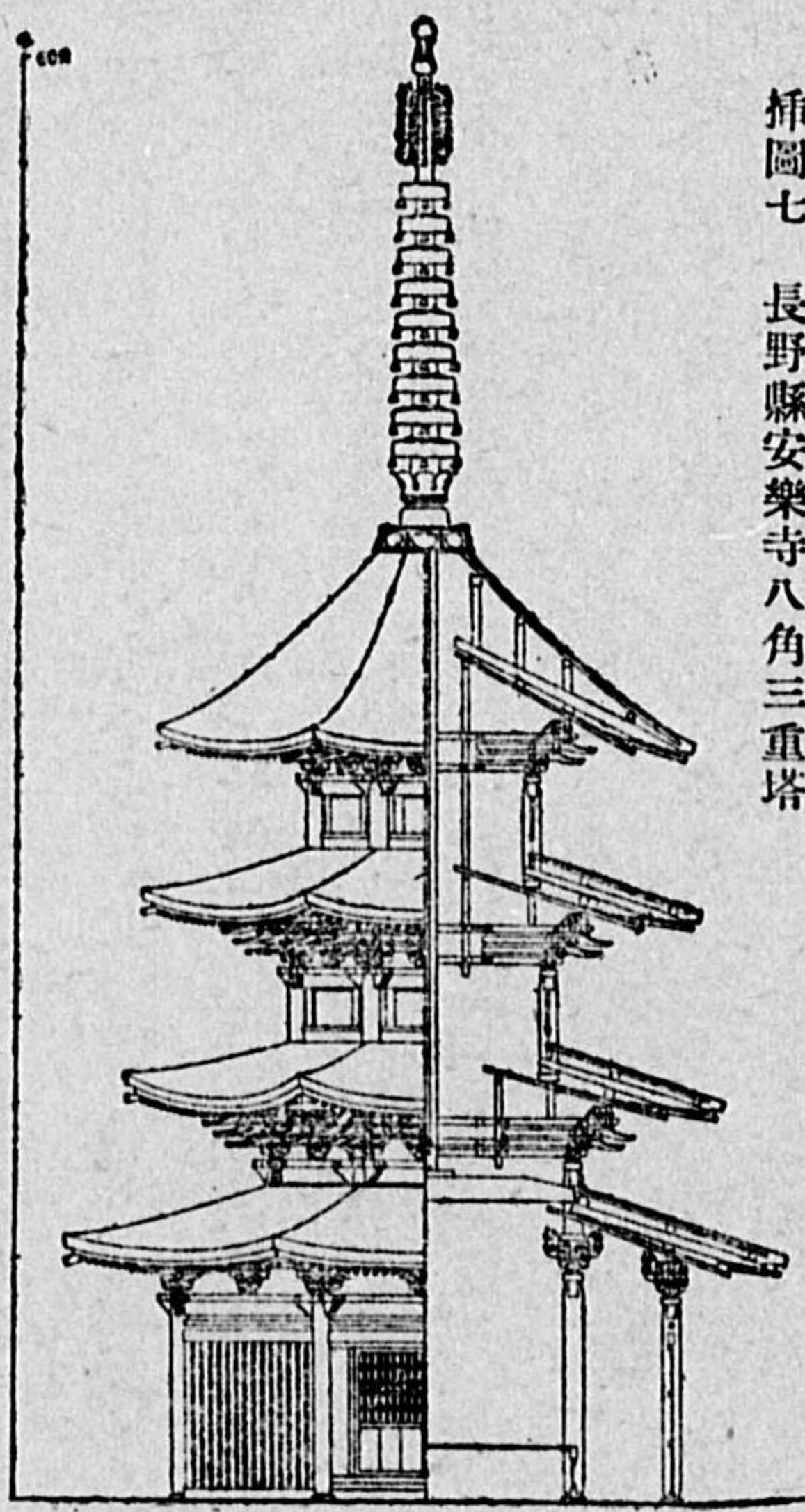
塔の平面は普通方形で、柱間は三間が定形である。これに裳階モコシがつくと五間とな
るが、裳階は庇にすぎぬから塔の平面はあくまでも三間である。この裳階について
一見五間となつてゐる例は現に藥師寺塔に見られ、遺址の上では大官大寺塔、春日
東塔等に見ることが出来る。しかし西大寺塔の如く八角塔も記録に見え、現に長野

挿圖六 塔婆各部名稱圖（圖は醍醐寺五重塔）



縣の安樂寺には三重塔として現存してゐるから、かゝる例もあるが、これは本邦塔婆としては異例に屬する。

挿圖七 長野縣安樂寺八角三重塔



さて三間の平面に於ては一般に中間が脇の間より廣いのが例であるが、これには時代的な約束はないらしい。しかし三間同寸の例も古くからある。藥師寺塔はその例である。

ち上つてゐるが、奈良時代以前の塔に於ては柱間一間を減じて二間とした特異な意匠がある。即ち法隆寺塔や藥師寺塔の最上層、當麻寺東塔の二層以上に見られる意匠で、當時の工匠の徒らに機械的な整一性に捉はれぬ非凡な意圖を見る事が出来る。

上層平面は普通初層平面を縮少しつゝ柱間は同じ比例によつて建

各層階は他の佛寺建築と同じく各々柱を立て斗拱を組んで軒を支へて建て登り、各層の屋根は瓦又は檜皮、柿板^{コケラ}等で葺き、近世のものには銅板を以てしたものも生じた。柱は裳階には角柱を用ふ場合もあるが、總て圓柱で、奈良時代以前のものはエンタシス (entasis) と稱する中膨らみを持つてゐる。斗拱は法隆寺・法輪寺・法起寺の和銅以前の造立と考へられる三塔には斗、肘木を一體とした曲線で造り出された雲斗拱を用ひてゐるが、一般には三手先組^(圖版二五・二六・二七)を定形とし稀に二手先^(長野縣安樂寺三層塔初層)や、出三斗^(興福寺三層塔初層)を用ひた場合もあり、法隆寺や薬師寺塔の裳階では三斗組が用ひられてゐる。斗拱を構成する斗は一般に時代が溯る程成が高く、肘木の曲線はゆるやかにして力強く、奈良時代以前のものには上部に笹線がある。笹線は鎌倉時代以後の斗拱にも見る場合があるが、奈良時代のものには全體が曲線で力強く線られてゐる。支輪は古いものほど曲線はゆるく、尾極は直線状となり、斗拱と斗拱との中間には古くは中備を持たぬが、奈良時代に入つては斗束を飾り鎌倉時代以降の遺構には蛙股を入れたものもある。軒は法隆・法輪・法起三寺の塔が一軒角繁極である外、すべて例外なく二軒繁極であるが、このうち平安初葉以前の地極は圓形断面を持つて

る。屋根は時代が溯る程勾配が緩く、平安朝のものには上層の屋根に反轉曲線を有する優美なものもあつた。^(參照興福寺三層塔)各層三間の柱間は、その中央間を扉、兩脇間を壁或ひは欄窓としこれに長押を装打する。欄窓は上代のものほど粗く長押はその成が低い。又二層以上には縁を設けこれに勾欄を飾つてゐるが、この形式にも各種ある。即ち古くは法隆寺の如く平桁と地覆が間に卍字崩しの組子を入れたもの、^(圖版二)海龍王寺小塔の如く横欄を入れたもの等^(圖版三三・三六)があり、又奈良時代頃から中央間を開けて兩脇間にしか勾欄を置かぬものも始められてゐる。

以上が塔身構造の普通の場合であるが、中にはその各層裳階と稱する張り出しを附した場合がある。即ち薬師寺塔に見るそれ^(圖版八・挿圖一八)であるが、この裳階は軒參差たる塔の構成に猶一つの階調を添へる美しい意匠である。

相輪は青銅又は鐵で造られ稀には石で造られたものもあるが、^(參照下ドコ)その形式は最下に「露盤」と呼ばれる方形の臺を置き、その上に「伏鉢」と呼ばれる半球状のものを、更に「請花」と呼ばれる花瓣状のものをのせ、その中から「擦」と呼ばれる柱が立ち、柱は「相輪」を貫いてその上に「水烟」と云ふ四枚の透し彫りの羽

根をつけ、頂上には二個の寶珠が附く。この二個の寶珠は下のものを「龍舎」^{リウウツヤ}上のものを「寶珠」^{ホウジュ}と呼ばれてゐる。

寶輪は九を以て定數とするので九輪とも呼ばれ、又これを相輪といふ事もある。しかしこれには現に當麻寺塔の如く八輪の場合、談山神社塔の如く七輪の場合もある。寶輪の數は印度に於ては全く不定で、多いのは廿五の輪を重ねたと云ひ、大陸に於ては三・四・五より十六位までの實例があり、一定してゐない様であるから、これを九にしたのは日本に於ける創意であらうか。

しかし以上の相輪の名稱にも上代のものと近世のものとは少なからぬ相異がある。正倉院文書では露盤を伏盤、請花を薄仙花、水烟を宇須、寶珠を匏と云つてゐるが、平安朝の記録では寶珠を流星と記したのもあり、^{〔東大寺要録〕}七上代塔では相輪の全體を露盤とも云つてゐる。これによれば現在最下の方形の臺を露盤と云つてゐるのは承露盤の略であらう。

相輪が塔の初發に於ける形状の表徴化であつたことは曩に述べたが、これを印度に於ける原形と比較してみれば、^{〔挿圖二〕}次の如くならう。

本邦相輪 露盤 伏鉢 請花 寶輪—水烟—龍舎—寶珠(相輪)
スツ—バ 基壇 塔身 平頭 相輪

しかし以上本邦相輪の定形に對して異例と見るべきものが一つある。それは龍舎・寶珠に代ふるに寶瓶・寶蓋を以てした室生寺塔の相輪である。^{〔圖版二三〕}大陸の六朝塔に於ては寶瓶を相輪に置いた例が見えるから、やはりかの地の先蹤によつたものであらう。

さて以上の各部の組成によつて造形せられた各時代の塔婆の外形に現れた最も著しい年代的な變化は年代が下るにつれて塔は高險になると云ふ事である。同一平面の廣さに對してより高い塔を組み得ると云ふ事は一は建築技法の發達を物語るものであるが、これが塔婆の安定感を損ふ結果を來した事は皮肉な現象であつた。即ちこれを平面と高との關係で表示してみれば次の如くである。

三 重 塔

和銅以前 法起寺塔

總高／初層一邊長 相輪長／總高 上層一邊長／初層一邊長
三・七六 〇・三〇四 〇・五〇〇

和銅以前	五重塔	總高／初層一邊長	相輪長／總高	上層一邊長／初層一邊長
奈良 當麻寺東塔	四・三八	〇・二九三	〇・五一四	
當麻寺西塔	四・七三	〇・三一七	〇・六八九	
平安 一乘寺塔 <small>兵庫縣</small>	四・七六	〇・三〇四	〇・六一〇	
淨瑠璃寺塔 <small>京都府</small>	五・二六	〇・三七七	〇・八三七	
鎌倉 靈山寺塔	四・九三	〇・三二五	〇・七〇二	
百濟寺塔	五・二三	〇・三六五	〇・七二四	
室町 岩船寺塔 <small>京都府</small>	五・三三	〇・三〇七	〇・七三八	
南法華寺塔	五・〇一	〇・三〇八	〇・七八二	
江戸 寶仙寺塔 <small>東京府</small>	五・〇四	〇・二六四	〇・七二七	
和銅以前 法隆寺塔	四・九六	〇・二八五	〇・五〇〇	
奈良 海龍王寺小塔	—	—	〇・四四七	

和銅以後	總高／初層一邊長	相輪長／總高	上層一邊長／初層一邊長
(興福寺塔) (據實字記) 極樂院小塔	五・〇三	〇・三三七	—
室生寺塔	六・五一	〇・三三八	〇・六四六
醍醐寺塔 <small>京都府</small>	五・五〇	〇・三四八	〇・五九〇
海住山寺塔 <small>京都府</small>	六・四六	〇・三四	〇・六二六
興福寺塔	五・六六	〇・二四九	〇・七四四
法觀寺塔 <small>京都府</small>	五・七七	〇・三〇九	〇・六九二
瑠璃光寺塔 <small>山口縣</small>	五・九六	〇・二七九	〇・六七七
教王護國寺塔 <small>京都府</small>	五・八八	〇・二六八	〇・六四六
本門寺塔 <small>東京府</small>	六・〇六	〇・二八九	〇・七〇三
寬永寺塔 <small>東京府</small>	六・六六	〇・二二五	〇・六六六
		〇・二六五	〇・六五三

従つて相輪は大體全高の三分の一の比例を持つてゐるが、近世のものほど短くなる傾向をもち初層平面と總高との關係は上代塔と近世塔では初層平面一つ程度の増

減があり、上層と初層平面との関係はやはり二割程度の増減が見られる。しかし相輪は當初のものを有する例は少ないので、この表の比例値はそのまゝ當初のものは見難いことを附記して置かう。

猶塔婆の高さは飛鳥・奈良時代の伽藍の一部として營まれたものには伽藍の釣合上ある種の約束があつたらしく、その高さは略々金堂高の二倍に當つてゐる。

内部構造

ところでこの外部的な構架を構造的に見ると、塔身は側柱と四天柱とで支へられた中空の樓閣として造られてゐ、中心には相輪を支へるための心柱が塔身を貫いて立てられてゐる。従つて心柱は塔身構造には關聯を持たぬもので、それは單に長大な相輪を支へるための控へに過ぎぬ。上代の塔ではこの心柱は塔身をぬいて初層にまで達してゐるが、平安朝に入ると二層目で止つてゐるものも生じた。

塔内は初層にのみ室としての設備があり、登ることを意圖してゐないので二層以上は構架材の氾濫にまかせてゐる。その初層内は四天柱間を内陣、他を外陣とし、

内陣には四天柱一杯に須彌壇を設けて造塔の目的に従つた鋪設を施す。即ち顯教の塔では多く塔基四方佛と云はれる四佛を四面に安置する。四佛とは南面に釋迦、北面に彌勒、東面に藥師、西面に彌陀を配するもので、それらは單立の尊像として安置される場合、各淨土相として群像を以て現れる場合、稀には畫像を以て莊嚴される場合等があるが、この釋迦、彌勒、藥師、彌陀を四方に配する事が如何なる經典の所依によつたものかは不明とされてゐる。この他上代塔の塔基の設備には法隆寺塔の如く、經典中のある場面を群像を以て現したり、創建當初の藥師寺塔の如く釋迦の傳記を四面に造成したもの等があつた。密教塔では大日如來やその處變とする尊像が置かれた。然し平安朝の中頃から塔婆が教義上の必要からでなく作善のためや、供養のために建てられるに至るとその本願に従つた佛像を置いたものも現れ、神社境内に神佛習合の結果奉獻された塔婆はその神社の本地佛を本尊として配された。そして四天柱は後世の小塔では必ずしも四本を設けず、前面の二本を抜いて後面の二本に來迎壁としての障壁を設け、一般佛堂に準じて佛像を安置した例もあり、造りつけの厨子を設けてゐる例もある。

天井は多く外陣を上代塔では切目天井、後には格天井とするが、内陣は折上天井として丁重な取扱ひをし、柱や、扉内面、内壁にはそれぞれの安置佛に因んだ彩畫を以て絢爛たる莊嚴が施されるのが常である。従つて天井や長押も寶相華や唐草文を以て埋められ丹青の限りを盡してゐる。

床は上代塔では土面床で石敷や埴敷とされたが、平安朝に入つて四周に椽が繞らされるに至ると高床を持ち拭板敷とされた。

装飾

最近新造された四天王寺の五重塔や高野山の塔をみた人達は、その強すぎるまでの塗装に一驚するが、塔婆の造立時に於ける莊嚴はすべてあの様にまばゆいまでの塗装が施されてゐたのである。即ち柱や斗拱や極は朱・丹で、それらの木口は黄土で、化粧裏板や裏甲等の板面には胡粉を白く、窓は緑青で塗られ、相輪はさらきらしく鍍金せられたのである。そして長押や扉には鍔金物を、極木口には極金物を装打してゐたと云へば、その美しさには現代人の想像を越えたものがあつたと思は

れる。

大陸の石窟の塔や飛鳥・奈良時代の彫刻や繪畫に示された塔には相輪に幡を結んだものが見えてゐるから、或ひは上代の塔には蒼穹に翩翩たる幡を結んだものもあつたのかもしれない。

又軒先の四隅にはいま風鐸を釣つた塔しかないが『古今目録抄』によれば法隆寺塔には各隅棟の端には金銅の寶珠を置き、初層の軒の四隅には篋篋が吊られてゐたと云ふから、微風にゆらぐ天來の妙音は、淨域に集ふ人達に法悅の豊かさを與へたに違ひない。『扶桑略記』にも八坂法觀寺塔が傾斜したのを淨藏の加持によつて舊に態した事を叙して「向」塔加持。漸及亥刻。微風吹來。塔婆震動。寶鐸。篋篋。隨動和鳴。」と云ふ美しい記載があるが、この靈驗譚が一片の物語に過ぎぬとしても、篋篋を吊つた塔のあつた事は認められる。

舍利の所在

しかし既に述べた如く塔とは舍利供養の建築である。聖德太子はかの『法華經義

疏』第一に於て

作塔正爲供養舍利。而國自然嚴清。如天樹王也。

と仰せられてゐるが、これは「塔を作る根本の目的は舍利供養にある。しかるに塔を建てればその結果國土も自ら立派になる。」といふ意であり、本邦造塔思想の根本を示し給ふたものである。

かの『靈異記』には「塔是後三世佛舍利之寶藏也」とあるのも洵によく塔婆の意義を現してゐる。平安朝以後の塔に於ても塔が舍利を藏する建築であつた事には變りはない。従つて塔をかくの如く藏舎利の建築と見る時、その本體たる舎利の所在は塔自體にとつて最も重要な問題であり、實際上その位置によつて塔の構造に少なからぬ變化を與へてゐる。よつて次にこの舎利の所在について述べてみよう。

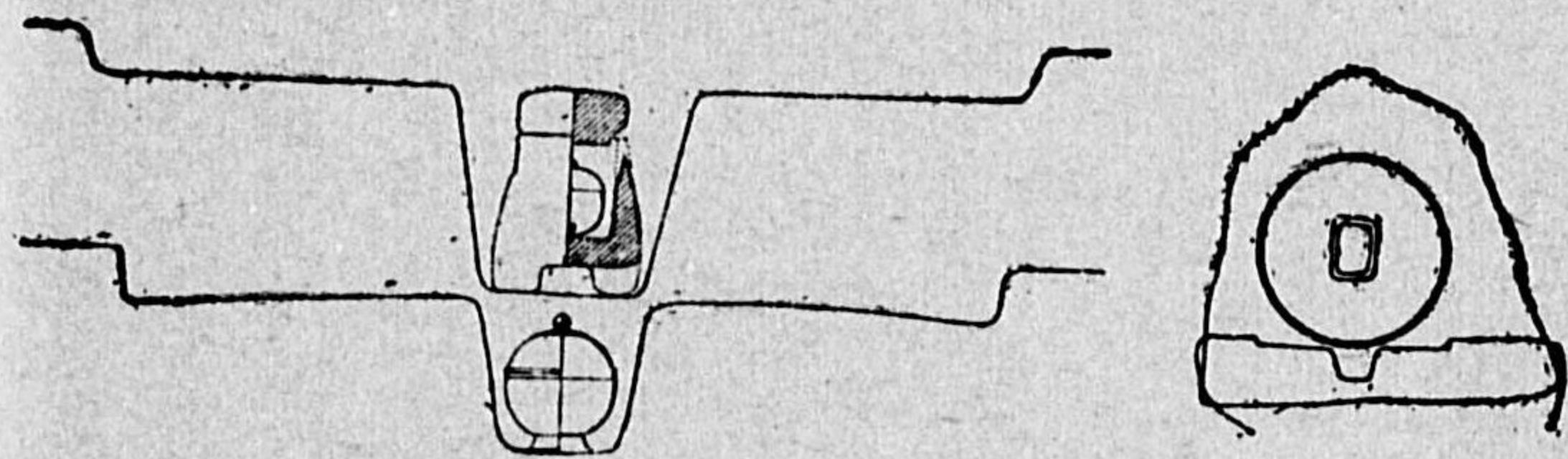
本邦に於ける舎利には古くから身舎利、法舎利の兩者があり、かの國分寺の七重塔は最勝王經を收めた法舎利塔であつた。身舎利としては實物的にはそれは美しい小石や水晶の玉等が用ひられてゐる。

さて印度に於ける塔に於てはその初發には舎利はその葬所たる塔身に入れられた

が、塔が崇仰建築化して後は崇仰効果の必然として中空高き相輪中に入れられるに至つた。大陸に於て新しく形成された塔に於てもこれを受けて塔上の相輪や塔身の中に置いたもの、また塔下に埋置したものがあつたが、わが國の塔では大別して次の五つの安置方法がある。

- 一、心礎下に收むるもの
- 二、心礎中に收むるもの
- 三、心柱の中に收むるもの
- 四、相輪に收むるもの
- 五、各層階に塔構造とは關係なく置くもの

このうち「一」は大陸の古塔に於て行はれたものでこの形式の本邦に於て未だ確認されたものはないが、後の發見を豫測して擧げて置く。「二」は奈良朝以前の塔に於て最も普通に行はれたもので、これは心礎の心柱下に安置穴を穿つて入れた。その心礎に掘られる舎利穴の形式には各種あるが、稀な場合には舎利穴は心柱下でなく心礎の横腹に穿たれる場合もある。そしてこの心礎に舎利を入れる形式にも二



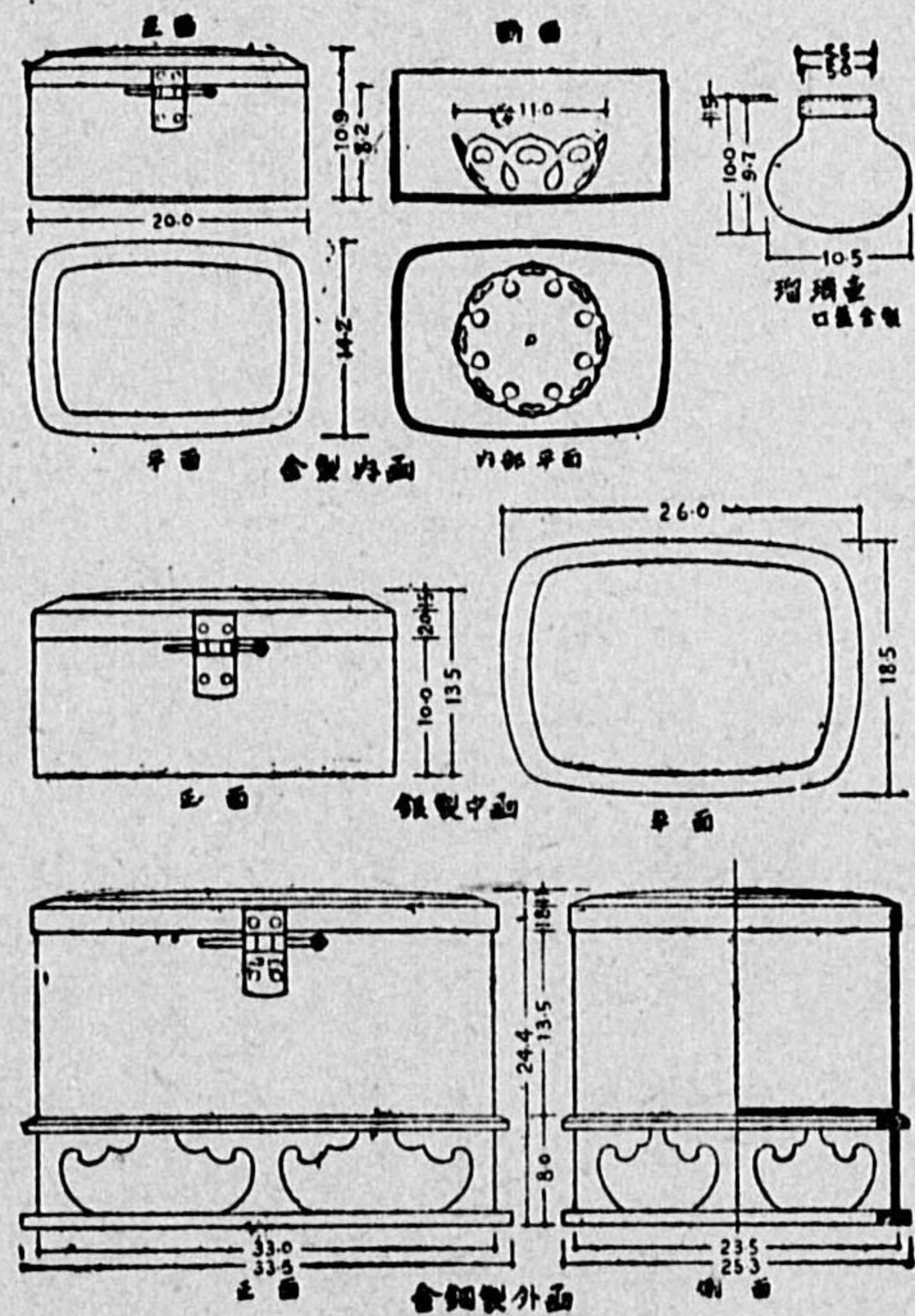
挿圖八 美濃山田廢寺(上・右)、攝津三島廢寺塔(下)舍利容器安置狀態圖

つあつて、一はその心礎を床面に置いた場合、他は深く丈餘の地中に埋置し、従つて心柱も掘立とされる場合である。この心柱掘立の實例には法隆寺塔や最近發掘によつて確められた滋賀崇福寺塔等があり、記録の上では飛鳥寺塔、法觀寺創建塔、山田寺塔等がある。そしてこの方法では舍利は目を奪ふばかりの莊嚴を以て丁重な容器の中に收められてゐた。

今日までの舍利容器の發見例には攝津の三島廢寺塔、美濃の山田寺塔、大和法隆寺塔等のそれがある。法隆寺塔のそれは未だ公表されてゐないが、三島廢寺塔のそれは外を大理石の石櫃（一邊六寸二分、他邊四寸五分、高五寸二分三分、蓋高一寸六分）とし、中に銅鉢（一邊六寸二分、他邊四寸五分、高五寸二分三分、蓋高一寸六分）を順次入れ子としたもので、金盒中には舍利二・三粒があつたと云ふ。美濃山田寺のものは今外函の沙張合子（高四寸三分、徑三寸四分五厘）しか残されて

ゐないが、内に銀、金の容器があつたであらうことは容易に想像される。しかし何といつても現在までに發見せられた舍利容器中の歴卷は、昭和十五年滋賀の崇福寺塔址から出土したものであらう。（圖版二九）崇福寺は天智天皇七年勅願によつて建造せられた寺院であるが、塔址は約三尺の基壇上にあり、全礎石を完存するが、心礎のみは見られなかつた。ところが偶然その心礎は地下四尺にある事が判明し、且その心礎の南側面に中央に底巾七寸、高さ六寸の半圓形の横孔が穿たれ、その孔には同じく半圓形の石蓋がはまつてゐた。この心礎の横腹に舍利穴を穿つた例は山城の高麗寺塔（圖版三〇）に於けると同様珍しい例であるが、石蓋を取り外すと横孔奥行約九寸あり、その内壁には朱下地に金箔を置き、その中に次の舍利容器が莊嚴具と共に見出されたのである。即ち舍利容器は金銅製脚付外函・銀製中函・金製内函よりなり、内に舍利三粒を収めた金製口蓋付の瑠璃壺を入れてゐた。舍利は徑五厘以下の不整形の水晶玉であつた。この外函には更に木箱があつたらしく腐朽した木片が舍利孔内にあり、金銅の外函と銀の中函との間には白色の香泥を詰めこの中に紫水晶二箇と、南京玉十四箇が混じてゐた。そして外函の下には銀錢十二枚、徑二寸三分の金銅唐草文貼

付鐵製圓鏡一面、長徑七分餘、短徑六分の青銅鈴二個、刺玉三個が置かれてゐた。銀錢は徑一寸内外、厚一分弱、重さ二匁内外のもの十二枚、但し一枚は大型で徑一



挿圖九 崇福寺塔舍利容器實測圖（日名子元雄氏圖）

寸三分、厚一分強、重さ九匁強でこの大型のもの以外には中央に小孔あり、且つ不整形の小片が附著し田字形の刻陰あるもの二枚があつた。何といふ莊嚴の華麗さであらうか。この舍利容器の莊嚴さは上代の塔の尊崇のきびし

さを思はせるものがあらう。

心柱に置くのは柱にやはり穴を穿つて入れるのであるが、この位置は初層の場合も二層以上の場合もあつた。四天王寺の創建塔はこの例である。『四天王寺御手印縁起』三代實

録』貞觀三年八月十七日條に國內諸寺の塔に佛頂尊勝陀羅尼を置かした事が見えてゐるが、その安置方法を示して「若無牢固之。易損弊。須下繫心柱深藏其中」と令達せしめてゐるのはそれが陀羅尼經であるだけに當時の舍利安置法を示すかの如くである。

相輪中に入れるのは寶珠に入れるのであるが、かの當麻寺の西塔はそれであつた。記録の上では元興寺塔もこの例とされる様である。

「五」の方法は例へば興福寺五重塔の天平創建の場合等に見るもので、別に舍利容器を作つて適當な層に置いたものである。興福寺塔では水晶塔に入れて二層以上の各重に置いたとあるが、これは丁重な場合であらう。

「二」の方法は飛鳥・奈良時代に限つてゐたが「三」「四」の方法は近世の塔まで行はれてゐた。

大和の古塔

總 說

さて以上に見た如く大和は實に本邦造塔初顯の地であり、殊に伽藍佛教の開花地であつたので、正に多層塔の叢淵であつた。いま大和に於て飛鳥・奈良時代の寺院址とみるべきもの二百を下らないから、當時に於けるこの地の景觀は塔影見ざる地なくそれはとりよろふ青垣山の翠に映えてこの上もない美しさを呈した事であらう。殊に佛教都市とも云はるべき平城京の街衢は、林立する塔影の中に輝やかな立體美を擅にした事と思はれる。即ち人あつて奈良朝の末、若草山に登つて平城京を俯瞰したとすれば、目交ひには東大寺の七重塔二基が三十三丈餘と云ふ高さを以て若草山と高さを競ひ、その左手に興福寺・元興寺には各々一基の五重塔が、新薬師寺には二基の恐らく五重塔が聳え、その向ふの大宅寺には恐らく五重塔の一基を見、

遠く大安寺には七重塔の二基を、薬師寺にはあの三重塔二基の奇構を、平城宮をこえてその向ふには西大寺の塔が二つ、平城宮の手前には法華寺の三重塔二基が、高さを競ひ丹朱あざやかに相輪の金色燦然たる壯觀を見たであらう。廣袤一里餘のこの地域に十餘基の高塔を据ゑ置いた景觀には、小野老が「咲く花のにはふが如く」と歌つたこの都の讚歌さへも色あせた形容でしかない。私は近世までの大和の造塔を四百と推算してゐるが、正確に調査しても恐らくこの推定は過少に過ぎる事はあつても決して過大に過ぎることはないであらう。

明治に入つても卅基近い塔の所在があつたが、かの廢佛毀釋の嵐に逢ひ、また直接手をかけられずとも管理者を失つて立ち腐れなどして、いまは次の十三基の國寶塔と二基の非國寶塔とを存してゐる。次に年代順に擧げてみよう。(*印は非國寶塔)

法隆寺五重塔	生駒郡法隆寺村	和銅以前
法輪寺五重塔	生駒郡富郷村	白鳳時代
法起寺五重塔	生駒郡富郷村	白鳳時代
薬師寺三重塔	奈良市西京町	奈良時代

當麻寺 三重塔(東塔)	北葛城郡當麻村	奈良時代
當麻寺 三重塔(西塔)	北葛城郡當麻村	奈良時代
室生寺 五重塔	宇陀郡室生村	奈良時代
興福寺 三重塔	奈良市登大路町	鎌倉時代
百濟寺 三重塔	北葛城郡百濟村	鎌倉時代
靈山寺 三重塔	生駒郡富雄村	鎌倉時代
興福寺 五重塔	奈良市登大路町	室町時代
南法華寺 三重塔	高市郡高取町	室町時代
*安樂寺 三重塔	南葛城郡葛村	室町時代
談山神社 十三重塔	磯城郡多武峯村	室町時代
*松尾寺 三重塔	生駒郡矢田村	明治時代

いま全國のこの種の國寶塔は卷末に附録として表示せる如く三重塔四十五基、五重塔一九基、十三重塔一基の計六十五基であるが、大和の有する十三基といふ數は地域的にみると全國の最多である。即ちこれにつゞくものは京都府の九基、長野、

滋賀、岡山各縣の五基、廣島縣の四基であるのを見れば如何に大和の十三基が多數であるかを了解出來よう。このうち滋賀縣中の園城寺の三重塔はもと大和吉野の比叡寺にあつたものである。依つて塔の原所在によつて數ふればこの地域の塔數は更に一基を加へ得るであらう。しかしこの十三基の國寶塔はその數に於て多數であると云ふばかりでなく、その質に於てまた本邦上代文化史上の精華である事を忘れてはならない。即ちいまわが國で平安以前の塔は實に大和にしか存せず、大和を除いて最古の塔は京都醍醐寺の天曆五年竣成せる五重塔であるが、大和の塔ではこれ以前のもは七基もあり、他に本邦唯一の遺構である十三重塔を存してゐる。そして上は奈良時代以前の塔から、藤原時代塔・江戸時代塔を缺除せる外は近世までの各時代の代表的塔婆を存するのである。従つて以下に述べる大和の古塔の巡歴は、實に日本塔婆遺構史を現實に見聞することに外ならない。

海龍王寺 五重小塔	奈良時代
極樂院 五重小塔	奈良時代

の二基の小塔があり、その構架は全く一般建築に等しいので、上代古塔の形相を窺ふべきものとして述べて置かう。

しかしこれらの現存古塔は嘗て造立せられた塔婆の數より見ればその一割にも當らぬ數であるから、これのみを以てしては上代古塔の多様性を悉知するわけにはいかない。そこには廢址の上に追懷することによつて雄姿、奇構を偲ばねばならぬものもある。よつてこれらについては後章に於てその遺址を訪れることによつて在りし日の風采を追憶することとしたい。

古塔巡歴

法隆寺五重塔

方形の廻廊、その中に護持された金堂と五重塔、この塔の美しさはその環境の正しさに負ふところが大である。法隆寺伽藍の尊さは、その由緒の正しさや年代の古さもさることながら、かくの如く伽藍全體が保持されてゐる例は他に見る事を得ない點にある。従つてこゝに於てのみ塔の正しい在り方を見得るのである。衰退の世代を経て塔一つ杜かげにとり残された風景も一きはものなつかしいものではあるが、それは塔本來の在り方の尊さを示すものではなく、單に廢址の美しさに過ぎぬ。本然的な在り方の美しさと嚴しさとをまづわれわれはこの塔に於て見なければならぬ。(圖版一)

本塔の造立された精しい年代は詳かでない。法隆寺は金堂薬師光背銘に、

池邊大宮治天下天皇大御身勞賜時、歲次丙午年、召於大王天皇與太子、而誓願賜、我大御病太平欲坐故、將造寺藥師像作仕奉詔、然當時崩賜造不堪者、小治田大宮治天下大王天皇及東宮聖王、大命受賜、而歲次丁卯年仕奉

とあり、天平十九年に勘録された『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』にも

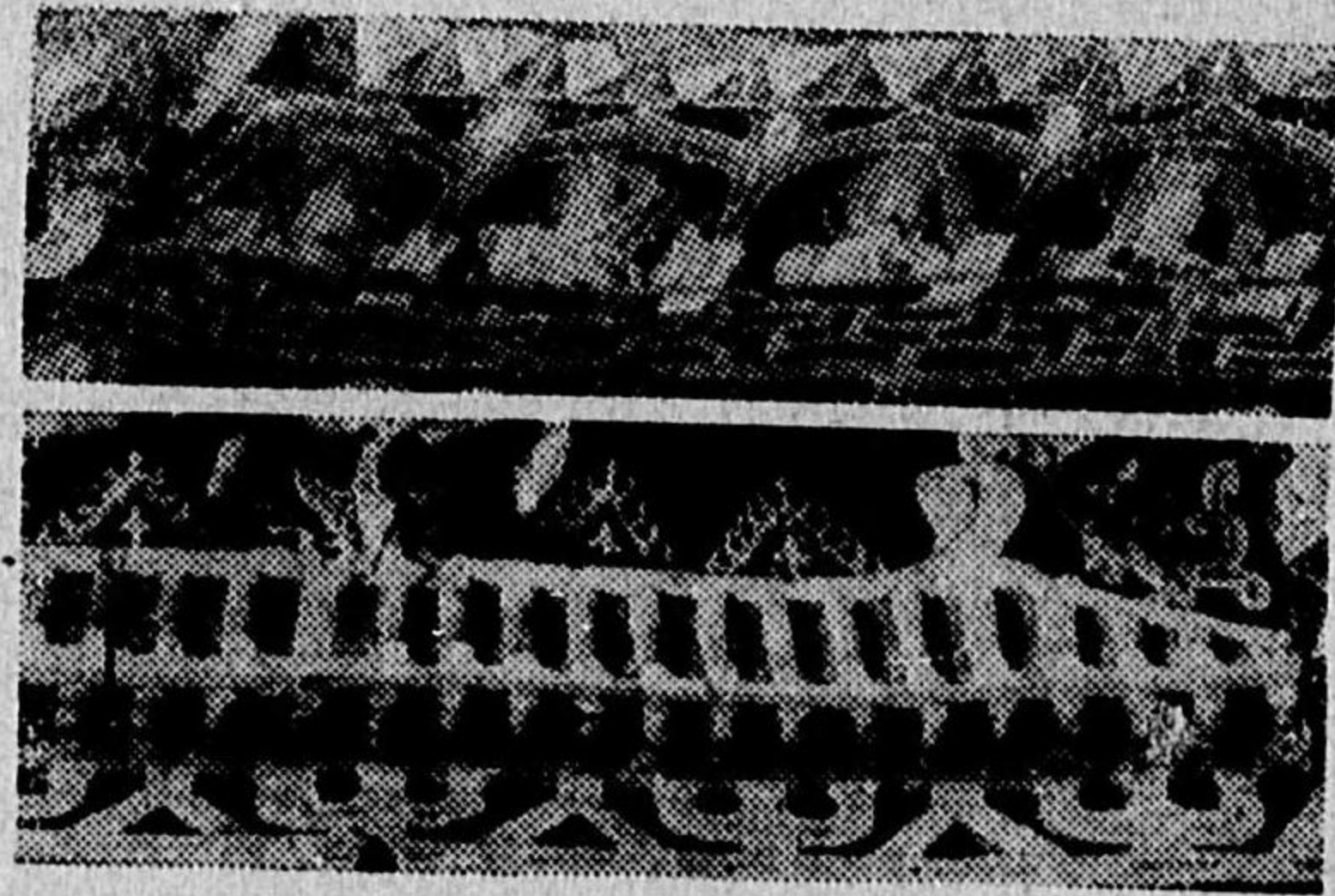
奉爲池邊大宮御宇天皇并在坐御世天皇、歲次丁卯、小治田大宮御宇天皇并東宮上宮聖徳法王、法隆學問寺（中略）敬造仕奉

とあつて推古天皇十五年、用明天皇の御爲めに推古天皇と聖徳太子とによつて創建せられたものではあるが、『日本書紀』天智天皇九年條に

夏四月癸卯朔壬申夜半之後、災法隆寺、一屋無餘、大雨雷震

とあり、恐らく雷火によつて烏有に歸したかに見える。しかるに明治中葉この國に遺物の考古學的研究が始められ、飛鳥文化は六朝文化を受容したものであり、白鳳・奈良の文化は唐の文化關係にあつた事が考究せられ、この寺の建築の様式が六朝

系のものであることが明らかにされるや、それは天智朝以前のもの即ち飛鳥時代のものであるべき事が立論せられるに至つた。



挿圖一〇 大同石窟第九洞の浮彫に見ゆる卍字崩し勾欄(上)と人字形の蛙股(下)

即ち、雲斗栱、柱のエンタシス、卍崩しの勾欄組子、人字形の蛙股（又割束とも云ふ）等の使用が六朝建築に見るところと同じで、その用尺が當時の常尺である高麗尺 その一尺は現尺の略二尺二寸に當る。奈良時代の尺は略九寸八分前後 に一致すると云ふにある。

従つてこれは書紀の記文と抵觸せざるを得ないので、茲に『日本書紀』を否定せんとする説が樹てられた。即ちこれ關野博士等による非再建論であるが、これに對して『日本書紀』をあ

くまで信すべきとなす説——即ち現法隆寺は

天智朝以後の再建となす喜田博士等の再建論——との間に世紀の論争を惹起した。従つて書紀を否定すれば推古朝創建以來のものとなり、これを肯定すれば天智九年

以後のものとならう。ところが用明天皇の御爲めに推古天皇と聖德太子とによつて創建せられたと云ふこの寺の金堂には、その由の記された本尊薬師は内陣東脇に客佛的に置かれてゐ、いまの本尊は釋迦像でその光背には

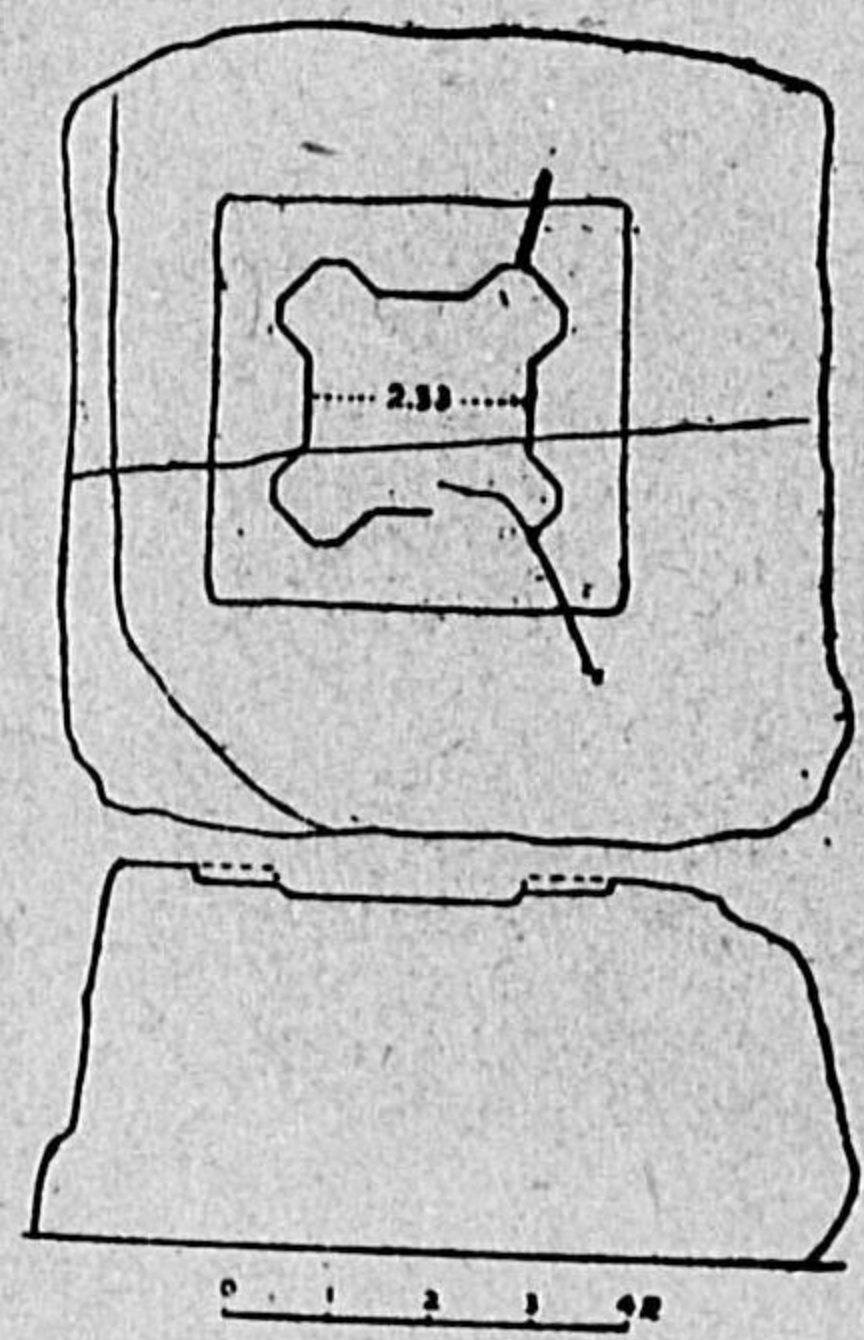
法興元卅一年歲次辛巳十二月、鬼前太后崩、明年正月廿二日、上宮法皇枕病、弗念于食、王后仍以勞疾、並著於床時王后王子等及與諸臣、深懷愁毒、共相發願、仰依三寶、當造釋像、尺寸王身、蒙此願力、轉病延壽、安住世間、若是定業、以背世者、往登淨土、早昇妙果、二月廿一日癸酉、王后即世、翌日法皇登遐、癸未年三月中如願敬造釋迦尊像并侍及莊嚴具竟、乘斯微福、信道知識、現在安隱、出生入死、隨奉三主、紹隆三寶、遂共彼岸、普遍六道、法界含識、得脫苦緣、同趣菩提、使司馬鞍首止利佛師造、

と云ふ刻銘がある。即ちこれはこの像が聖德太子の御爲に推古天皇卅一年王后王子等諸臣と共に敬造せられたことを示してゐる。そして現存伽藍の様式はあくまでも飛鳥式であることを確信せられた足立博士は、これによつて法隆寺は二寺あつて一つは推古天皇十五年に推古天皇と聖德太子とが用明天皇の御爲に建て給ひしもの、他は聖德太子の御爲に姫や王子達が諸臣と共に推古天皇末年に建てられたもので、

かの天智朝に焼けたのは用明天皇の御爲に推古天皇十五年に建て給うた伽藍であり、現在の寺は推古天皇の末年聖德太子の御爲に敬造せられたものとなす法隆寺二寺説、

挿圖一一 法隆寺若草伽藍塔心礎

この心礎は明治廿年頃原地を離れ、後大阪住吉の某氏邸に運ばれたが、昭和十四年また原地に復することを得た。上面の四角な影込みは某氏邸に於て石塔の臺石とされた際の加工で當初の施工は八角柱座の彫り回めとこれに附せられた四隅の添木の彫り回めとである。上面には焼痕を留める。またその焼失時の損傷であらうか、中央に底まで通つた龜裂がある。



又の名に新非再建論を提唱せられた。即ち、推古天皇十五年に創建され天智九年に焼けた法隆寺とは、現存伽藍の東東普門院裏の寺址——所謂若草伽藍——がこれであると云ふのである。従つてこれによれば現存伽藍は飛鳥時代の末に始められたものとなるが、未だこの寺の建築年代に關する學界の向ふところは定つてゐない。

しかし以上この寺の堂塔に關する諸論の何れに左祖しようとも、この寺の形式が六朝系のものであると云ふ點には建築史家の見解は一致してゐる。従つてこゝにこの塔婆を飛鳥時代の塔婆の一形式を傳へるものとして鑑賞することにはさして問題はない

ので、ここでは造立年代の決定は暫く保留して置きたい。しかし流記帳に

挿圖一二 法隆寺五重塔保元伏鉢

合塔本肆面具壺

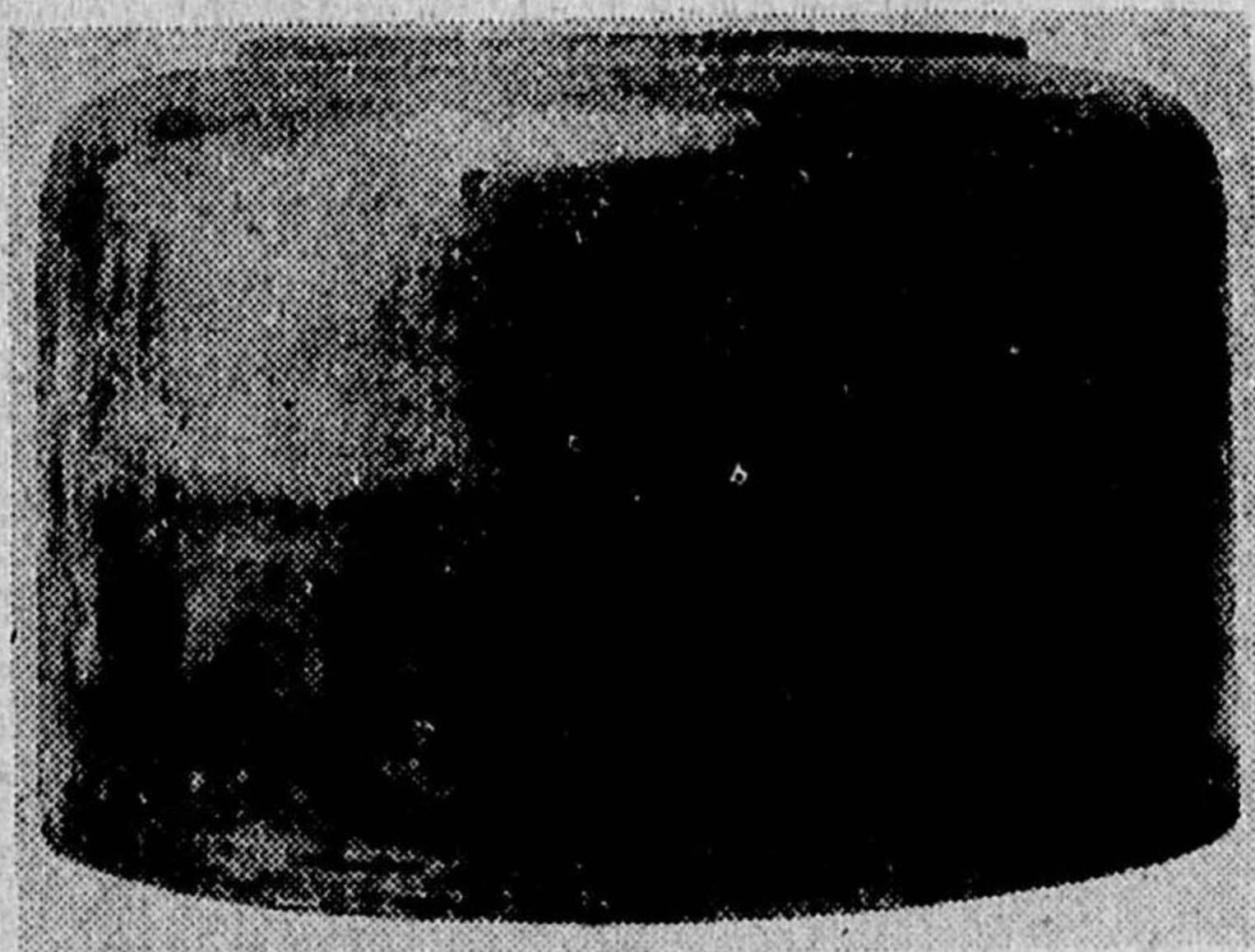
一具涅槃像。土。一具彌勒佛像。土。
一具維摩詰像。土。一具分舍利佛。土。

右和銅四年歲次辛亥。寺造者。

とあり、和銅四年に内部塑像の完成を記してゐるのは塔の莊嚴の完了を示すものとして、この造立年代の推定に注意を惹く事柄である。

中世に於ける沿革を記録上に求むると、保元三年の頃修理が施されてゐるが法隆寺、いま御物と別當記なつてゐる元祿九年に取り代へた舊伏鉢に「保元三年十月九日」の刻銘があるから、挿圖一二少くともこの時伏鉢は改鑄されたと思はれる。

鎌倉時代に入つては嘉禎三年十二月塔下石壇を初めて造り、塔内塑像のうち北方涅槃像並びに脇侍等を修理彩色したとあるが同別、當記、石壇の新造とはいまの二重基



壇の中花崗岩の下壇がこの時添加された事を示すものであらうか。塔内の塑像は延應元年にも修補彩色を行つてゐる。同別、當記 建長四年六月十八日には三重目に落雷して心柱を焼き、又弘長の頃にも落雷の事があつたと云ふ。古今一陽集 弘安六年には金堂と共に修理を受けて丹塗が施され同別、當記 降つて明應四年六月には修葺があつた。元祿九年の心柱題書・相輪撥針書 慶長には豊臣秀頼や徳川家康の修理がこの寺に及んだが古今一、陽集、それに於てこの塔がどの様に扱はれたかは明かでなく、同九年には須彌山の一部が崩落してその修補を行つてゐる。須彌山上、發見棟札 しかし元祿九年五月から十一月に及んだ徳川五代將軍綱吉の母公たる桂昌院の修理は建立以來最も根本的な修理であつた。『古今一陽集』はその竣成の状を「美麗如新造」と記してゐる。かの保元改鑄の伏鉢はこの時取下されたのである。相輪の他の部分にも改鑄されたところがあつたらしく、現に擦の一部には

鋳屋

宇左衛門

大阪住人森

久左衛門

同

元祿九

作之

子ノ九月吉日

の刻銘を有するものもある。しかるにその後寶永の大地震によつて伏鉢露盤等の破損を致したので、寛延三年六月修理を加へたが、心柱三重目打付の修理記本札結果思はしくなかつたらしく、寛政九年にはまた修理を加へてゐる。即ち伏鉢に次の刻銘がある。

寛政九丁巳年

五月二十一日修理

功畢

于時修理奉行

西南院式部卿法橋

權律師覺宣

鑄工

龍田住安兵衛

同 彌三郎

又壁の落書によれば、天保四年九月には「五重目かみからしもまでやねかへ致し候云々」とある。安政元年には夏冬二度の地震に涅槃像を破損したが、これは文久二年に至つて修理を遂げた。『古今一陽集』

塔は二重の壇上に立ち、初層には金堂と同じく裳階がある。二重の基壇は、上壇は凝灰岩で束石なく、不規則な積み方ではあるが、下壇は花崗岩の正然たる壇上積である。これは別當記に云ふ鎌倉の添加であらう。裳階は角柱を立て、挿肘木を以て軒桁を支へて板屋根を葺いたもので、軸部中央間を板扉とする他の兩脇間は内法長押、腰長押を以て押へ、長押の上下を板壁、中を櫺窓としてゐる。しかしこの構造形式は塔の形式と相違してゐるので、塔内塑像の造成後その保護の爲に補加されたものと考へられてゐるが、その時期については非再建論者は塑像造成の和銅となし、再建論者は天平十九年の流記帳にこの裳階に關する記載のないことを以て天平

十九年以後とする。

さて仰いで塔の全高を見ると各層縮減の度が大きく、又高さも低く、その上軒の出が極めて大きいので外観上頗る安定にして現存五重塔中最も美しい輪廓を示してゐる。

軒は各層角極一軒、斗拱は栱や肘木を一體として自由曲線で成形した所謂雲斗雲肘木の奇構であるが、その意匠は甚だ自由で、例へば五層目を方二間にして肘木間の窮迫を避けたり、二層目に於ける二つの肘木の先端を連結して一つの斗を共通せしめるなど、至極大膽な手法を試みてゐる。斗拱の細部は大體金堂と同様であるが、また異るところもある。即ち金堂の雲形肘木には渦文状の線が刻つてあるが、塔にはそれが無い。

各層の縮減の度は軒では、極三本づつ縮まつてゐるが、これを柱間で云ふと上層は下層の半分と云ふ驚くべき縮減度であり、こゝにもこの塔の美しさの秘密の一つがある。

軸部は中央間に板扉を開き外兩脇間は壁としてゐるが、柱にはエンタシスがある。

しかしこれは金堂のものほど著しくない。又各層の勾欄が金堂や中門などと異り全體腰組を持たぬのは後に略されたものであり、三經院の修理に當つて小屋組からその古材を發見したその軒に彫刻を以て裝飾された支柱を立てゝゐるのは元祿の徳川桂昌院の修理に添加したものである。

『七大寺巡禮私記』『七大寺日記』や『古今日録抄』によれば、當初各層四隅の降棟の端には金銅の寶珠が飾られ、また軒の四隅には二層以上に寶鐸、初層には壺篋が吊されてゐたと云ふが、これは金色の相輪や丹青を塗裝された軸部と相俟つて稀有の偉觀を呈してゐたことであらう。又相輪には八方に防雷のため長五尺ばかりの鎌をつけてゐたとある。これは雷を荒ぶる神と考へた當時の人達の、それが寄りつけない様にとの工夫であるが、今もその名残りであらう、相輪の中途に一丁の鎌が掛つてゐる。鎌にはその乃の部分に「出雲椽藤原定國」の銘がある。定國は東院夢殿の扉締金具に「辛文化八年未五月吉日」の紀年を残してゐるから、文化頃の人と知られる。従つてこの鎌も約百三十年程前のものである。

相輪には擦部に前に述べた如く元祿十年の改鑄銘があり、伏鉢には寛政九年の改

鑄銘があつて、後補を交へた部分もあるが、その總長が全高の三分の一を占める比例は完好である。

さて塔の總高はいま百五尺許りであるが、資財帳には十六丈とあるので、この塔の現高は元祿の修理に於て低められた結果であると云ふ説がある。しかし元祿の解体修理は勾欄腰組が略されたり、心柱の一部を取替へたりしてゐるので、塔高にも多少の變化はあつたかもしれないが、それが五丈餘の變更を來したものは考へられない。従つて資財帳の記載は何かの誤りであらうと思はれるが、この塔は本年から向ふ五ヶ年の日子を以て國寶保存法による待望の解体修理を施される事となつてゐるので、或ひはこの點についても明らかにし得るところがあらう。

各層の四面には木額様のものを掲げてゐるがこれは避雷符である。避雷符は縦八寸、横三寸程の木板で、上を花頭型に線型をつけ表面に線彫で花型の周縁を現し、その内側に聯珠紋を配した輪廓をつけ、それに各面その方位に合せて四天王と光明雷王との名を梵字の籠彫としてゐるが、その裏面には銘記があつて、弘安六年六月かの西大寺の叡尊が自署して寄進したものと知られる。叡尊は蒙古襲來に當つて教

界を率ゐて國難に當つた西大寺の名僧興正菩薩の事である。この塔にこの高僧の避雷符の打たれてゐることは誠にふさはしい。

内部には四天柱間に壇を設け心柱を圍んで壇上には塑土を以て岩窟を造成し、四面に夫々塑造の群像を配してゐる。即ち東面は文殊菩薩が病中の維摩居士を訪れ生老病死の眞諦について問答を重ねたと云ふ維摩經所説の文殊、維摩不二法門問答の狀景、西面は釋迦涅槃の後、八ヶ國の代表者達が釋迦の遺骨を得んとして争つた末、香姓婆羅門の調停で佛舍利を八分して國々に頒つたと云ふ大般若涅槃經所説の分舍利の狀景、南面は彌勒佛の淨土、北面は釋迦の涅槃を現したものであるが、個々の像の寫實的な表現は妙味掬すべきものがある。これ資財帳に「和銅四年歲次辛亥寺造者」と記されてゐるものに當り、年紀の明らかな塑像として最古の作例である。外陣は天井を組入天井とし、各格間には胡粉地に極彩色で蓮花文を描いてゐる。目錄抄には尙塔内四周の壁には菩薩形像の繪を描いてゐたと云ふが、今日では見る事は出来ない。

床は松香石の石敷となつてゐる。礎石は立派な圓形柱座の線出しのあるもので、且

挾間石まで一緒に刻り出された誠に整備したものである。金堂のは自然石であるが、この礎石の相違、斗拱の相違、柱のエンタシスの相違は金堂とこの塔との造営年代にある距りのあることを示すものとして注意される。

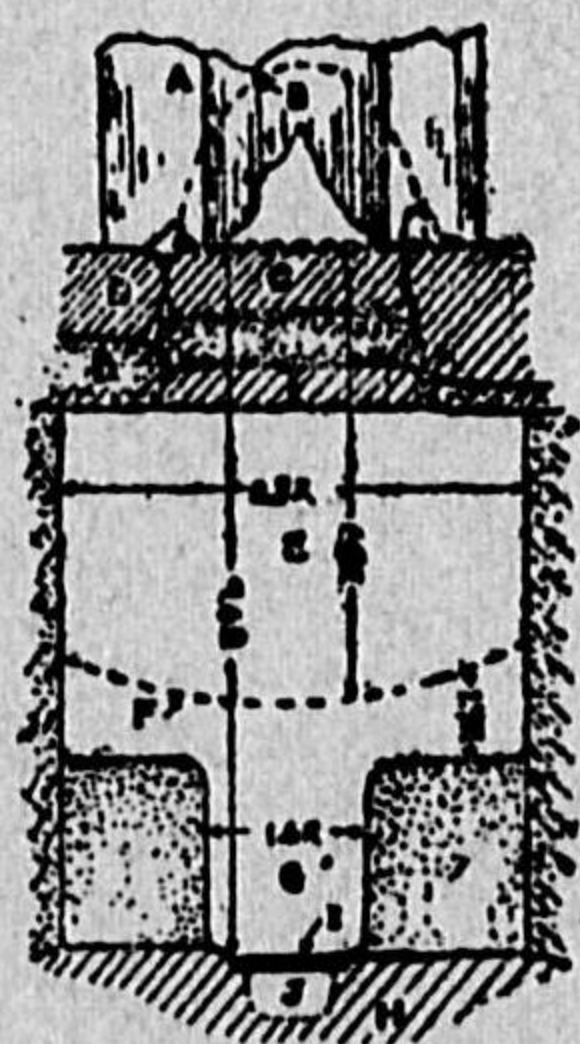
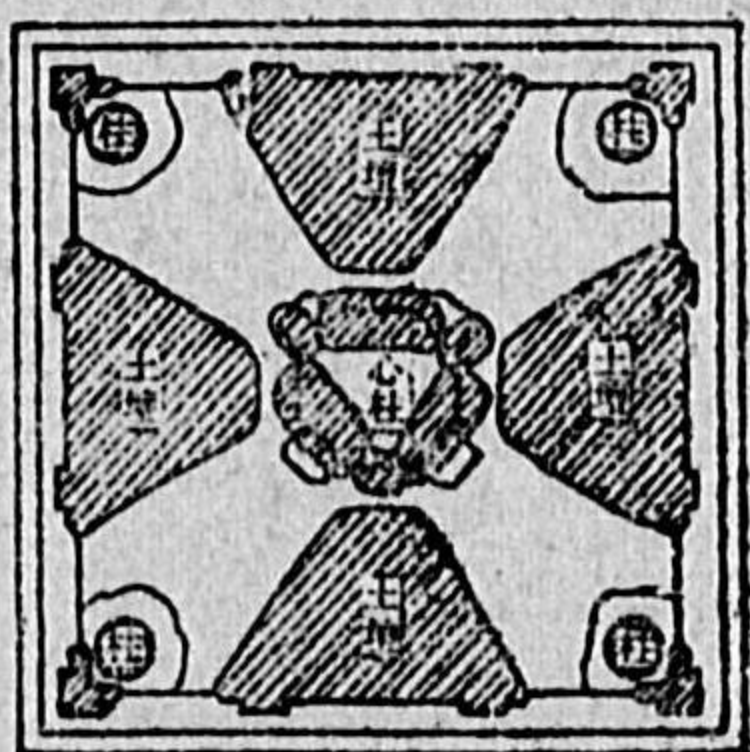
さて心礎は床面下約一丈許りのところにあり、従つて心柱は約一丈許り地中に掘立とされて

ゐたため夙に腐朽し、

その部分が

空洞になつ

てゐる。大



挿圖一三 法隆寺五重塔下
空洞縦斷圖想定圖
(據岸熊吉氏實測)

A心柱。Bの點線は柱底の腐朽。
C Dはいま心柱を支へる石(後補)。
Eは空洞。Fの點線以下は堆積の土。
Gはこれを掘つた穴。Hは心礎。
Iは舍利穴蓋の銅板。Jは舍利安置穴。

正十五年一月この空洞を發見した岸熊吉氏は、つゞいて心礎の中央に凹穴があつて、その中に丁重な容器に收められた舍利が安置されてゐることを發見した。しかしその詳細はまだ公表されてゐないが、七月廿六日付の東京朝日新聞夕刊によれば、舍利孔は徑八寸・深さ四寸・これに徑九寸・厚一寸五分の銅の蓋があつて、その中に

直徑六七寸の銅壺と怪獸葡萄鏡とがあり、銅壺の中に瑠璃・瑪瑙等の珠玉と純銀の容器、更に銀器の中には金の容器が、金の容器の中には瑠璃の小壺があつて、舍利はその中にあつたと云ふが、この舍利容器の制は法王帝説に見える山田寺塔に於ける安置法と酷似してゐるのは興味がある。

これを要するに本塔は本邦最古にして最善なる塔婆として貴重なばかりでなく、その建築技法は既に大陸に於てもみることを得ぬ六朝の木造建築の形式を傳へる遺構として東亞的な貴重さを持つてゐる。私はこの塔を仰ぐ度にこの國の歴史の悠久さを思はずにはゐられない。世界に文化の古さでは勿論これ以上のものがあらう。しかしその文化を抱いて今に生々たる國民が日本の他にあるであらうか。われわれは悠遠なる國體の傳統と光輝とを思ふべきである。

参考文献

*再建非再建論争

足立

康

法隆寺再建非再建論争史

*建築様式

龍吟社

刊

昭和十六年十月

塚本 靖	法隆寺建築裝飾論	建築雜誌第九十四號	明治廿七年六月
伊東 忠太	法隆寺建築論	東京帝國大學紀要第二冊	明治卅一年三月
濱田 耕作	法隆寺 (雄山閣發行「考古學講座」古代建築論 (昭和五年八月) を補訂せるもの) 六朝の建築様式について	創元社刊「創元選書」 内藤博士遺稿記念 支那學論叢	昭和十五年十一月 大正十五年五月
伊東 忠太	法隆寺五重塔に關する新發見史學雜誌	第三十七編第六號	大正十五年六月
關野 貞	法隆寺五重塔 アルスオホシ大講堂一 日本建築史中	アルス社刊	昭和五年九月
喜田 貞吉	法隆寺五重塔に關する幾多の疑問	歴史地理第六十卷第七號	昭和八年七月
足立 康	法隆寺五重塔の高さに就いて	夢殿第十冊「塔婆の研究」	昭和八年十二月
岸 熊吉	法隆寺堂塔に關する古今目録抄の一記事	東洋美術第廿四號	昭和十二年五月
田中 重久	法隆寺五重塔の實狀と一部復原的考察	夢殿第十冊「塔婆の研究」	昭和八年十二月
	法隆寺創立の研究	考古學第十卷第九號	昭和十四年九月
	法隆寺再建の研究	同	同

法輪寺三重塔

法隆寺の東院西側の道を出て部落を抜け右にとつて暫く行くと清閑な松木立に囲まれた塔影が見える。それが法輪寺の塔である。寺は古くから清泉を以て聞え、御井寺(三井寺)とも呼ばれてゐた。御井は最近寺の西方三十間ほどのところに發見せられた埴積の古井がそれであらうと云はれてゐる。

法輪寺の創立については詳かでないが、卷子本『聖德太子傳私記』(下卷)に抄録されてゐる寺家縁起は次の如く傳へてゐる。

右寺奉爲小治田宮御宇天皇御代、歲次壬午、上宮太子起居不安、于時太子願平復、即令男山背大兄王并由義王等始立此寺也、所以高橋朝臣預寺事者、膳三穗娘爲太子妃矣、太子薨後以妃爲檀起、今斯高橋朝臣等、三穗娘之苗裔也、維于延長六年歲次戊子、合參
佰貳拾歲、云々

これによれば、聖徳太子不豫となり給ふに及んで山背大兄王等に命じて起立せしめ給うたもので、太子薨後は妃膳三禪姫檀越となり、代々その苗裔たる高橋氏によつて護持されて來たと云ふのであるが、これには系譜上の矛盾もあつてそのまゝ信じ難いものがある。

然るに天智天皇九年法隆寺の罹災について『太子傳補闕記』に

庚午年四月卅日夜半、有災斑鳩寺

斑鳩寺被災之後、衆人不得定寺地、故百濟入師率衆人、令造葛野蜂岡寺、令造川内高井寺、百濟聞師圓明師下水君雜物等三人、合造三井寺

と見えてゐる。従つてこれによればこの寺は百濟聞師等によつて天智九年以後に開基せられたこととなり、この塔の造立も天智朝以後のものとならう。

創建の伽藍は法隆寺式の配置をもつてゐたが、中世を衰運の中に経過し、正保二年の大風に金堂・講堂を失つて以後は「舊跡名」殊に寺觀を損じてしまつた。しかし塔は幸ひに倒壊は免れたが上層を失ひ元祿頃これを實見した貝原益軒は『和州巡覽記』に「三井法輪寺聖徳太子ノ建立ナリ五重塔三重ハ崩レテ二重殘レリ」と記し残して

ゐる。五重塔と云ふのは三重の誤であるが、二重しか残つてゐなくては建築に暗い益軒が五重と見誤つたのも無理はあるまい。しかしその後寺の再興と共に元文四年に至つてその失はれた三重及び相輪を補つてゐる。今この塔の形相に見える些か鈍重な感じはそれらの修理に形式の統態が損はれた結果であらうか。

塔は一重の石壇上に立ち、斗拱は雲斗雲肘木、軒は一重角椽で、その構造手法は法隆寺塔に酷似してゐる。しかしその細部手法を仔細に見ると法隆寺塔よりかなり流麗なものがあり、その造立の後れたものであらうことを推測せしめる。柱にはエントランスがあり、柱間は各層とも中央間を板扉、兩脇間を壁とする。

二層三層の縁廻りには卍字崩しの勾欄をつけてゐるが、これは明治卅五年一月から同卅六年十二月に互つた保存法による根本修理に於て法隆寺塔に倣つて補加されたもので、三層の柱間が下層と柱割を異にし三間等間となつてゐるのは江戸期の補設が舊規を無視したためである。

初層内部は土間床とし四天柱間に木製素木の須彌壇を置き、塑像の觀音菩薩像、

木彫の釋迦、地藏、大日、四天王等の寄せ集めの諸像を安置してゐる。しかし室町時代の書寫と思はれる『大和國夜麻郷三井寺記』に

東正面 文殊維摩不二法門 南正面 彌勒曼荼羅
寶塔 西正面 釋迦如來茶毗躰 北正面 釋迦涅槃像等 各土佛

と記され、古くは法隆寺塔と同様な塑像群が置かれてゐたと云ふが、詳かでない。天井は組入天井である。

礎石は自然石の上面を平滑にしたもので、心礎は床面に据ゑられてゐる。ところが寺藏の記録によれば、元文四年の修理に於て心礎下に空洞があり、そこから法隆寺塔と相似た莊嚴になれる舍利容器を発見したことを傳へてゐる。即ちそれは寛保元年別當寶祐が藏門本弘をして淨書せしめた由の奥書を有する「三重の寶塔の下より出現ありし佛舍利の記」と題された一記録で

元文巳未の年三重寶塔の大破なるを再興せんとす。時に同年七月十九日寶塔心柱の朽損したる根株を穿ち人夫をあつめ土中一丈ばかり掘けるに方六尺あまりの礎石あり其中心に金の蓋有ひらき見れば靈香塔のうち馥郁たり。くほめる中に黄金の一壺有り、その外を名香をもつて積したたむ。壺の中に銀の四方の箱あり、金鏤をもつてかたく封ぜり、ひらき見るに一顆の瑠璃の玉あり、その中に赤白二粒の佛舍利をおさめたまふ。其外太子御持念の珠數土器等あまた取そろへおさめたまふ。また四方に朱を以て四天の像を造り鎮となせり、これ佛舍利護持のために納めたまふ心なるべし。

と記してゐるのである。しかしこの記を些細に見ると心柱下を掘つて方六尺餘の礎石を見たとき云へば、元文の修理は解體修理であらねばならぬが、當時この塔がかかる修理を受けたとは思はれぬので、このまゝ信ずることは出来ない。田村吉永氏がこれを法隆寺塔のことを記したのであるまいかと考へられたのは傾聽すべき一見解であらう。

これを要するに本塔は後の修補によつて全構の統一を損はれてゐるのは惜しむべきであるが、法隆寺塔に次ぐ本邦の古塔として、又現存する最古の三重塔の遺構として珍重すべき塔婆である。

参考文献

喜田貞吉	法起寺法輪寺塔婆建築年代考	歴史地理第七卷第五號	明治卅八年五月
關野貞	法起寺法輪寺兩三重塔の建築年代を論ず	歴史地理第七卷第七號	明治卅八年七月
田村吉永	法隆寺五重塔下の空洞と法輪寺所蔵の「三重塔より出現の佛舍利記」について	考古學雜誌第廿一卷第七號	昭和六年七月
福山敏男	法輪寺建立年代に關する疑問	夢殿第十二册「法隆寺の諸問題」	昭和九年十二月
田中重久	法隆寺再建の研究	考古學第十卷第九號	昭和十四年九月

法起寺三重塔

法起寺は法輪寺の眞東に當つて五・六町、古くから岡本寺の名がある如く、後に松林の丘阜を負うてゐる。この寺の伽藍は法起寺式と云はれ、丁度法隆寺に於ける塔と金堂との位置を逆にしたものである。従つてこの塔は金堂址の東に立つてゐる。いまの寺域は狭く、樹木の多い境内に塔一つが寺史の古さを示して立つてゐるのはわびしい。

本寺の造營の事情には從來諸多の論があるが、鎌倉時代の中葉法隆寺の學僧顯眞によつたものとされた『太子傳私記』に、この塔には次の露盤銘があつたことを傳へてゐる。傍註は曾博士の考説による。

上宮太子聖德皇壬午年二月廿二日臨崩之時於山代兄王勅御願旨、此山本宮殿宇、即處(傳)爲作寺、乃大倭國田十二町、近江國田卅町、至于戊戌年、福亮僧正、聖德御分、敬造彌(將)

勅像一軀、構立金堂、至于乙酉年惠施僧正、(寫)將竟御願構立堂塔、(實)丙午年三月、露盤營作
従つてこれによれば寺は聖德太子薨後遺命によつて山代兄玉山(岡)本宮の殿宇
をして寺とせられたもので、戊戌即ち舒明天皇十年に至つて福亮僧正太子の御分と
して彌勒像一軀を作り金堂を營んで安置し、乙酉即ち天武天皇十三年惠施僧正寶塔
を構立し、前後二十二年を費して丙午即ち慶雲三年に至つて塔は露盤を上げ得たと
云ふのである。

この前半の草創譚には問題もあるが、堂塔の造立に關する後半の記事は恐らく史
實に基いて記されたものであらう。従つて、露盤銘を信する限りに於てこの塔は
天武天皇十三年から廿二年の歳月を費して成つたものと見なければならぬ。しかし
現塔の相輪は後のものであるから、いまこの銘文を見ることを得ないのは遺憾であ
るが、法隆寺・法輪寺塔の造立年代の明らかでない今日、こゝに造立の明らかな最
古の塔を検出し得る事は建築史上の幸と云はねばならぬ。

『法隆寺別當記』によれば、この露盤銘は永保元年官使を下して書取らしめたと云
ふから、當時著名なものであつたらしいが、天仁二年から廿一年寺務に當つてゐた

經尋律師の任期中には如何なる事情によつたものかこの塔の相輪は下されて法隆寺
の倉に置かれてゐ、その間に九輪の一口が盗まれたことが記されてゐる。そして天
福元年にはその伏鉢を以て法隆寺聖靈院の鐘と中門西の間の金口とを鑄たとあるが、
『法隆寺
雜記』かゝる銘文のある著名な部分が鑄つぶされる筈もないから、恐らくそれは伏
鉢以外の部分にあつたのであらう。

さて塔についてはその後同じ別當記に、九輪を失つて數年を経てゐたものを弘長
二年六月に補加した由が見えてゐるから、少くとも相輪は三回變つて來たわけであ
る。

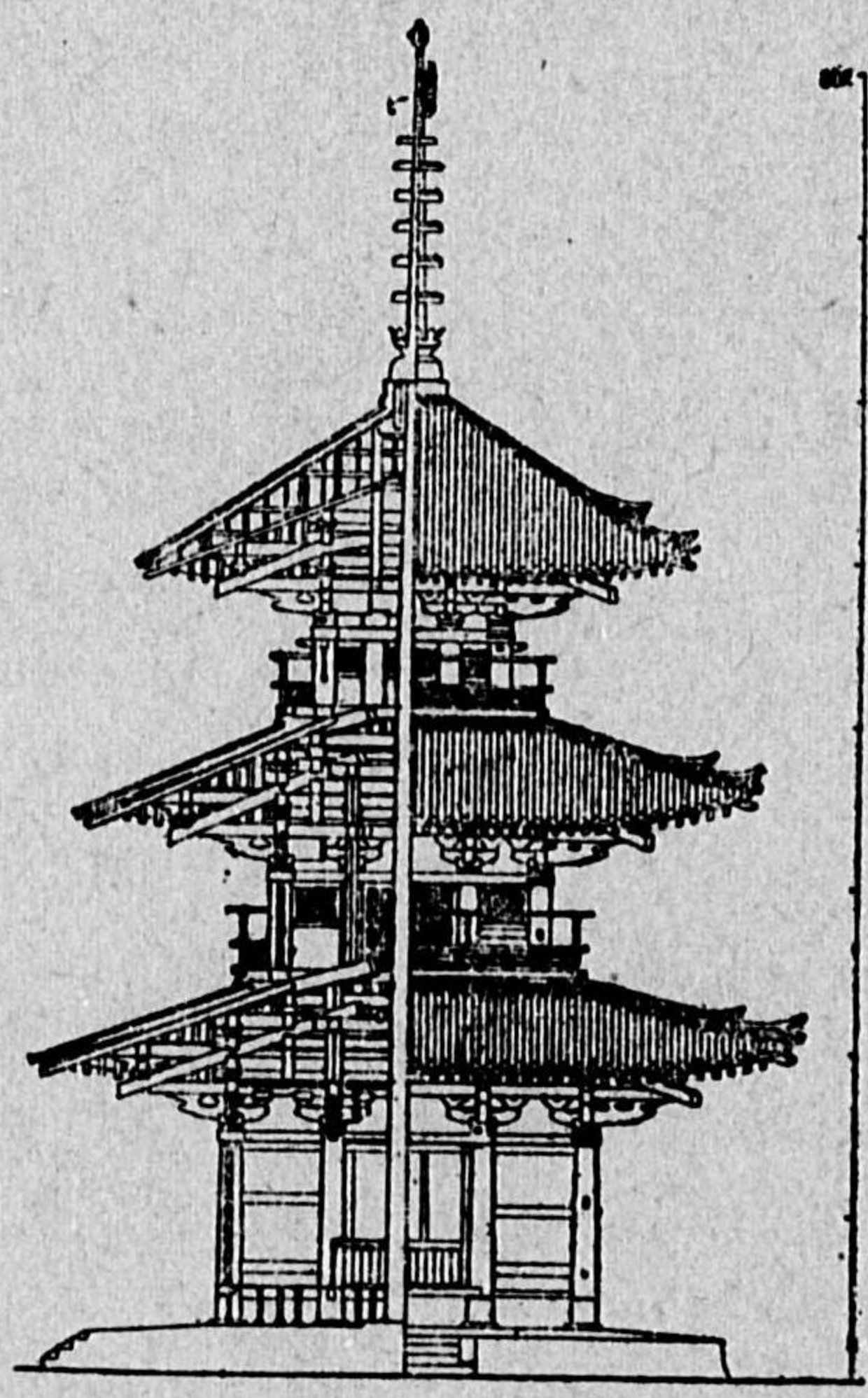
そしてその後の沿革についても十分な記録を見ないが、江戸時代に入つては延寶
年間住僧貞政によつて修理が施され、『律莊僧正實傳』、『貞政和尚行狀記』、又天明年間にも修理があつた
らしい。明治に入つては同卅年二月から卅一年九月に及ぶ保存法による根本修理を
經ていまの明快な塔姿となつた。

塔は一重の壇上に立ち、軒一重、角繁樺、斗拱は雲斗雲肘木と云ふ法隆寺、法輪

寺塔と同一構造手法になれるものであるが、しかしこの塔の手法上前二者と著しく相違する點は、隅斗拱に於て鬼斗を用ひてゐることである。鬼斗とはまた菊斗とも云はれ、斗尻と敷面とが四十五度ねちて造られた隅構造を合理的に處理するための特殊な斗であるが、この斗拱處理の進歩は前二塔に對してこの塔の様式上の位置を規定してゐる。即ちこの塔が露盤銘によつて天武十三年着手慶雲三年落成とすれば前二塔の様式上の年代は本塔以前に求むべきで法隆寺・法輪寺塔の造立年代の考察に有力な目安を與へる。

次に本塔に於て注意される點はその平面寸法が、法隆寺塔と緊密な關係を持つてゐることである。即ちこの塔の初層寸法は法隆寺塔の初層寸法と同寸であり、この塔の二重はかの塔の三重と、三重は五重と同寸となつてゐる。従つて法起寺塔の各層平面は法隆寺塔と一重おきに同寸となるわけで、その柱間割も夫々相等しいが、三重目だけはこれを異にしてゐる。即ちこの塔の三重は柱間三間で法隆寺塔の如く二間となつてゐないことである。これについて關野博士は以上の下二層の一致からみて、三層がかくの如く相異してゐるのは後の改造を受けたからで、當初はやはり

法隆寺塔と等しく二間ではなかつたかと云はれる。アルス建築大講義第二日本建築史(昭和五年九月) しかしその柱間は一致してゐないが、脇間で肘木を連接した手法は法隆寺塔の柱間三間に於ける最上層たる四層目の手法と一致してゐる。後に改造された手法とは見難いので、あ



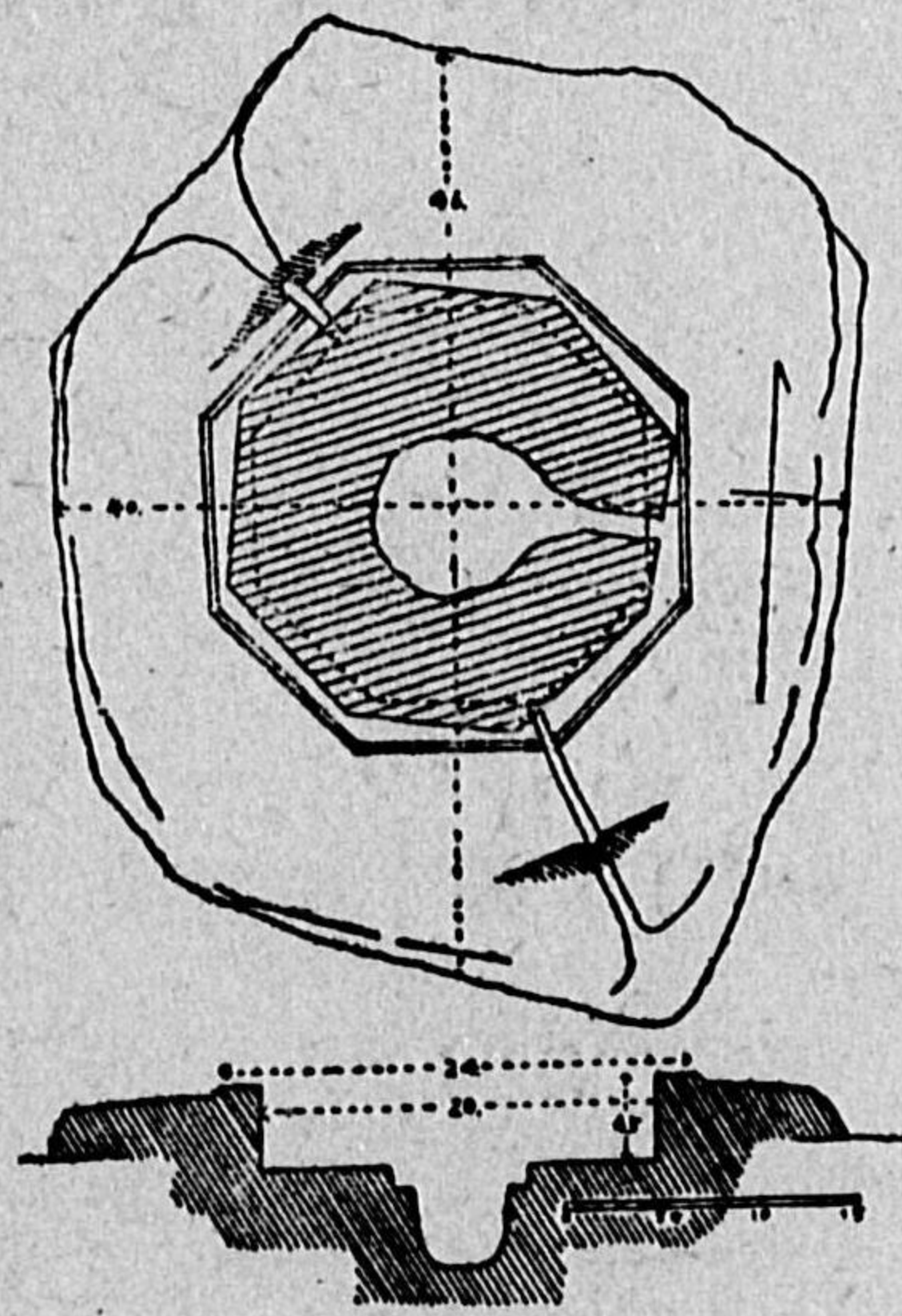
挿圖一四 法起寺三重塔修理前實測圖

ながち博士の如く見る必要はなからう。この場合かの法輪寺塔の江戸時代に補設された三層が柱間割を變へて、各柱上獨立斗拱を組みかゝる自在な手法を用ひてゐないことを想起すべきである。と

もあれ、この塔と法隆寺塔とが平面寸法に於て一重おきに一致してゐると云ふことは兩者の造營尺が同一であつたことを推測せしめ、これに斗拱の扱ひに相應じたものをもつてゐることを合せ考へると兩者の造營年代に著しい距りがなかつたことを

推察せしめる。従つて様式的には法隆寺、法輪寺、法起寺三塔には前述の如き序列があるにしても恐らく相接した年代に造營落成したものであらう。

因みにこの塔の初層平面が法隆寺塔と同寸の一辺長二十一尺餘と云ふ規模は本邦三重塔の遺例中最大の規模である。



挿圖一五 法起寺三重塔心礎
(石田博士測圖) (30)

さて塔の勾欄、扉、屋根、相輪の大部分は後補で、殊に相輪の寶輪は明治修理前には六輪であつたのを、改めて九輪となしたものであるから、(挿圖一四)いまの外観には相當後の變更が加はつてゐる。しかし軒先を見ると裏甲を持たず茅負の上直ちに瓦座を打つてゐるのは古制を傳へるものとしてうれしい。猶この手法は藥師寺東塔に於ても見ることが出来る。

初層内部は土間床、四天柱間には木製須彌壇を設け、天井は組入天井としてゐる。礎石は心礎以外は自然石の上を平滑にしたものであるが、心礎は精巧な加工のある極めて見事なものである。加工は先づ、八角形の座を造り出してその上に心柱座を彫り凹め更にその中に舍利穴蓋をもつ圓形の舍利穴が穿たれてゐるが、いまは舍利容器も石蓋も失はれてゐる。

これを要するに本塔は造立年代の明らかな本邦最古の塔として貴重な存在であるが、また、構衡のとれた塔姿と明晰な風手とは本邦古塔中の屈指である。殊に初層兩端間の大壁にあしらはれた二本の貫の簡潔な意匠は及び難く鮮やかである。

参考文献

- | | | | |
|------|--------------------|---------------|---------|
| 喜田貞吉 | 法起寺法輪寺塔婆建築年代考 | 歴史地理第七卷第五號 | 明治卅八年五月 |
| 關野貞 | 法起寺法輪寺兩三重塔の建築年代を論ず | 歴史地理第七卷第七號 | 明治卅八年七月 |
| 會津八一 | 法起寺塔婆露盤銘文考 | 東洋美術第九號 | 昭和六年四月 |
| 田中重久 | 法起寺創立の研究 | 歴史と國文學第十四卷第一號 | 昭和十一年一月 |
| | 法隆寺再建の研究 | 考古學第十卷第九號 | 昭和十四年九月 |

薬師寺三重塔

・ 整正と明晰とを歐はれたヘレネの文化がアテネの背後のアクロポリスの丘上に残されてゐる様に、日本のヘレネ、天平の文化は奈良市の西部、西ノ京の地に残されてゐる。そして唐招提寺金堂の整正の美をバルテノン神殿に比當すれば、この薬師寺東塔の清澄の雅姿はエレクサイオンの美しさに比肩されようか。あのカリヤティドの女神像のやはらかにして正潔な美しさは、三寶繪詞や今昔物語に龍宮の様をうつして造られたと書き記されたこの寺のこの塔の典麗な美しさに通ふものがあらう。法隆寺塔の美しさは建築的な美しさと云ふよりも蒼古たる歴史の着装に負ふところが多いが、この塔の美しさは造形の妙、機構の奇なることに於て歴史を超越してゐる。人はよく建築美を譬へて「建築とは凍れる音楽である」と云ふが、この塔はこの定義にふさはしい古建築はなからう。この塔の造立はかの萬葉集の集結期に當つてゐるが、萬葉の歌の高く健やかなロマंचシズムを、この塔の造形に透視する

事はあながち私一人の幻想ではあるまい。

従つてこれに對して法隆寺塔の奇古なる外觀は記紀の歌謠體の素朴さを思ひ合はすべきであらう。

さて薬師寺は平城京時代官寺の第二位にあり、爾來永く南都七大寺の一として重きをなし、平安時代にあつては王氏源氏の氏寺として榮えた寺である。

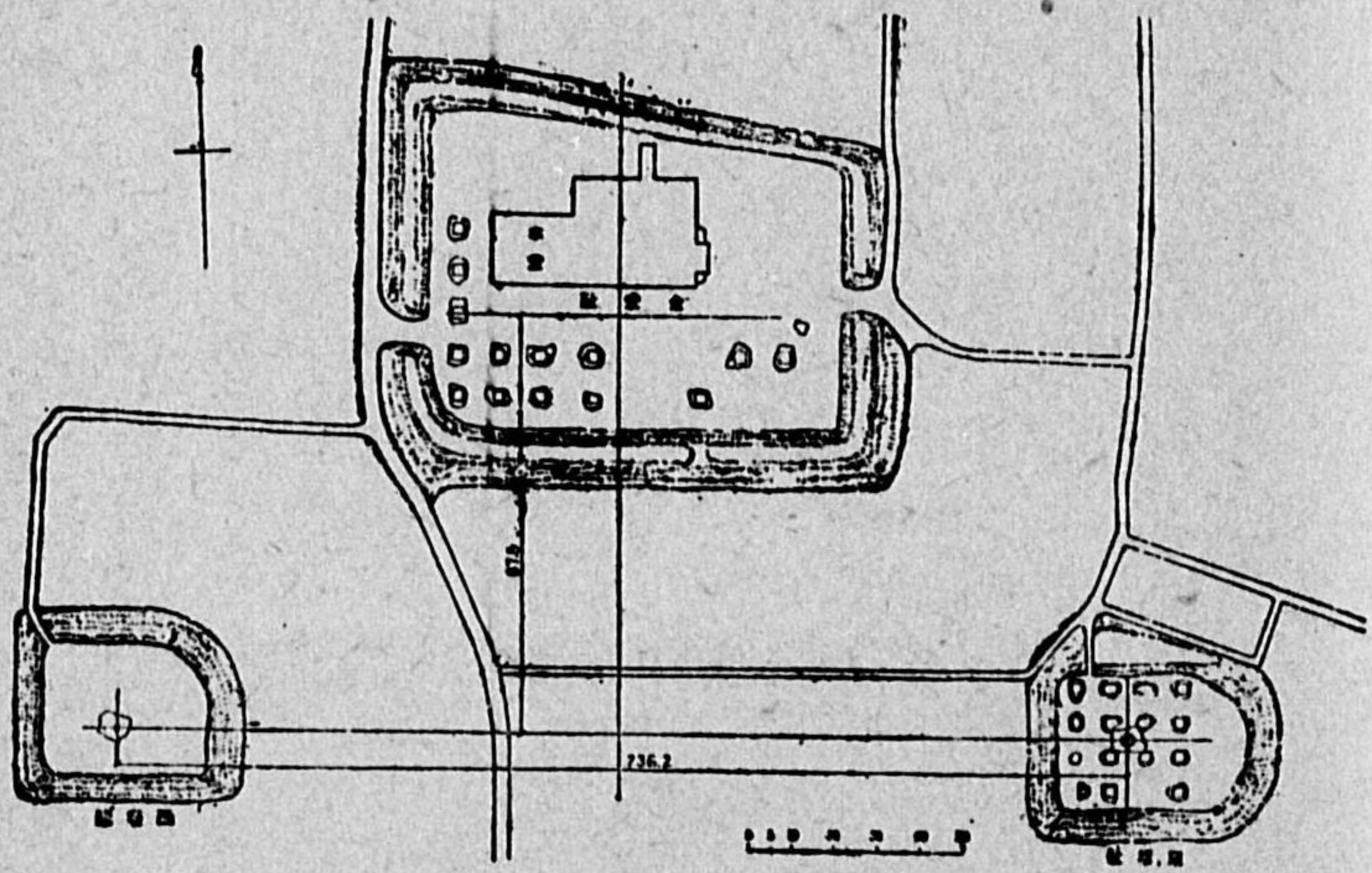
その創立は遠く天武天皇の御代に溯り、初め藤原京に於て天皇の即位八年皇后不豫の御爲に天皇誓願し給ひて薬師佛を本尊とする一寺を創めんとし給ひしが、間もなく天皇晏駕のことあり、皇后次いで即位し給ひて（即ち持統天皇にまします）工を進められ、次の文武天皇の御代に至つて成つたものである。しかし和銅年間平城に奠都の事あるや、數年を経て養老年間いまの地に寺籍の移轉されたのがこの薬師寺である。

建初の伽藍は双塔を廻廊内に持つた整然たるものであつたが、いまは東塔をしか存せず、金堂・講堂は江戸時代の再建であり、西塔は遺址を存すに過ぎぬのは盛時

の偉觀に比してあまりにわびしい。

ところで東塔の造立年代は、『扶桑略記』や『七大寺年表』等によれば、天平二年三月の事と考へられる。西塔の建立については記録を見ないが恐らくこれと前後して構設をみたであらう。兩塔ともいまの東塔と同じ形式であつたと云ふから、寺觀の偉容は以て想見すべきである。

その後の沿革は兩塔とも詳かではないが、法隆寺の『嘉元記』によれば正平十六年六月の地震には「一基ハ九輪落ヌ、一基ハ大ニユカム」とあつて多少の被害はあつたらしい。しかし享祿元年九月筒井順慶による兵火のために西塔を惜しくも焼失せしめてしまつた。『藥師寺志』
所引古記その後遺址はわびしく殘礎を白日の下に曝してゐたが、萬治三年講堂の北にあつた文珠堂がこゝに移された。しかし昭和九年に至つて文珠堂は腐朽のため北隣に移建改築せられ、塔址は再び白日の照射を受けることゝなつた。當初の礎石は心礎の外柱礎二個を殘すに過ぎないが、柱礎は移動して居り、心礎のみ原初の位置を保つてゐる。心礎は長徑七尺六寸短徑六尺三寸許りの巨大な自然石で中央に三段に圓孔を穿つてゐる。(圖版二八)この三段の圓孔は上段には柱が立ち、中



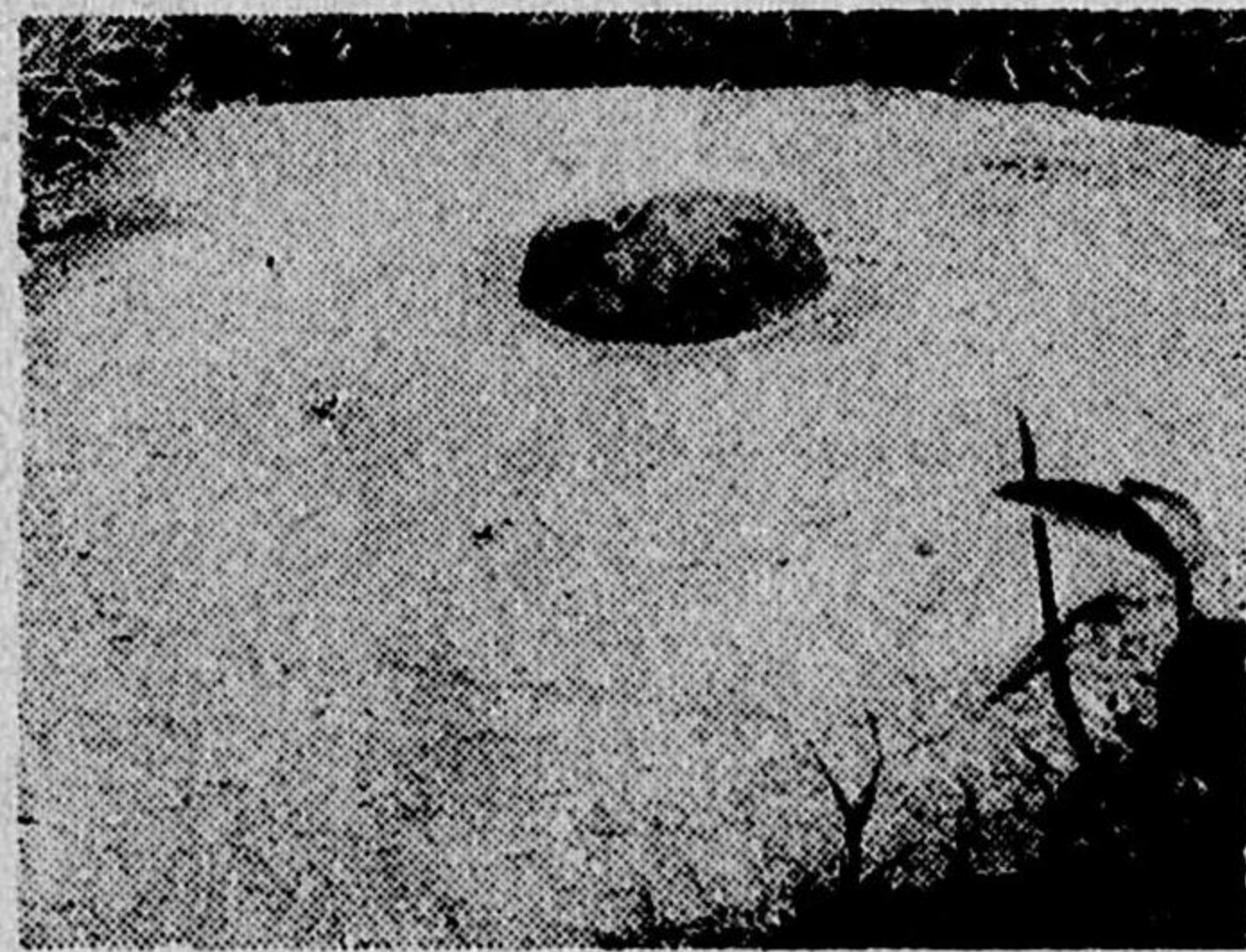
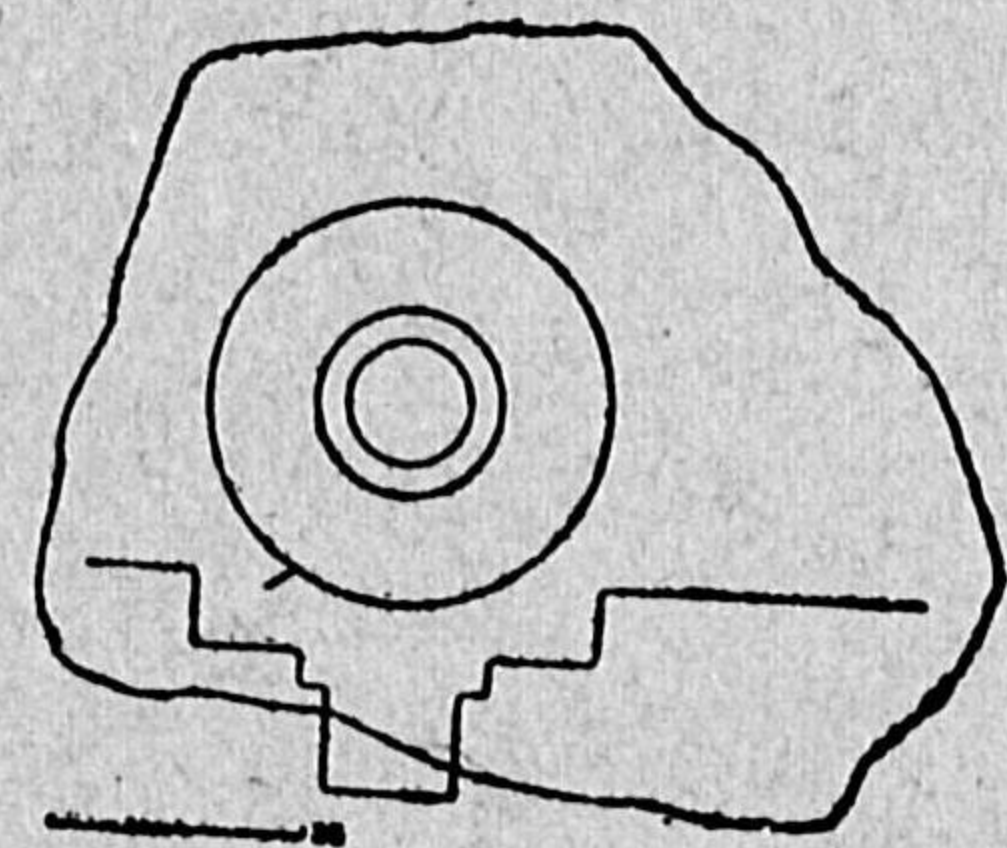
挿圖一六 本藥師寺址實測圖
(據古代文化研究所報告第五 藥師寺伽藍の研究)

段には石蓋がはまり、舍利は下段に收められたのである。舍利の莊嚴は知られないが、天武朝創建の藥師寺において嘉保二年その塔址から發見せられた舍利容器は石辛櫃の中に金銅宮(又壺ともある)を入れ、その中に舍利三粒を收めてゐたと云ふ。〔中右記〕
〔七大寺巡禮秘記〕元藥師寺は畝傍山の東、畝傍町木殿に遺址を存するが、遺址には東西兩塔と金堂址を存してゐる。東西兩塔の心礎を見ると東塔の心礎にはこの藥師寺西塔と同一の舍利孔があり、西塔には出納の加工しかない。従つてこの舍利發見が事實であつたとすればそれは東塔

心礎からであつたと考へられ、その舍利孔構造の同一性から推測すれば、略々この塔のそれも想像し得るものがあらう。西塔心礎の石蓋は今東院堂に保存されてゐる。

挿圖一七 本薬師寺塔心礎

上—東塔、下—西塔



猶上段には外周に排水孔があり、一方に水抜穴があるのは注意を要する。心礎の舍利孔としてはこの薬師寺西塔の精緻さは蓋し有数のものである。

さて東塔は幸に災を免がれて来たが、同寺の延寶八年評定行事日記に、正保元

年郡山城主本多内記正勝による修理があつたことを記してゐる。明治の修理に際して初層飛檐檼に

明和三 丙 七月吉日

大工

大塚村喜次郎
同 阿部村四兵衛

又初層裏甲には

・明和三年戊八月二日

細井戸安へ村
大工 巽四兵衛

等の墨書を検出してゐるから、その頃修理があつたのであらう。同寺の公文所日記によれば、嘉永七年大地震のために大破し、安政三年五月に至つて修理を遂げた事が見えてゐる。いま全構の明粧を得てゐるのは明治卅一年十月から同卅三年五月に互る保存修理の結果である。

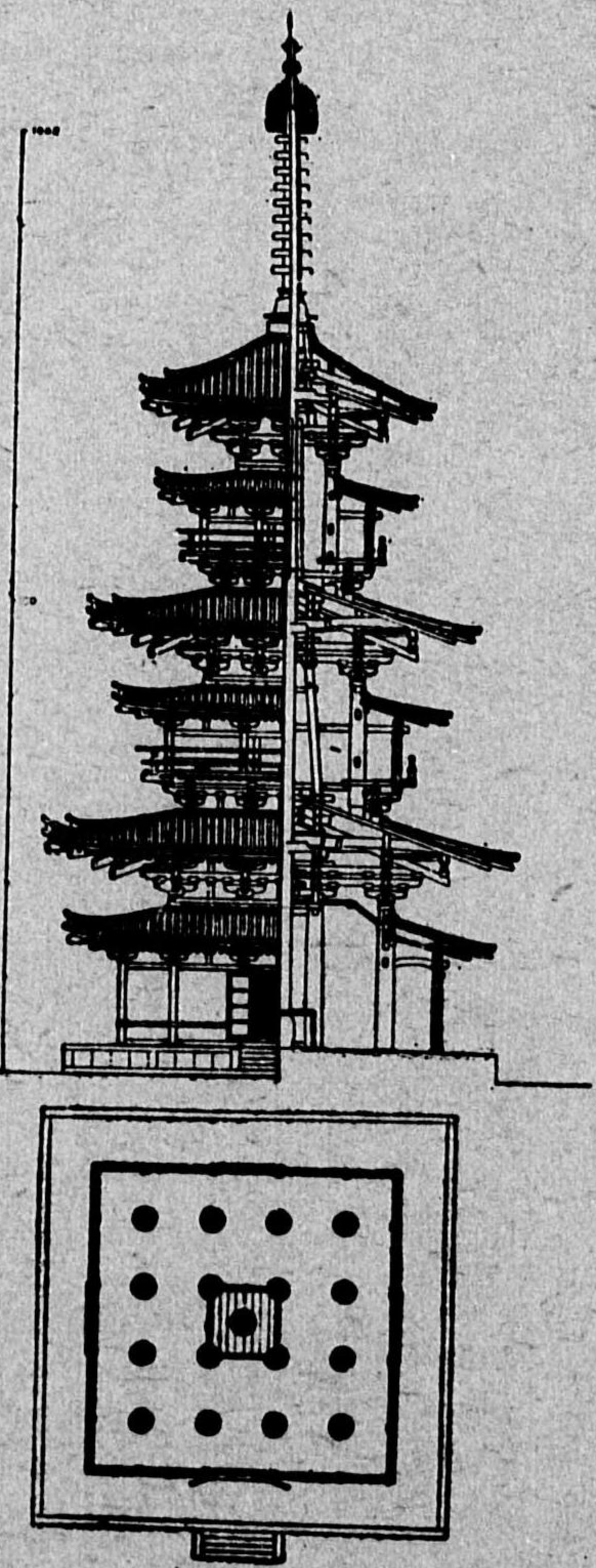
本塔で先づ最初に目につくのは裳階の意匠で、裳階は夫々三重の各層にあるため外観は六層に見え、しかも大小六重の屋根が交互に出入し、音律的とも云ふべき美しさを示してゐる。平面は初層・二層は方三間で、第三層だけは方二間となつてゐる。斗栱はこゝでは前記の法隆寺塔・法輪寺塔・法起寺塔の雲斗雲肘木とは異り、三手先斗栱となつてゐる。しかしその組成には軒支輪もなければ鬼斗もなく、後の三手先より見れば餘程原始的なものであるが、その軒天井は先上りに張られてゐるなど、施工には細密な注意がゆきとゞいてゐる。これは水平に張つた際、外方が垂

下して見える錯覺を補ふためのものである。肘木には笹線がある外、下面に「舌」と云はれる一種の線り出しがあり、他には例を見ぬ特異な手法である。裳階は初層方五間、二・三層各三間、斗拱は三斗である。これらの裳階は腰組で支へられた縁勾欄を持ち、其意匠はまことに巧である。

相輪は全高の三割と云ふ好比例を持ち、その形相も又卓越してゐる。特に注目すべきは伏鉢上の請花に當る部分が三枚の方板を重ねた様な形をしてゐ、其の上縁には四隅と各中央とに計八片の瓣狀突起がついてゐた形迹の存する事である。今本邦に遺存する他の木造塔婆の請花は總て圓形であるが、請花が印度の佛塔に於ける平頭の轉化とすれば、この塔の方形の請花は塔婆原形を忠實に守つたものであり、且それに瓣狀突起のついたものは印度・支那の古塔には多くの遺例がある。佛圖三に示す大同石窟の浮彫塔婆のそれも四角な請花で四隅に瓣狀突起をもつてゐる。従つてこれは大陸傳來の古い相輪形式に外ならぬが、この塔にかゝる古制を見得ることはうれしい。

水烟はその四扇に夫々端雲の中に三人の天女が笛を吹き花を持ち盤を捧げた様を配したものであるが、この意匠の卓拔さは他に比例を見ない。寶珠に蓮花座のある

のも層塔としては珍しい。この相輪には殆ど修補を認め得ぬから、これこそ形式の上からも實物の上からも本邦最古の相輪と云ふべきであるが、こゝにも古いものと美しいと云ふ美術史の定理が肯定されてゐるのは愉快である。



挿圖一八 藥師寺東塔實測圖

猶この相輪の請花上の擦西南面には、藤原京藥師寺の草創事情を述べた有名な銘文がある。即ち

維清原宮馭宇

天皇即位八年庚辰之歲建子之月以

中宮不念創此伽藍而鋪金未遂龍駕

騰仙大上天皇奉遵前緒遂成斯業

照先皇之弘誓光後帝之玄功道濟那

生業傳曠劫式於高躅敢勒貞金

其銘曰

巍巍蕩蕩藥師如來大發誓願廣

運慈哀猗猗聖王仰延冥助爰

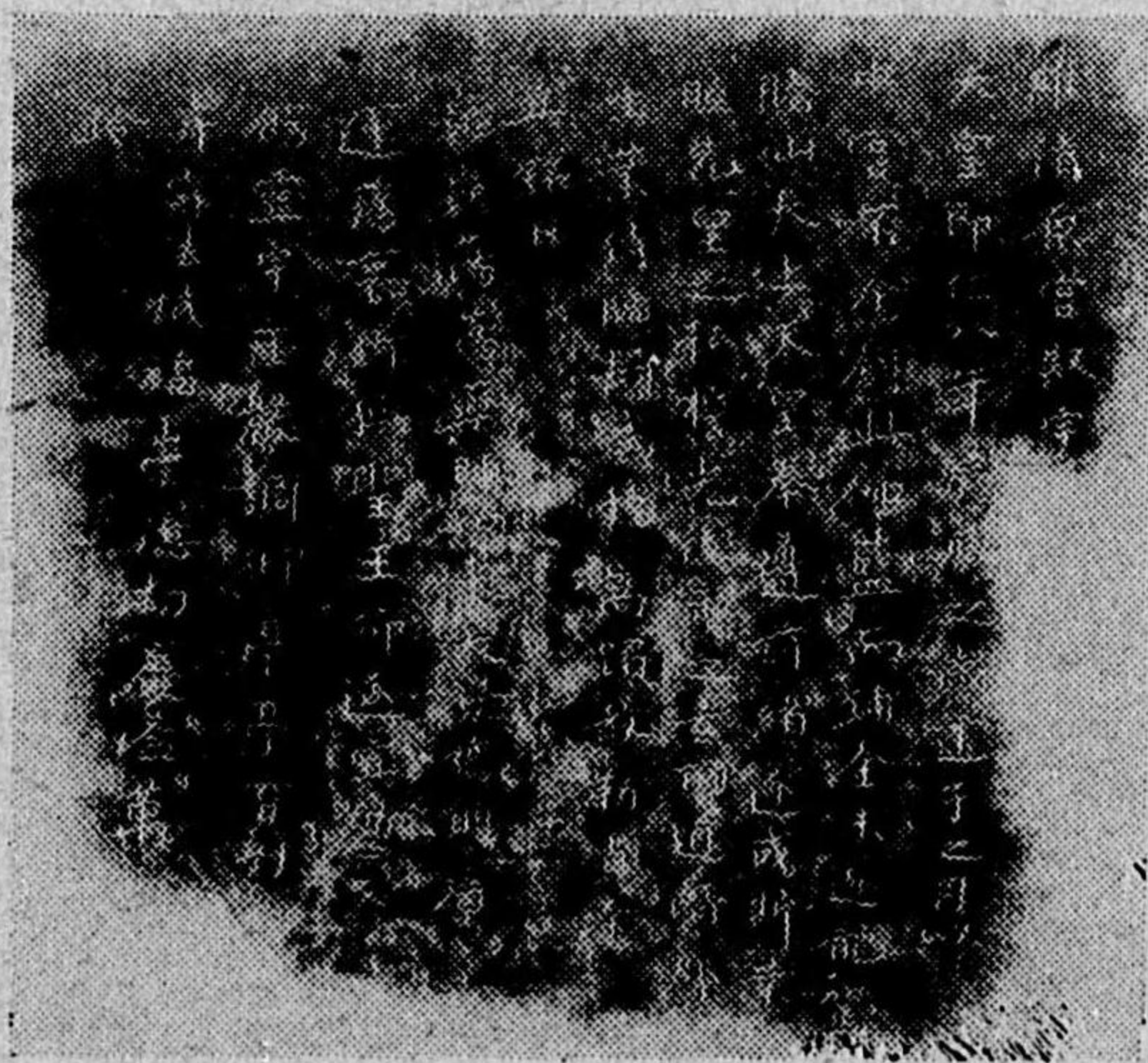
鎊靈宇莊嚴調御亭亭寶刹

寂寂法城福崇億劫慶溢萬

齡

しかしこの文に於て注意されることは、こゝではこの寺の草創を「維清原宮馭宇
天皇即位八年庚辰之歲」と記してゐるが、書紀は九年庚辰條に「十一月癸未皇后不
豫、則爲皇后誓願之、初興藥師寺」とあり、同じ庚辰の年について兩者では御即位

挿圖一九 藥師寺塔露盤銘拓影



よりの年數に一年の差のある事である。これは江戸時代から金石文學者の注意する
ところとなつてゐるが、天武天皇は壬申の年より制を稱せられ給うたが、御即位は
その翌年二月であらせられたので、銘は御即位の年より數へ、書紀は稱制の年より
數へたものに外ならぬ。しかし銘文はその字配りは亂雑で、しかも誤字まであるこ
とは、これが追録である事を示してゐるが、その撰文の年代や追刻の時期について
は種々議論がある。ある學者は請花の北側の裏面に釘書の如き刻文で

賢基之

作也

とある事を以て、平安初頭多武峯を開いた僧賢基の刻と見てゐる。

參照談山神
社十三重塔

因みにこの銘文は平子鐸嶺氏によつてかの唐の長安西明寺の銘鐘に倣つて作られ
たことが指摘せられてゐる。鐘銘には次の如くある。傍點は相
關の句

維、大唐麟德二年歲纏星紀、月次降婁二月、癸酉朔八日庚辰、皇太子奉爲二聖於西明寺、
造銅鐘一口、可一萬斤、發漢水之奇珍、採蜀山之秘寶、虞垂練火、晉曠飛爐、帶龍噓而
騰規、應鯨桴而寫製、聲流九地、遐宣厚載之恩、韻徹三大、遠播曾晏之德、寤群生於覺

路、警庶類於迷塗、業擅香垣、功齊塵劫、式旌高圖、敢勒貞金、銘曰、青祇薦祉、黃離降精、滑川毓德、瑤嶺飛英、吹銅表性、問寢登情、興言淨業、載啓香城、七珍文鑄、九乳圖形、翔龍若動、偃獸疑驚、制陵周室、規踰漢庭、風飄且響、霜傳夜鳴、仰延皇祚、府導蒼生、聲騰億劫、慶溢千齡

塔内は松香石敷の土間床で、いまは心柱を圍んで佛壇を設け後の佛像を置いてゐ、天井は組入天井、その支輪と柱間とは彩畫の花文が比較的よく残つてゐる。しかし佛壇は當初の制ではなく、當初の釋迦八相のうち因相たる入胎、受生、苦行の場面を安置してゐたと云ふから、岩窟状のものを築き丁度現存法隆寺塔内の如く、其處に塑造の群像を適宜に配置したのである。今はその塑像の心木のみが寺に残つてゐる。因みに八相のうち果相たる成道・轉法輪・涅槃・分舍利の方は西塔内に置かれてゐたのである。「藥師寺緣起」「七大寺日記」「七大寺巡禮私記」

そしてこの釋迦の相の塑像は『建久御巡禮記』に見えてゐるから鎌倉頃までは存したらしいが、かくの如く兩塔内に釋迦八相の分置せられた確かな例は、他に藤原京藥師寺塔に見られるに過ぎず珍しいものである。

これを要するに本塔は本邦上代の造形の頂點を示すものとして重視すべきは勿論の事、これが世界的な範疇に於ても決しておくれる事のない名建築であることをわれわれは認識しなければならぬ。

参考文献

- 關野 貞 藥師寺東塔
平子 鐸 藥師寺東塔撥銘圖說
足立 康 藥師寺東塔非移建論
藥師寺西塔心礎考
藥師寺伽藍の研究
田中重久 本藥師寺創立の研究
殿田嘉一郎 藥師寺東塔撥銘新考

建築雜誌第二〇〇號

明治卅六年八月

「佛敎藝術の研究」

日本美術史第三册

昭和七年七月

東洋美術第二號

昭和六年六月

日本古文化研究所報告第五

昭和十二年七月

考古學第十一卷第九號第十號

昭和十五年九月十月

史迹と美術第一四三・一四四

昭和十七年十月

一四五・一四六號

一十八年一月

當麻寺三重塔

中將姫の藕糸曼荼羅で著名な當麻寺には三重塔が二基あり、二上山を間近に控へて並行する偉観はなつかしいものである。

當麻寺の創立は『諸寺縁起集』や『元亨釋書』等、鎌倉以降の諸書に依れば、推古天皇の二十年用明天皇の皇子麻呂子親王が御兄聖德太子の御教によつて一伽藍を草創し給うて、萬法藏院と稱したが、後、天武天皇の御代に親王瑞夢を得て役行者練行の地たる現寺地に遷造を發願せられ、白鳳十年に起工し、同十四年に到つて金堂・講堂・千手堂(今の曼荼羅堂)、寶塔二基、鐘樓、經藏、三面僧坊、寶藏、大門等の造營を了へたものと記され、當時寺號を禪林寺と稱へたが、後故あつて當麻寺と改めたと傳へてゐる。しかしこの草創説のそのまゝ信じ難い事は、この寺の遺像、遺瓦等にこの時代にまで溯り得るものゝないことで、それらの様式によれば恐らく當麻氏の氏寺として奈良朝の初葉に至つて創立せられた寺であらう。

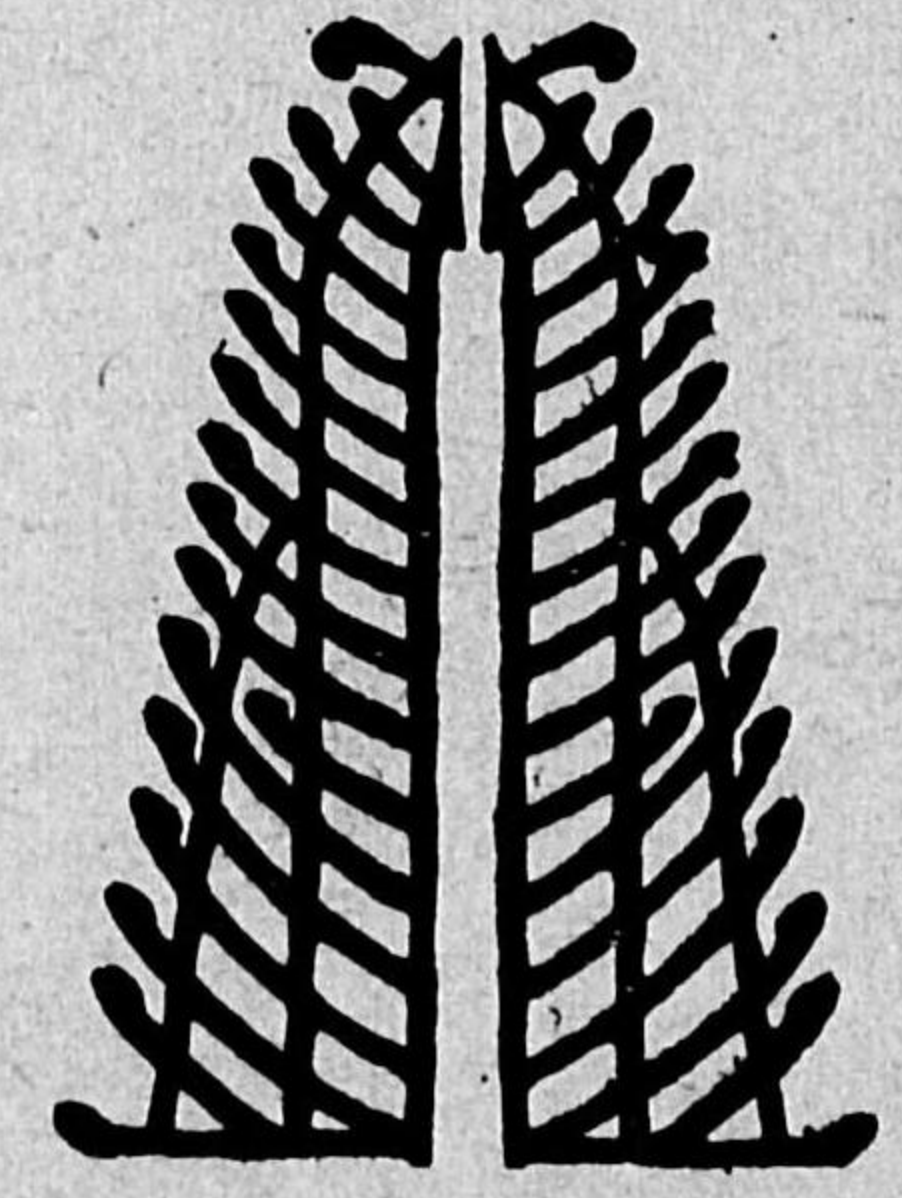
この寺の伽藍配置を見ると、塔婆は金堂の前方相當距離に並置され、金堂の後には講堂を有してゐる。そして金堂・講堂は過ぐる年の修理に於てその位置も規模も殆ど當初から變つてゐないらしい事を認め得たから、これらの在り方は當初のまゝであるらしい。従つてこの寺は興福寺式の伽藍配置を持つてゐた事を示してゐるが、われわれはいま奈良式配置の寺に於て二基並立の壯觀はこの寺以外に見る事を得ない。この意味に於てこの寺の双塔は奈良朝寺院の整然たる塔婆の在り方の貴重な遺例である。

しかし兩塔共に建造の年次を示す文献上の所見はないが、その様式によれば、東塔は奈良朝初葉、西塔はその末葉乃至弘仁初葉の造立と説かれる。いま見る整然たる景觀は、東塔は明治三十五年一月から同三十六年九月に亙り、西塔は明治四十五年一月から大正三年四月に亙る修理に於て整へられたもので、それ以前は東塔は傾き、各重に支柱を入れて僅に倒壊を免れ、西塔は三重を大破してゐたと云ふ。

東塔はいま基壇なく、地盤とは雨落溝を以て境せられた土間床上にエンタシスを有する圓柱を立て各層三手先の斗拱を組み、二重の軒を支へた木割の太い健強な塔婆であるが、全構を仰ぎ見ると三つの注意を惹く點がある。その第一は、初層の柱間に於て中の方が兩脇の間より目立つて廣いこと、その第二は、初層は中央に板扉を開き、兩脇間に欄窓―但しその様式は多少遅れてゐるので當初欄窓があつたか否かは疑問であるが―を配した三間であるが、二重と三重の柱間は中央間を略して二間となつてゐること、そしてその第三は、相輪中寶輪が八輪しかない事である。

先づ第一の問題であるが、これは他の奈良朝塔婆との比較に於て、かくの如く中央間の廣い例はない。第二の上層が柱間を減じて二間としてゐるのは、法隆寺塔や藥師寺東塔の最上層に於て行はれてゐる古式意匠の一つであるが、かくの如く二層以上をかくも大膽に扱ひ簡潔な處理を以て健強な効果をあげた技法には敬服させられる。第三の相輪が定數に一輪足りないことは、これが當初からの制とすれば當時未だ九輪の制が確立してゐなかつたことを示すものとして重視すべきである。水烟(挿圖二〇)はあたかも魚骨の如き珍奇な意匠を持つてゐるが、恐らく當初のものではなからう。

これを要するに本塔は形式上諸多の特異性をもつ本邦古塔中の一異彩として注意すべきものである。



二〇 水烟
東塔 當麻寺

近よつて軒裏に目を放つと、成の高い斗、箆線を持つ肘木、おほらかな曲率をもつ支輪、いづれも鑑賞の眼を見張らしめる。又斗拱の中備に裝飾を持たぬことも簡潔でいい。初層の内部は土間床上四柱間に素木

造の須彌壇を置き、天井はすべて組入天井である。

西塔

東塔が異常な意匠と素朴にして健強な風格とを持つてゐるのに對して、西塔は整然たる構成の發散する一種豐潤な美しさを持つてゐる。即ちこれは低いながらも一重の基壇の上に立ち、三重とも柱間數に變化がない。又その柱間の中央間と兩脇間との廣さの相違も東塔ほどの劇しさはなく―尤も他の塔婆と比較すればやはり異常

に中の間が廣いが、すべてに正常性を持つてゐる。柱にはエンタシスはあるが微弱で、斗栱は三手先、初層斗栱部には中備へに斗束を立て、軒は二重である。三手先組の斗は目立つて含みが少く、肘木には笹線がない。従つてこれらの斗栱の形式はこの塔の建立が奈良朝の末にあつたことを示すものであるが、東塔が奈良朝初期の形式をもつてゐるのに對してあまりに造立年代の距りがあるので、現西塔は創建のものでなく再建のものだとみる論者もある。相輪は東塔と同じく八輪(扉挿輪)しかないのも注意すべきであるが、唐草をあしらつた水烟の意匠は實にすぐれてゐる。恐らく薬師寺東塔のそれを除けば最も典麗なものであらう。伏鉢には次の修補銘がある。

修復大工棟梁當麻村

- 政木宇右衛門
- 同所 佐助
- 新庄村
- 十右衛門
- 細井戸

巽四兵衛

同 乾善次郎

同日雇頭北之門

平三郎

建保卯年慶長癸天

正保丙戌年修覆

明和三年丙戌五月六日修

復始之

年預

- 千手院實鏡
- 奥院教譽
- 不動院廣視
- 護念院憲譽

明和亥丁春正月始之六月

終焉

年預

護念院憲譽

中之坊本實

念佛院辨譽

西南院一音

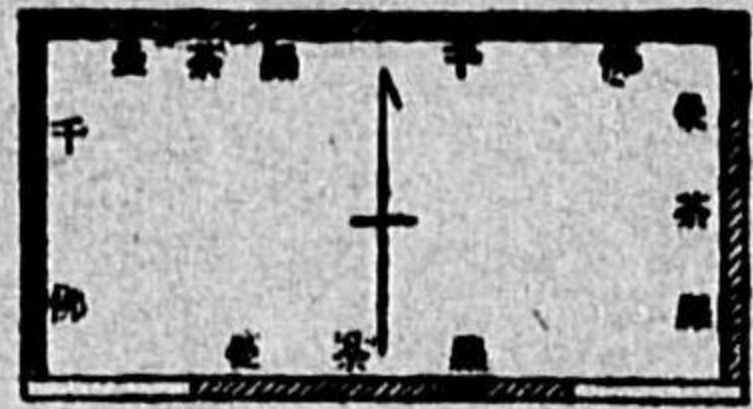
再興

金細工和州葛下郡別處村佛具大佛馬川治兵衛
同半治郎

これによつてこの塔婆の建保七年、慶長十八年、正保三年、明和三年等の修理年次が示される。

初層内部は土間床、四天柱間に木製の須彌壇を置き、天井はすべて組入天井である。心柱は板圍ひが施されてゐる。しかしこの板圍ひは断面方形でなく長方形になつてゐるが、これはいまの心柱の足元が東から西へ傾き狂ひを生じてゐるからである。従つてこれは心柱の歪曲後の施行である。しかしてこの板書をみると二種の彩

書があり、剝落はひどいが、一は千體佛と一は曼荼羅らしい。しかしかゝる長大にして巾のある板書は特定の場所にしか必要はないので、やはりその一組を以て當初の心柱の圍ひとしてゐたのではあるまいか。従つて何れかの一種は東塔からの流用と考へられる。



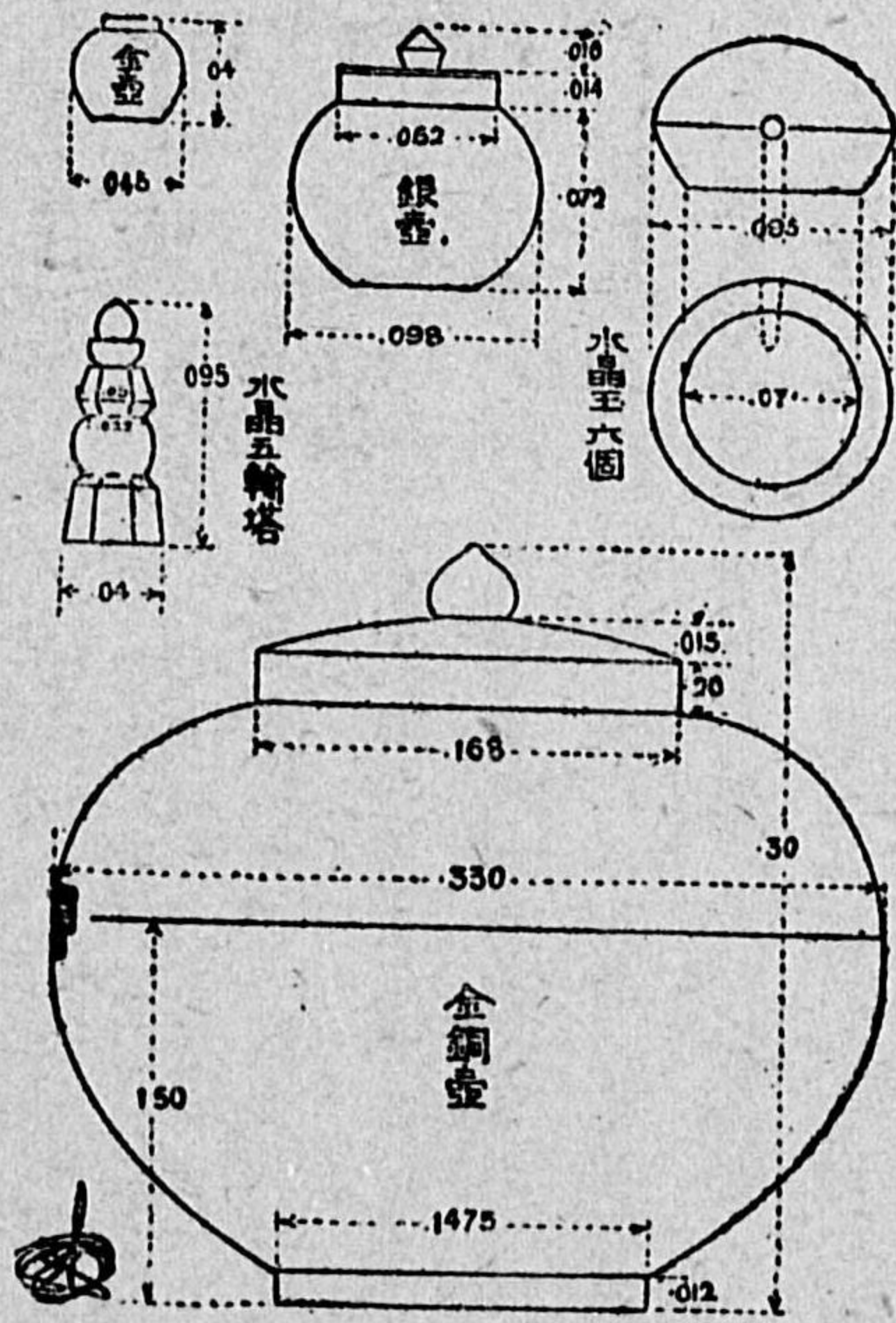
當麻寺西塔 心柱圍板見取圖

千佛書は一體の高さは一寸三分、三十九段、一段に十八鉢並んでゐるから、一面で七百餘體であつたこととなるが、この板は巾一尺六寸九分あり、曼荼羅書はそれが何かは知られないが、天蓋をもつ三尊佛等が見えてゐる。この板巾は南面のものは完全らしく一尺八寸二分五厘あり、北面のものは剝り縮められてゐて一尺六寸九分しかない。従つて千佛書の方が曼荼羅書のものより細い板圍ひであることが知られるので、千佛書を西塔のもの曼荼羅書を東塔のものとする説もある。描出は共に平安初期を下らないものとされてゐる。かくの如く初層心柱の板圍ひは醍醐寺五重塔にも見られる。

明治の修理に於て心柱頂上に凹所があり、そこから舍利容器・古錢・建保七年及

明和三年の修理記録等が発見せられた。舍利容器は外を金銅壺となしこの内に金壺
 を入れ子とした銀壺と水晶五輪塔・水晶玉、古銭があり、金壺の中に舍利三粒が

挿圖二二 當麻寺西塔舍利容器實測圖(天沼博士測圖)(1/2)



あつた。金銅壺には金銅蓋裏に

「本實憲譽世話而納入」身裏に
 は「明和四丁四月晦日納入」と
 環狀に墨書があり、これは「明
 和四丁四月晦日納入」と墨書した
 麻布でつゝまれてゐた。

古銭は和銅開珍一、萬年通寶
 六、神功開寶三、淳化元寶一、
 咸平元寶一、元禧通寶一、景祐
 元祐通寶一、宣和通寶一であり、

元寶一、皇宋通寶一、治平元寶一、元豐通寶一、
 修理記録とは次の如きものである。

西塔修理結縁衆

少別當俊良 勾當良章

供僧等

僧良信 僧院曉 僧隆院

承仕

僧良嚴 僧聖玄

大工

善智房 光善房 教壽房 行信房等

眞勝房 蓮觀房 成親房 已上廿餘人

建保七年卯月七日酉時 久万房

智觀房

建主大願立過去

中大僧正御房

僧教實 僧尋政 僧玄政 僧宗詮

僧靜俊 僧嚴與 僧成譽

奉納

御舍利三粒 赤地錦袋三 水精五輪寶塔一基

爲本願聖靈出離生死成佛得道別此伽藍佛法人法

繁昌僧院曉現當二世求願圓滿也

建保七年卯月七日酉時奉納畢

僧院曉 花押

そしてこれに法華經廿八品目錄寫經一枚を添へて一括とし、別に次の二枚の記録が
入れられてゐた。

西塔修復略記

始建保年中修復次年慶長十八年修復次年正保年中屋根修復次年明和三丙戌從五月六
日修復始而至明和四年五月二重三重悉及成就時自眞柱之上似黄金得一器開蓋則其内
有佛舍利三粒也一者入黄金之小壺貳者入水晶之寶塔壹者入紙包且書願主姓名等也矣
依之兩衆徒中會而拜見之也固有水晶玉六古錢十九穴然此事不記錄而悉皆入彼一器也

今新以布包之而亦始納于眞柱之上者也

于時明和四年丁亥五月

當山年預言方

護念院憲譽

同眞言方

中之坊本實

同淨土方

念佛院辨譽

同眞言方

西南院一音

去年明和三年丙戌五月

當山年預言方

千手院實鏡

同淨土方

奥院教譽

同眞言方

不動院廣觀

同淨土方

護念院憲譽

大工兩棟梁常麻寺宇右衛門新庄重右衛門日備頭常村北之門三良同願分
保次郎 高田町又兵衛蓋六

西塔修復附五百年餘ノ記録並ニ佛舍利ヲ拜見シテ

當山千手院

實鏡

ヒラキミテ實モタフトクイヲトセノ今ニクチセヌ水クキノアト
イクヨフル寺ニ光ノ玉クシケフタカミ山モホト近シテ

従つてこれによればこの舍利容器は建保修理に納入したものらしく、それを明和の修理に發見し麻布等で包み直して記録を添へて再び納置したものであるが、相輪に舍利を納入せる實例として興味深いものがある。

參考文獻

- | | | | |
|------|----------------|-------------|----------|
| 天沼俊一 | 大和當麻寺西塔發見の舍利容器 | 考古學雜誌第三卷第一號 | 大正元年九月 |
| 足立康 | 古建築追憶 | 史迹と美術第八四號 | 昭和十二年十一月 |
| | 當麻寺西塔に關する疑 | 史迹と美術第三五號 | 昭和八年十月 |

室生寺五重塔

室生寺の五重塔は、世にも可憐な塔である。總高五丈三尺四寸と云へば、東大寺の大佛と等高であるが、かゝる規模の小ささの故か、弘法大師が一夜に建立されたものといふ傳説を持つてゐる。

さて室生寺はいま女人高野の名に呼ばれ眞言宗を奉じてゐるが、この寺が眞言宗となつたのは元祿十四年以來のことで、古くは興福寺に屬してゐた。

寺の創立については今詳細を窺知し難いが、少くとも奈良時代にその靈驗を以て知られてゐたこの山の龍穴神のために、神宮寺として寶龜の末年乃至延暦の初年頃に興福寺の僧賢璟によつて創立せられたものと考へられる。寺は貞觀八年勅によつて龍王寺の稱を受けてゐる。承平七年室生山
年分度者奏狀

一般に神宮寺を建てることは佛教の日本化への一方向として奈良朝の末頃に於て殊に盛んとなつたもので、この神佛調和の思想は新興の天臺・眞言兩宗にも強く影

響してゐる。

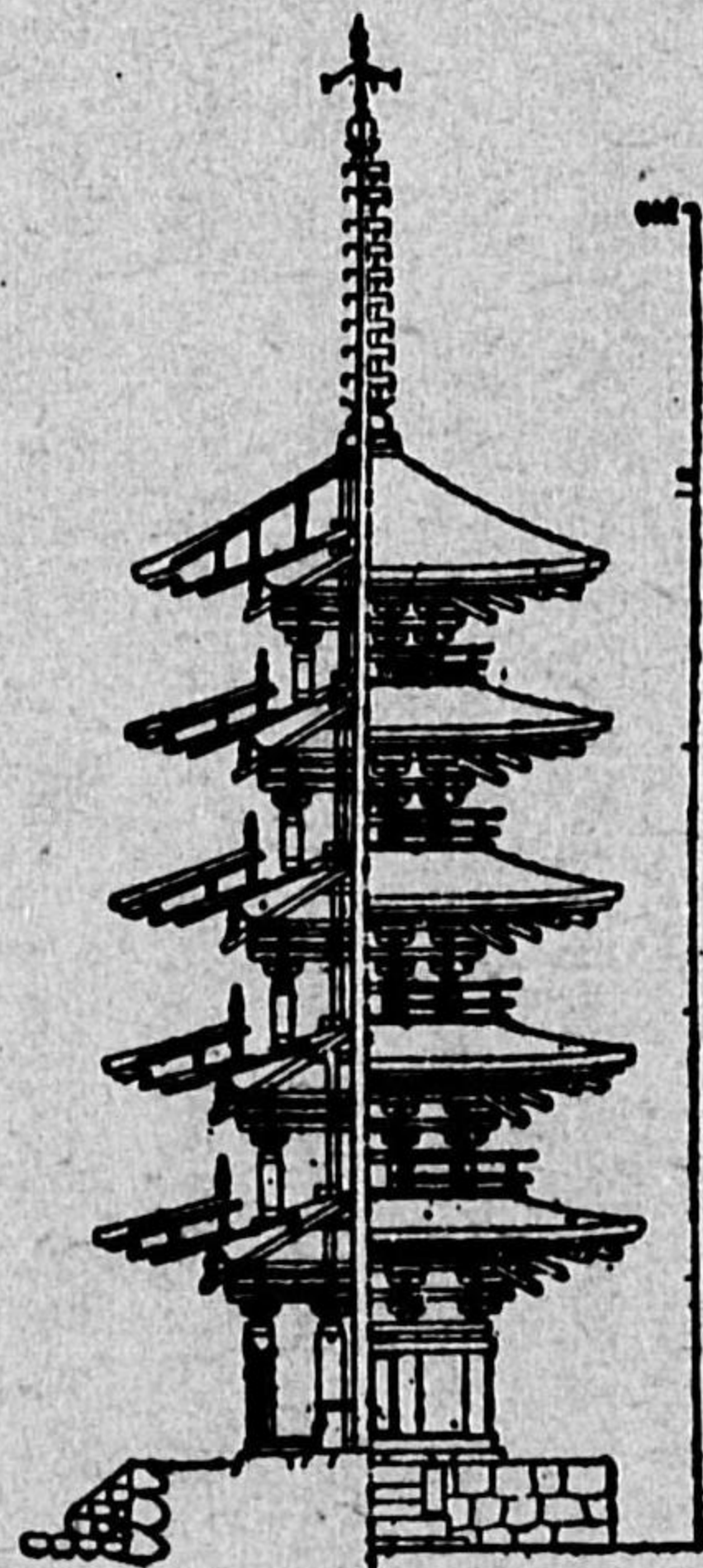
従つて室生寺はいま云はれる如く密教寺院として出發したものではなく、この寺院を以て密教伽藍と見る事は當れるものではないが、その創立の時代や性質は密教寺院の近い先驅であり、特にその寺域は當時の都市佛教と異つて靜寂な山中であつたから、それはやがて山に入つた密教寺院の形相と歸せずして相似たものとなつてゐたわけである。

しかしこの塔の建立については何の記録も残されてゐないが、明治三十三年十月から同三十四年八月に亙るこの塔の保存法による解體修理に當つた關野博士は、「吾人をして却つて天平初期の性質を帯びたるにあらざるやを疑はしむ」と云はれてゐる如く、この塔の細部には相當の古様がある。従つて賢璟によるこの寺の創立せられた延暦初年前後まで溯らしめて考へることが出來よう。

塔は石垣積のやゝ高い基壇の上に立ち、南正面に石階を構へる。初層は中央間を板扉、兩脇間を壁としてゐるが、この柱間の制は上重各層とも同じい。初層の柱に

は微弱なエンタシスがあり、斗拱は三手先、軒は二重で、地極は丸く飛檐極は角である。

斗、肘木共に成高く、且斗は含みが少いので斗拱の全高を極めて高くしてゐる。仰いで全構を見ると、檜皮葺の軒反りはゆるやかに、軒出深く、各層の縁勾欄は



挿圖二三
室生寺五重塔實測圖

本塔規模の關係上單に化粧として檜皮屋根の上に置かれてゐるのも全體の手法を考へた適宜の手法である。しかしこの勾欄の内で五重目のものは他

と形式を異にし、地覆平桁間に横連子を入れてゐるのは注意される。かゝる勾欄の制は海龍王寺小塔に見る古様であるが、恐らく他の重のものも、古くはこの制であつたと思はれる。そしてこの塔に於て特に注目すべきは、相輪の制が本邦相輪の定形たる水烟・龍車・寶珠に代へるに寶瓶・寶蓋を以てした事である。(圖版一三) 寶蓋をのせた

相輪は大陸には喇嘛塔や雁塔に見ることが出来るが、寶瓶をそれに加へたものは残されてゐない。しかしかの『洛陽伽藍記』の記す北魏熙平元年（皇紀一一七六年）に靈太后胡氏の立てた永寧寺の塔には「刹上有金寶瓶容二十五石」とあるからやはり大陸に先蹤のあつたことが考へられる。又相輪には各輪に風鐸を釣り、その巧緻な意匠は効果的である。猶この塔の初層内は板張となつてゐる。これはこれまでの塔には決してみなかつた事で、大陸傳來の土間床の佛寺建築が、この國風の高床を持つに至る萌芽を示すものと説かれてゐる。

ともあれ鬱蒼たる老杉の中に立つ丹塗の古色侘びたこの美しさは室生寺を訪れた人達にとつて忘れ難いものである。

参考文献

關野貞 室生寺五重塔
福山敏男 室生寺の建立

建築雜誌第二百六號
史迹と美術第六十號

明治卅七年二月
昭和十年十一月

興福寺三重塔

興福寺の五重塔は誰知らぬ者もあるまいが、この寺に一基の三重塔がある事を知る人は案外少ない。塔は南圓堂の背後の窪地にあつて、位置としては映えないけれども北圓堂と共にこの寺に残された最も古い建築の一つであり、またその繊細な美しさは當代の塔婆中有數のものである。

この塔の創立については康治二年十二月崇徳院の中宮皇嘉門院の御願、又同年同月鳥羽院の中宮待賢門院の御願とする二つの記録があり、前者は『本朝世紀』、『臺記』等の當時の日乗に見え、後者は『興福寺略年代記』以下『同濫觴記』・『諸堂縁起』等の寺家編著に見えてゐるが、足立博士によつて前者を正とすべきと説かれてゐる。

従つてこれによれば保延四年七月十八日壇を築き始め「興福寺、別當次第」、同十月廿七日に棟上、十二月廿八日落成したものであつた。ところがそれは治承四年平重衡の南都

焼討に遭つて炎上し「玉槌記」、『山槻記』、いまのものはその後の再建塔である。

しかしいま再建の年代に関する所見はないが、様式的に見ればそれは恐らく鎌倉初葉にあつた様である。

その後の沿革については詳かでないが、相輪の寶珠と龍舎との間の擦に

與 一

天文十九年十一月吉與一

の刻銘があり、龍舎には縦に籠字で「天文」の二字があつて、天文十九年に修理があつたことを示してゐる。猶寶珠には横に左より「四雷電吼菩薩」の文字が刻されてゐるが、これは避雷の咒言である。

因みにこの相輪はいま鐵の部分と青銅の部分とあり、銘のあるのは青銅であるから、その部分は天文の補加と考へられる。

そしてその後享保八年、安政六年に屋根葺替を経た事は棟札によつて知られ、明治に入つては同四十年十月から四十三年三月に互つて保存法による根本修理を受けてゐる。

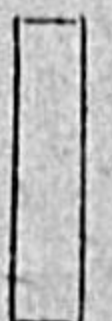
享保修理棟札

長一尺四寸二分五厘、巾五寸八分、厚九分五厘、右上端高四寸一分巾三寸を欠く

享保八卯年	野田	半田役長四郎	同	久左衛門
四月八日	助三郎	同	長助	同
此塔屋根替申事	同	同	伊兵衛	同
瓦葺師	彌兵衛	同	同	又四郎
岩田善次郎	日用代	同	八助	同
同 彦次郎	六拾八文	同	久兵衛	同
同 彦次郎	同	同	由兵衛	同
同 彦次郎	同	同	同	庄八
芝田長七	同	同	藤兵衛	同
		縮拾貳人		

側面

米直段四拾八匁錢拾貳匁六分



安政巳未六月

御寺務

大乘院御門跡長官大僧正隆芳

三重塔屋根替並露盤和久其外裏板裏甲加修覆畢

伍師

賢聖院法印大僧都長榮

別會

寶壽院法印大僧都清胤

世尊院大僧都曉懷

五大院堯雅

妙喜院法印大僧都慈胤

寶藏院權律師胤懷

大持院擬講孝範

龍徳院秀英

唐院奉行

岡山元庸秀昌

中村靜安舜胤

新坊奉行

岡山元洞英雄

中村玄盛堯圓

修理奉行

竹内主敬映泰

岡山宗壽榮親

岡山元明榮清

加役

中村完圓榮純

家司

松井玄部卿法眼

多門院中將法印

登大路町

高天市町

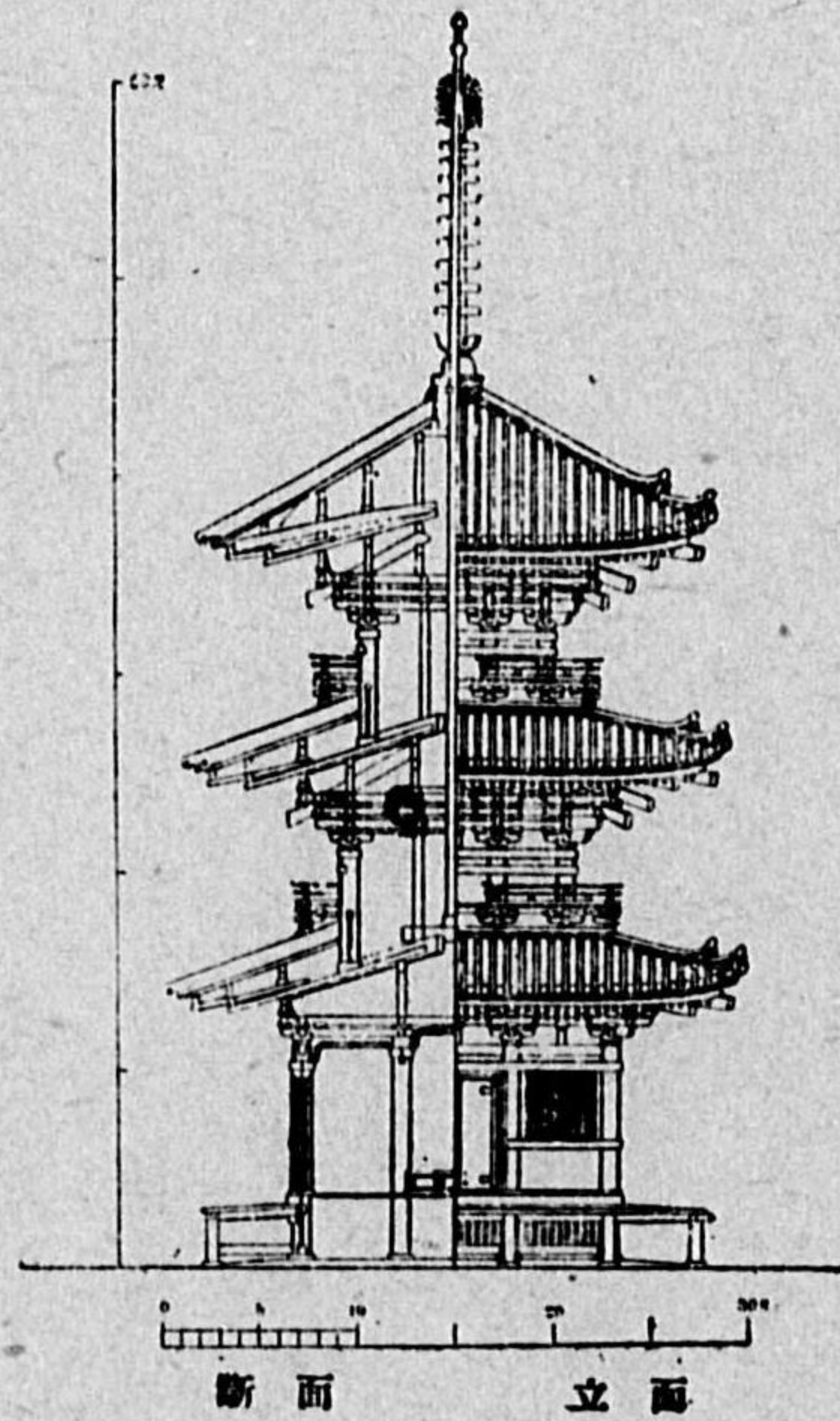
日雇頭兼松

半六

塔は女性の御願にふさはしく木割の華奢な軽やかにして且落着いた風手をもつてある。初層が木口縁を廻らしてあるのも、この塔を親しみ深くしてある。

初層の柱間は中央を板扉、兩脇間を腰長押上に盲櫓、下を板嵌とし、二層以上はこれを塗壁としてあるが、各層柱間を注意してみると、その遞減度は等比遞減でな

く、初層から二層への柱間縮減が際立つて大いことに氣付くであらう。即ちこの下層を重く、上層を軽くし計畫された造形上の用意が、この塔を安定にして輕妙と云ふ構造體としての美しさを組成せしめてあるのである。従つて軒の出は各層の端を揃へる關係上初層は淺く



挿圖二四 興福寺三重塔修理前實測圖

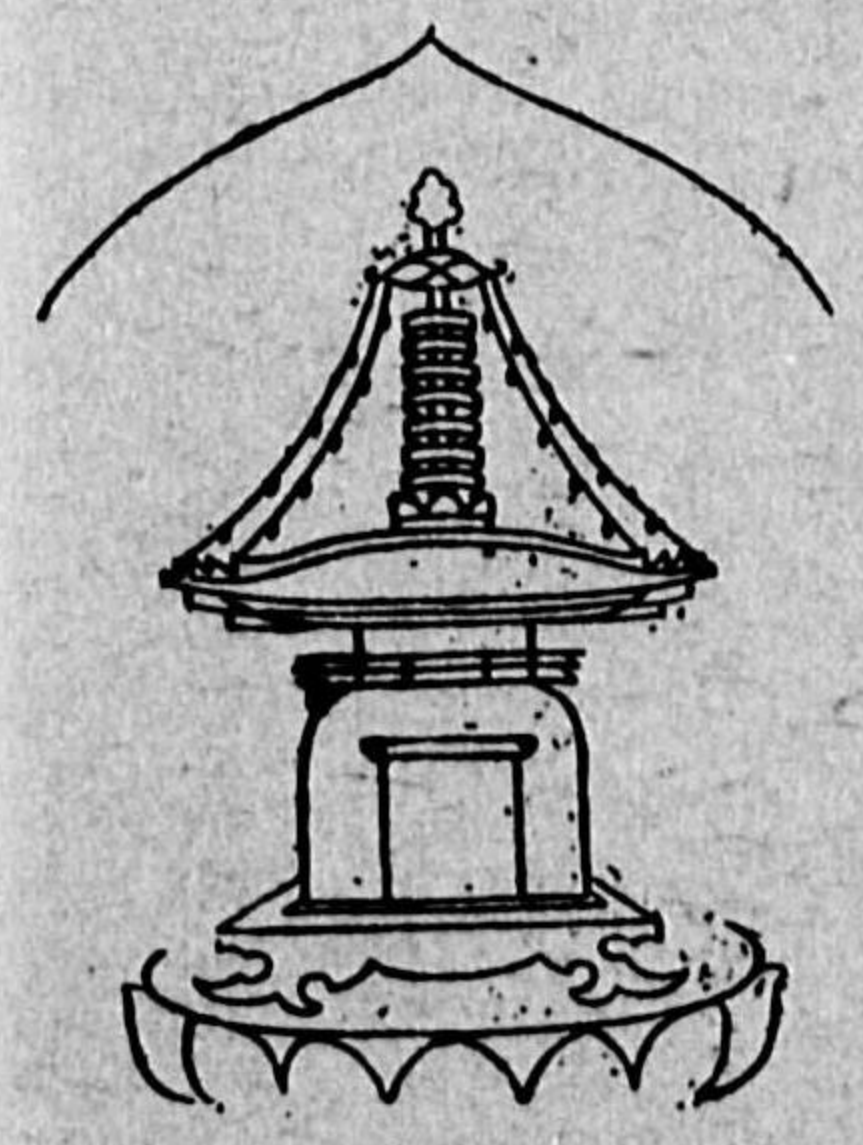
に捉はれぬ造形手法の滑脱さは、本邦塔婆中の異色と云ふべきである。各層とも軒はすべて二軒角繁樺、斗拱の中備は初層は各間に斗束を立てゝあるが、二層、三層には中央間のみこれを用ひ、柱間の狭い兩脇間には用ひてゐない。かゝる繁簡よ

揃へる關係上初層は淺く
上層は深くなり、斗拱は
上層の深い軒を支へるた
めの三手先組に對して初
層の淺い軒は出三斗と云
ふ塔婆斗拱としては異例
な處理をなさしめてある
が、この機械的な整一さ

ろしきを得た處置も味ふべきであらう。斗拱に於て注意すべきは、隅行肘木上に斗を用ひず肘木の成を高くした特殊な肘木を用ひて收めてゐる點である。かゝる隅の處理も他に類例を見ない特異な手法として注意される。

相輪は九輪が小さく厚みが薄いのも輕快でいゝ。上層の屋根勾配は緩かゞこれもこの塔の典麗な美しさをたすけてゐるが、明治修理前の寫眞や實測圖を見るとこの屋垂みには照り起りがある。照りとは下反りを、起りとはなだらかな隆起を云ふが、照り起りとは一度なだらかに隆起してその裾が下反りに反り上つた曲線(下圖參照)で、平安朝に於て好んで行はれた美しい屋根曲線である。〔工學博士天國實氏「日本建築屋蓋の反曲輪」についで「建築史」第一卷第四號(昭和十四年七月)〕

月。これはこの塔の北にある北圓堂承元四年再興の屋垂にはいまも見る事が出来、これによれば嘗てこの塔や北圓堂が藤原時代の遺構と考へられたのも故なしとしないが、古い傳統を持つたこの寺の工匠等はかうした古く美しい手法を鎌倉期に至るまで持ち傳へてゐたこと



挿圖二五 醍醐寺五重塔初層心柱圓板に描かれた寶塔(天沼博士圖)

は貴いことである。いまこの手法の明確に認められる遺構として古いものでは北圓堂の他には播磨一乘寺の三重塔承安元年があるが、この塔のこの貴重な手法が明治の修理に於て失はれたのは惜しい。

次にこの塔に於て注意すべきは初層内部の極彩色の莊嚴である。塔内は四周一間通りを外陣とし、四天柱内に須彌壇を置いてゐる。そして須彌壇上は各四天柱から中心に向つて對角線狀に板障壁を設け、あたかも三面鏡の如くしつらはれた各面には夫々千體佛を描いてゐるのである。これについて『興福寺濫觴記』に

- 東 藥師一千佛
- 南 釋迦一千佛
- 本尊
- 西 彌陀一千佛
- 北 彌勒一千佛

四千佛繪像、四方四面畫之

とあるから、千佛繪を以て四方佛を表したものである。四方佛の表現としては他に類例を見ぬ特異な考案であらう。千佛は一面に二十五段、一段に四十體づゝ並んで

ゐるから文字通りそれは千體ある。

外陣の床は拭板敷、天井を折上小組天井としてゐるが、この天井・柱・板壁・長押等内部全體に互つて寶相華を極彩してゐる。扉繪は八方天で現に西面の北扉には水天像を見ることが出来る。しかし以上の彩畫はすべてに互つて剝落が著しいのは惜しまれる。

参考文献

- 天沼俊一 唐招提寺講堂と興福寺三重塔の修理の年月に就て 大和史學第二卷第一號 大正十三年五月
足立康 興福寺三重塔の焼失年代 寶雲 第二册 昭和七年四月
田中重久 興福寺三重塔壁畫の研究 古代文化第十二卷第一號 昭和十七年一月

百濟寺三重塔

百濟寺は『日本書紀』舒明天皇即位十一年條に

秋七月、詔曰、今年造_二作大官及大寺_一、則以_二百濟川側_一、爲_二官處_一、是以西民造_二宮、東民作_二寺_一、便以_二書直縣_一、爲_二大匠_一、

十二月、是月、於_二百濟川側_一建_二九重塔_一、

とあり、百濟川東岸の民を以て建てしめられたと云ふ當代の大寺であつた。『大安寺伽藍縁起流記資財帳』や『三代實錄』天慶四年十月條によれば、この寺の創立は推古天皇の御代聖德太子が平群郡の熊凝に起した熊凝精舎の由緒を次いで建造せられたものであると云ひ、天武天皇の御代に至つて更に高市郡に移されて大官大寺となつたと云ふ。大官大寺はその後平城京に移つて大安寺となるものであるから、これによれば百濟寺は大安寺の遠い法燈につながる寺である。

ところが堂塔の造營に當つて子部の神林いま備前平野村飯高にある子部神社から取材したので、神嶺

に逢つて造營後幾許もなく火災を受けた。その後皇極天皇元年、天智天皇七年に屢々構修の事があつたと

挿圖二六 百濟寺三重塔修理前



は三重塔一つを残して無住の末、廢寺となつてしまつた。福住吉次郎氏の歌集「な

云ふが「大安寺資財帳」、
三代實錄」
その後の沿革は詳かでない。天保十二年多武峯の執事華上院宣賀の撰述せる縁起によれば慶長の頃には塔一基坊舎六宇を有したが、天保の頃には坊舎は二坊となつてゐたとあり、寺運の衰退は留むる術もなく、明治に入つて

らやま」の中に

蔓くづれ荒れにあれたるあら、ぎのかたむきたてる百濟寺かも

と云ふ一首があるが、塔も三重目の屋根は半ば落ち崩れ、まことにすさまじいものであつた。大和の古塔はいまはすべて明治卅年以來の國寶保存修理を了へて、美しくのびやかな姿となつてゐるが、多くの塔はかなりの荒れを呈してはゐた。しかしこの塔ほどすさまじい状況となつてゐたものはなかつた。

しかし今は大正五年二月から同六年九月に至る保存法による修造によつて全構の全きを得、寺も廢された寺號を復して更生した。だが百濟大寺の傍は逐ふべくもなく、荒涼たる寺域にしらじらと明粧された塔一基亭々として孤立する様は却つてうを寒い風景である。

寺へは關西急行鐵道の參宮線松塚驛から北行十町許りで、松塚驛に下り立つて北を望むと水田を距てた森かげに塔の相輪が隠見してゐる。

さて本塔の建立年代については寺史の缺除と共に目下のところ不明に歸してゐる

が、様式的にみれば鎌倉中期頃に造立せられたものと考へられる。その後の沿革について、も悉知されるものはないが、大正の修理に於て検出せられた平瓦に

百濟寺塔瓦上初

本者木瓦ニテ候處後代タメニトテ

土瓦ナス寛正二年癸未二月十二日初

右筆者東坊定弘金剛佛子一和將也

と刻銘されたものがあり、當初木瓦葺であつたのを寛正四年に瓦葺に改めたことが記されてゐた。木瓦と云ふのは木製瓦の意であるが、他の瓦銘によればこの時の瓦は室町初期の大和の一流瓦師として、法隆寺の諸堂を初め唐招提寺講堂、靈山寺本堂同鎮守や遠く播磨一乗寺塔の造瓦に従つたかの西ノ京の瓦大工二代目橋吉重によつて造られてゐる。次いで元和五年に屋根葺替があつたが、延寶三年にはかなりの修理を受けてゐる。この修理については天保十二年多武峯僧宣賀の録せる百濟寺縁起に

延寶三年寺塔破壊更甚矣吾山^{多武}大衆等以爲^{食邑末寺}不堪^{慨歎}、共戮^力乃令^安

養院覺梁、妙覺院盛譽爲^{堂塔}修理司、

同年六月落成三級塔婆之鑪盤、洛陽鑄師近藤丹波掾之所造

とあつて露盤を改鑄した由が記されてゐるが、現に伏鉢にも

鑄師洛陽三條釜之座近藤丹波掾作

和州百濟寺塔九輪

延寶三年卯月二日

と刻銘があつてこれに照應し、初層西北地隅木に次の墨書があつて、その時の關係者名を列記してゐる。

南面

此塔取初建立之年記不分明矣至延寶三年卯卯月二日而修理焉

奉行安養院法印覺梁本願當寺中之坊有遍阿闍梨位

妙覺院盛譽

北面

下奉行小嶋吉右衛門

吉田清左衛門

早暮留鹽山幸房

銀奉行戸田久米介重春

～兵中村口車
少平～兵中二中
～兵中村口車

上端

八井内 九兵衛

七兵衛

大工長左衛門

八右衛門

喜兵衛

久五郎

五兵衛

新介

百濟

新 甚兵衛

神主村 庄介

市八 清二郎

又五郎

木挽市場仁右衛門太郎兵へ 二條村長介廣瀬久兵へ

猶瓦銘によればこの時の瓦は曾我村の佐兵衛が主宰して造つてゐる。

その後の修理については心柱受盤上補架盤の内南方材の南面に淵口村の大工五名と森村の瓦師とによつて天明七年六月に修理があつた由が墨記され、三重目小屋組中欄柵北側南面には文政拾二年四月伊三郎外二名の大工によつて修理のあつた由墨記されてゐたが、鬼瓦には「天保十年亥五月日」「瓦五」の刻銘を有するものがあつたから、天保十年頃屋根瓦には補足があつたかもしれない。

塔は初層四方に廻縁を有し、各層中央間を板扉、兩脇間を欄窓とし、斗拱は和様

三手先、軒二重角繁極の定形である。初層内部は四天柱内に黒漆塗の須彌壇を置き、天井は四天柱内折上小組格天井、外陣は桿縁天井である。大正の修理に於て三重目南側屋根平瓦下から、延寶修理の本願宥遍が墨書紙片を發見した。

奉納百濟寺塔九輪寶珠

舍利十三粒

爲三界萬靈從類眷屬

慈母七世之

父母三世十方一切含

生

死有處

乃至法界平等利益

敬白

延寶三年五月日住山之砌 當住

願主 阿闍梨 宥 遍

即ちこれによつて當時この塔の舍利が九輪の寶珠に收められたことが知られる。

靈山寺三重塔

靈山寺は關西急行鐵道大阪奈良線鷓鴣邑驛の南廿町許りにありこの地方での名刹である。寺には三重塔の他に弘安六年再興の本堂棟、室町初期の鐘樓、又至徳元年造立の舊鎮守祠十六神社本殿並びに脇殿本殿棟等の國寶建築物、十數體の國寶佛を存する。寺の草創は詳かでないが、正嘉二年の鳥見庄預所下知狀に

當寺者、行基菩薩爲濟生利物所草創之道場也、本佛者醫王靈像、爲除病延命所安置如來也

とあるのがこの寺の草創記の最も古いものであらう。こゝに行基云々と云ふのはこの寺を以てかの行基建立の富美院に當てようとするものであらうが、この寺には奈良朝草創寺院としての遺物の上での憑證はないので、この傳にははかに信じ難いものがある。

塔の建立についても何等の依據はないが、様式上恐らく鎌倉中期頃の建立であら

うと説かれてゐる。

この寺には年預によつて延寶七年から幕末まで書を繼がれた「靈山寺諸事記録」と稱する日記があるが、その享保四年條の南都奉行所に宛てた寺内明細書の寫に

一、塔三重 貳間四面屋根厚板葺

本尊 阿彌陀如來立像御長貳尺 雲慶作

四天王立像御長壹尺 同作

表五大尊裏涅槃像 金岡筆

とあり、四天王によつて護持された阿彌陀如來を本尊としてゐたもので、像はいま寶藏に移安せられてゐる。ところが、四天王像には各像臺座裏に次の如き墨書がある。即ち増長天には

下縁ニ 南増長「文和五年丙卯月廿八日」御塔供養也」南都之（檢）礼人舞」

内面ニ 御導師招提寺之「御長老覺禪上人」

格間内面ニ 和州添下郡鳥見「庄靈山寺三重塔」

底部ニ ルサエノ ヒノエ 三月日「サル 三月」

の墨書があり、廣目天臺座には

廣目 西「文和五年」ヒノエサル」三月 日 花押

又多門天臺座に

靈山寺「御塔之」四天王「多門北」

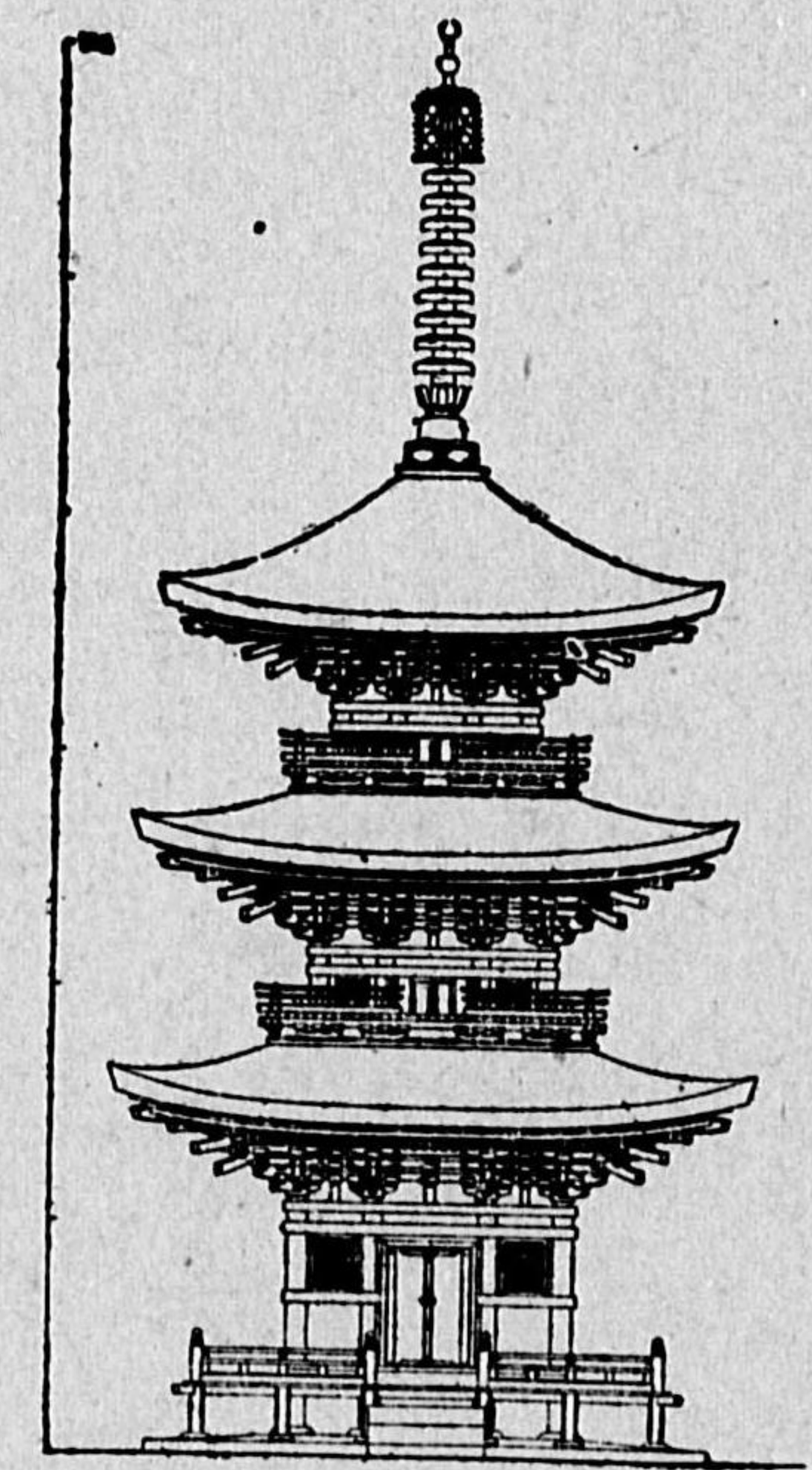
持國天臺座に

文和五年」三月 日 花押「ヒノエサル」東持國

とあつて、文和五年に造顯供養せられたことが示される。従つて或ひはこれによつて塔の建立年代をこの直前に考ふべきかもしれない。覺禪は唐招提寺第卅三世、中興第十三世の長老である。本尊には銘記を見ないが、これはさほど古いものではない。塔の本尊としては阿彌陀は不審であるから、後の比當であらうか。

江戸時代には屢次の修理を施されたことが諸事記録に見えてゐる。大正三年一月から同四年六月に及ぶ保存法による修理前にはかなりの荒れを呈してゐる。屋根も初層棧瓦葺、二層は柿葺、三層は檜皮葺と云ふその時々、の便宜的な修理のさまを示したものであつたが、檜皮葺によつて統一され輕妙な風姿となつてゐる。しかし、二

層以上が殆んど新材を以て補はれてゐるのは、塔下に立つて仰ぎ見る者に古建築としては一抔のわびしさを感せしめる。軒は二層の繊細な木割の繁樺を配し、斗拱は各重とも三手先、中備は初層と二層三層との中央間とにのみ間斗束を置いてゐる。



挿圖二七 靈山寺三重塔實測圖

る。柱間は各層中央間を板扉とし、兩脇間は欄窓である。

塔内は四天柱なく、中央に黒漆塗の美しい須彌壇を置き、壇後に來迎壁を設けてゐる。天井は、外陣小組格天井で、壇上は折上げとしてゐる。そして天井、長押、來迎壁廻りのすべてに極彩色の莊嚴を施してゐるのは素晴らしい。天井、長押等には

初重には擬寶珠勾欄をめぐらし、二重・三重は撥勾欄を用ひてゐるが、面白い事は勾欄腰組の三斗が隅で鬼斗を用ひてゐる事である。かゝる精緻な手法は前記の百濟寺塔にも用ひられてゐる。

寶相華文を、來迎柱、同長押には佛像、飛天等を配し、來迎壁は正面には五大明王、背面には涅槃を描き、四面の扉内面には八天像を描いてゐる。しかし、これらの彩畫には後補もあるが、保存は概ね良好で、よく當初の状況を存してゐるのはい。このうち最も彩畫の良好な伊舍那天と帝釋天とを描いた扉の一組は奈良帝室博物館に寄託せられてゐる。この寺の記録や和州寺社記等がこの壁畫を巨勢金岡の筆だと記してゐるのは、もとより一片の巷説に過ぎぬが、この壁畫の見事さが生んだ話柄として微笑される。

興福寺五重塔

奈良に入るに先だつて第一に旅人の目を射るものは、一に若草山、二に大佛殿の菟。三にはこの五重塔の遠望であらう。この五重塔ほど古都の景觀に多様性を興へてゐるものはない。

興福寺は藤原氏の氏寺として一門の勢を以て平城筑都後間もなく造營に着手されたものであるが、この塔は天平二年四月光明皇后の御願によつて建立されたものであつた。

山階流記によれば皇后御親ら寺に至つて簀を以て土を運び給ひ俱奉の公主夫人令婦媛等みなこれに倣ひ、近衛大將藤原房前は文武百官を率ゐて四部衆と共に杵を下して基を築き、一ヶ年を費して成つたと記されてゐる。造營の盛以てみるべきであらう。かくして創建せられた塔婆の形状は寶字記に「高十五丈一尺。第五重已下十丈。伏盤已上五尺一尺」とあり、また樺や高欄には鋸金具を裝打し、二層以上の各

層には水晶の舍利塔と垢淨光陀羅尼經とを置き、初層には塑土を以て四佛の淨土變を作立したとある。四佛淨土變は殊に善美なものであつたらしく、流記に

東方藥師淨土變

藥師一軀。脇侍菩薩二軀。延曆記云。并金色也。羅漢二口。延曆記河羅舍利佛像。神王八口。延曆記云。已上漆色。薄山火爐一

口。在花臺。延曆記云金銅。延曆記加注云。補寫并像六口。弘仁記不注之。

南方釋迦淨土變

釋迦佛像一軀。脇士菩薩二軀。延曆記云。并金色也。羅漢像六軀。淨飯王像一軀。從者八口。今勅七口。摩耶夫人

形一軀。從女七人。八部神像。神王像二口。延曆記并居小吳床。金剛力士形二軀。延曆記。金剛力士各一軀。國王形三人。

延曆記蝦夷形一人。延曆記。毛人波羅門人形一人。師子形二軀。已上彩色。延曆加記云。新羅人形一口。太子形

一口。

西方阿彌陀淨土變

彌陀佛像一軀。脇士菩薩等廿二。白金也。延曆記脇侍二菩薩佛像二軀。已上金色。音樂菩薩八軀。

弘仁不記持化佛菩薩像二軀。花座菩薩八軀云云。種種鳥形十翼。延曆命々鳥二翼。持銅鈸

子鶴形二翼。已上四鳥。弘仁記不記。孔雀形二翼。鸚鵡形二翼。鵝形二翼。已上彩色。花木四根。延曆記云。寶樹二柱。

薄山火爐一具。在三花臺。延曆金銅云云。

北方彌勒淨土變

彌勒像一軀。菩薩六口。二金色。延曆記云。脇侍菩薩像二軀。已上金色。圍繞菩薩四軀。云云。絹

漢像四口。天人形十二人。延曆記云。樂天形十人。合樂天一二口。牢度跋提神形一人。持花神王形二口。薄山火爐一具。在三花臺。延曆金銅。弘仁不記。

每方華樹二柱。延曆記云。寶樹八株。每角神王形一鋪。延曆四天王像四軀。已上彩色。音聲菩薩以下。或立或居。左右

分別云云。

と記されてゐる。以てその莊嚴な鋪設をみるべきであらう。またこの記は完備した塔基四面の造像としていまわれわれに残された最も詳細な記録であることも注意すべきで、上代塔の四方佛土の状態を推すべき貴重な所見である。

當初、塔は聖武天皇の御願になる東金堂と共にあたかも法起寺式の寺院の如く廻廊を以て囲まれた一劃をなして存した。

その後創建塔は寛仁元年六月廿二日雷火のため焼失し、長元四年十月廿日再建されたが「中右記」「山階流記」等、それも永承元年十二月廿四日焼失し「造興福寺記」「興福寺由來記」ところが治承四年十二月廿八日かの平重衡の南都日再建をみた。

攻略の兵火に逢つた。「玉麈」「山」この後の再建年代は詳かでないが、恐らく遠からずして再建を遂げたことであらう。爾後鎌倉時代は事なく過ぎたが、吉野時代に入つて正平十一年(延文元年)二月十七日雷火に遭つた。「法隆寺別當記」正平變羅災後の再建は文中三年(應安七年)頃から始められたが「細々要記」はかばかしく工程は進捗せず廿數年を費して應永六年二月十一日上棟を遂げた。しかしそれも東の間、同十八年春日西塔に雷火あがると見るに飛火を蒙つて炎上してしまつた。「興福寺略年代記」東金堂本尊書座としてその卅三年六月廿七日再建をみたのが現存の塔である。「玉麈」「開書」

再建後は寛永十七年六月十八日落雷を蒙つたことがあるが、幸ひに炎上を免れ、正保元年六月修理を施された。明治の初年この塔が五十圓、かの三重塔が三十圓かで賣りに出され賣手もきまつて危く地上から姿を消さんとしたことは維新直後の廢佛毀却の無謀さを物語る有名な話となつてゐるが、幸ひに毀却を免れたことは日本文化史上の幸運であつた。後塔は明治三十三年七月から同三十四年十二月に及んで保存法による根本修理を受けてゐる。

總高百六十尺餘、わが國現存塔婆中京都東寺の五重塔の百八十三尺七寸に亞ぐ高塔である。

しかし同一平面に於ては創建塔が百五十一尺であつたことを思ふと、この應永塔は約十尺も高くなつてゐる。塔婆の高さが後のものほど高險になる事は前に述べたが、これはそれを示すよい例であらう。だがこの塔が室町塔としては極めて復古的である事はその比例に次の如く現れてゐる。

	塔身/一邊	塔身/相輪	備考
瑠璃光寺塔	四・三六	〇・二七	應永十一年起
嚴島神社塔	四・六九	〇・二九	嘉吉二年竣成
法觀寺塔	四・二八	〇・三五	應永十四年
本塔	三・九五	〇・四三	永享十二年
			應永卅三年

塔は壇上積の基壇上に立ち、各層中央間を板扉、兩脇間は櫺窓、軒二重角繁極、斗拱和様三手先、あらゆる細部はよく格の通つて堂々たるものである。地極が四隅を大きく丸めて、あたかも楕圓形断面の如くなつてゐるのは古い圓極の形式を受け

たもので、この塔の復古的な意圖を現すものである。

各層四面に木額のかゝつてゐるのは、法隆寺塔に於て述べたと同じく避雷符である。初層内部は土間床上四天柱間に四方勾欄付の素木の須彌壇を置き、同時の造顯になる木彫漆箔の各三尊形式の四佛坐像を安置してゐる。天井は折上組入天井である。

塔前には天平創建當初の石燈籠の臺座と覺しきものがあり注意される。

本塔は室町初期の造立と云ふ比較的新しいものではあるが、和様の正統的な手法を以て造建された風姿は古典的な端正さと健強さと持ち、わが國古塔中の一典型をなすものである。

参考文献

大岡 實 興福寺建築論

建築雜誌第五〇五號

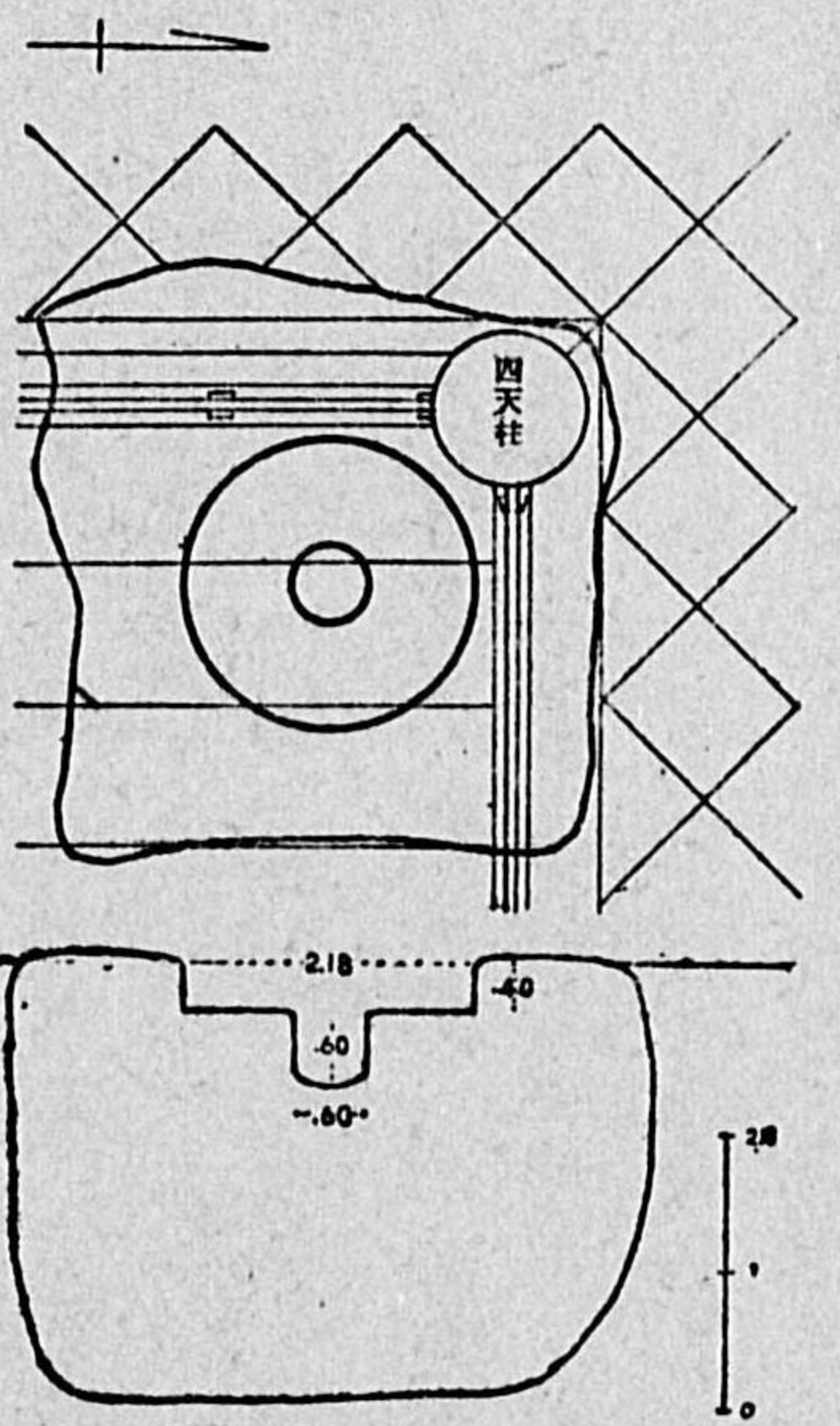
昭和二年一月

南法華寺三重塔

南法華寺、壺坂寺と云へば淨瑠璃壺坂靈驗記の事が直ちに思ひ出されるであらう。中世以降觀音の靈場西國三十三所中 第六番札所として榮えた寺である。寺は高取の町から急坂を登ること十町餘、鷹嶺山の山頂に近く松林に囲まれた一平地に三重塔を中心として伽藍を横たへる。

寺の創立は詳かでないが、『拾芥抄』は大寶三年南都の僧道基の創立と云ひ、『帝王編年記』は「文武天皇二年佐伯姫足子入道尼名善心の建立」と記し、『和州寺社記』には「文武天皇の御宇に開き初め給ひしを其後元正天皇御願所とし給ふ。開基は本元興寺に住給ひし海辨僧正也」とある。元祿に撰述された伽藍開基記はこれらの諸説を折衷してゐるが、要するに以上がその創立の年代として文武朝を當ててゐる事は注意してよからう。これはこの寺域の出土瓦の示す年代とも略々一致するも

のであるから、以上の後世の諸記の傳承する年代は恐らくその年代として大過なきに近からう。



挿圖二八 南法華寺三重塔舊心礎

従つて塔もその頃に起立せられたものと考へられる。いま四天柱礎として二段凹式の舍利穴を有する見事な舊心礎が用ひられてゐるが、この創建の遺物もこの塔の建初年代をやはりその頃に置かしめる

様である。

『壺坂古老傳』に

永久三年正月廿六日始同三年三月三日立心柱願主越中擬講良慶文治二年四月廿三日供養阿闍梨寂尊

とあり、鎌倉初葉再建の事があつた様である。しかしいまの塔は『大乘院寺社雜事

記』明應六年四月十七日の條に

一壺坂南法華寺、塔供養、導師高野山明王院云々、當寺者法相宗兼真言也、別當ハ一乘院殿也、學頭陽專房法印權大僧都也、以學頭可清于導師事也、

と見え、猶その後重興されたものである。しかし先年の修理に於て二重目南側の西

挿圖二九 南法華寺三重塔二重目南側西より二番目柱上二手先尾樞受斗敷面の墨書(%)

文明十二年

七月廿五日

ナラミキキ

より二番目の柱上斗拱中二手先尾樞受樞の敷面に文明十二年云々の墨書を發見したから、この再建は文明十二年前から施工されてゐたものらしい。例へばこの墨書が當時二重目を施工中であつた事を示すものとすれば、明應六年の落慶はその十八年後に當り、この工事の遅延は當時

の社會不安が反映したものでなからうか。落慶後の沿革については延寶・寶永の修理を受けて來たことが次の各部の墨書によつて知られる。

延寶修理墨書

・初層西北隅木墨書

1 右側面に 一行に

此塔最初建立之年記不分明矣至延寶三年卯卯月二日而修理焉

奉行 安養院法院覺榮
妙覺院盛春

本願

2 上端面に

八升内 九兵衛 七兵衛 大工長右門 八右衛 喜兵衛 久五郎
又五郎

五兵衛 新介百濟 新 甚兵衛 神主村
市八 庄介 清二郎

木挽市場仁右門 太郎 兵衛 二條村長介廣瀬久兵衛

3 左側面に

下奉行 小嶋吉右衛門 吉田清左衛門 早暴前鹽山幸房 豊彦中村口車

銀奉行 戸田久米介重春 少平豊彦道二兵衛

豊彦十洲十洲村新野

・初重天井裏板裏面墨書

1 者□目小兵衛正重延寶四年丙辰年七月吉日廻り年預東坊

2 延寶四年辰ノ七月日 右□□ 春識房

寶永修理墨書

・心柱墨書 三重東南面

寶永七寅卯月普請爲之

棟梁 伊右門

肝入 左平

・初重東北野隅木墨書

寶永七庚寅季五月

以大衆功力修造寶塔訖 且以參錢等佛物助成之

・三重支輪墨書

寶永七庚寅歲五月日

大工土佐町河合伊右門

・三重西南野隅木墨書 東面

以巡禮參錢入物

奉修理寶塔庚寅五月吉日
寶永七年

・三重裏甲裏面墨書

1 寶永七庚寅年卯月吉日

大工吉野檜垣本住人

佐野六兵衛

佐野忠兵衛

2 寶永七寅歲四月 日

・發見間竿墨書

寶塔御用材木屋檜垣本村庄司四郎兵衛 材木間屋

同村岩本九兵衛天工同村佐野六郎兵衛 佐野忠

兵衛 瓦屋同村野木重兵衛 寶永七庚寅六月日

・棟札 長一尺四寸八分・天出五寸・尻四寸五分・厚四分五厘

表

銘曰南法華寺壺坂山中擬 講建塔永久年中僧徒修理寶永年中玉珞山上□ □空中

(梵字ア) 奉修理寶塔爲佛法紹隆者也

金脂方圓現浮圖中王心數 在制底中 法界曼□存三級中助資相續永照國中

寶永七庚寅年孟秋吉祥日

裏

一山大衆稽首

天和貞享以來本堂鐘樓三門等

三十年來修理畢今年首春正月 于時十二坊

至夏六月未寶塔修造畢 是偏

佛神擁護之致處僧侶深信致處右何□以錢修理訖

・風鐸銘

寶永七寅五月日

大内坊 寶珠院 千手院
内證院 松室院 南之坊
文珠院 藏之坊 辻之坊
眞坊 淨土院 不動院
時之巧匠 觀覺寺 伊右衛門等

最近に於ては大正十五年二月から昭和二年八月に亙つて保存法による解體修理を

遂げ建初の明粧に復してゐる。

塔は谷落積に高い基壇上に立ち南北二面に石階を有する。各層とも軸部は中央間を扉、兩脇間を櫺窓とし、斗拱は和様三手先軒二重角榑、二層以上には四方に折廻勾欄を付けてゐる。屋根は本瓦葺で、相輪は青銅製である。初層内部には中央に素木造の須彌壇を設け、床は四半石敷、天井は四天柱内格天井、外陣は棹縁天井である。裝飾は内外部共木部丹塗、但し木口は黄土、格間及椀間は胡粉、連子は群青塗である。

全構の比例もさして悪くなく、細部の手法も手堅く、建築的には極くまじめな塔である。

参考文献

拙

稿

南法華寺三重塔の再建年代について

大和志第五卷第八號

昭和十三年八月

安樂寺 三重塔

關西急行鐵道吉野線の葛驛で下りて戸毛トウゲの部落を抜けて御所街道に出ると稻戸イナドの部落が山を負うて左手にあるが、その山寄りの部落の奥に、安樂寺と云ふ眞言宗の寺がある。寺の横に赤い鳥居があつて猶奥に御靈神社の杜が見えるが、御靈神社の後に廻ると、安樂寺の所管に屬し大日塔と稱する寶形の小宇がある。しかし寶形の頂上に露盤寶珠を上げた本瓦葺の小宇が、近寄つて細部を見るに及んで一驚を喫しなければならぬ。

それはその小宇が室町中期頃の様式を持つ三重塔の初層に寶形の屋根を冠したものであるからである。柱間は方十四尺七寸、うち中央間は五尺五寸、兩脇間は四尺六寸あり、いま正面と左側面にしか縁を存しないが、もとは右側面にもあつた形迹がある。しかし背面は側柱から三尺ほどあつて、一大磐石が迫つてゐるので、これには縁を附する餘地はなく、又柱にも縁の形迹を存しないから、こゝには當初から